松山市文化財調査報告書 83

播磨塚天神山古墳

2001

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

播磨塚天神山古墳

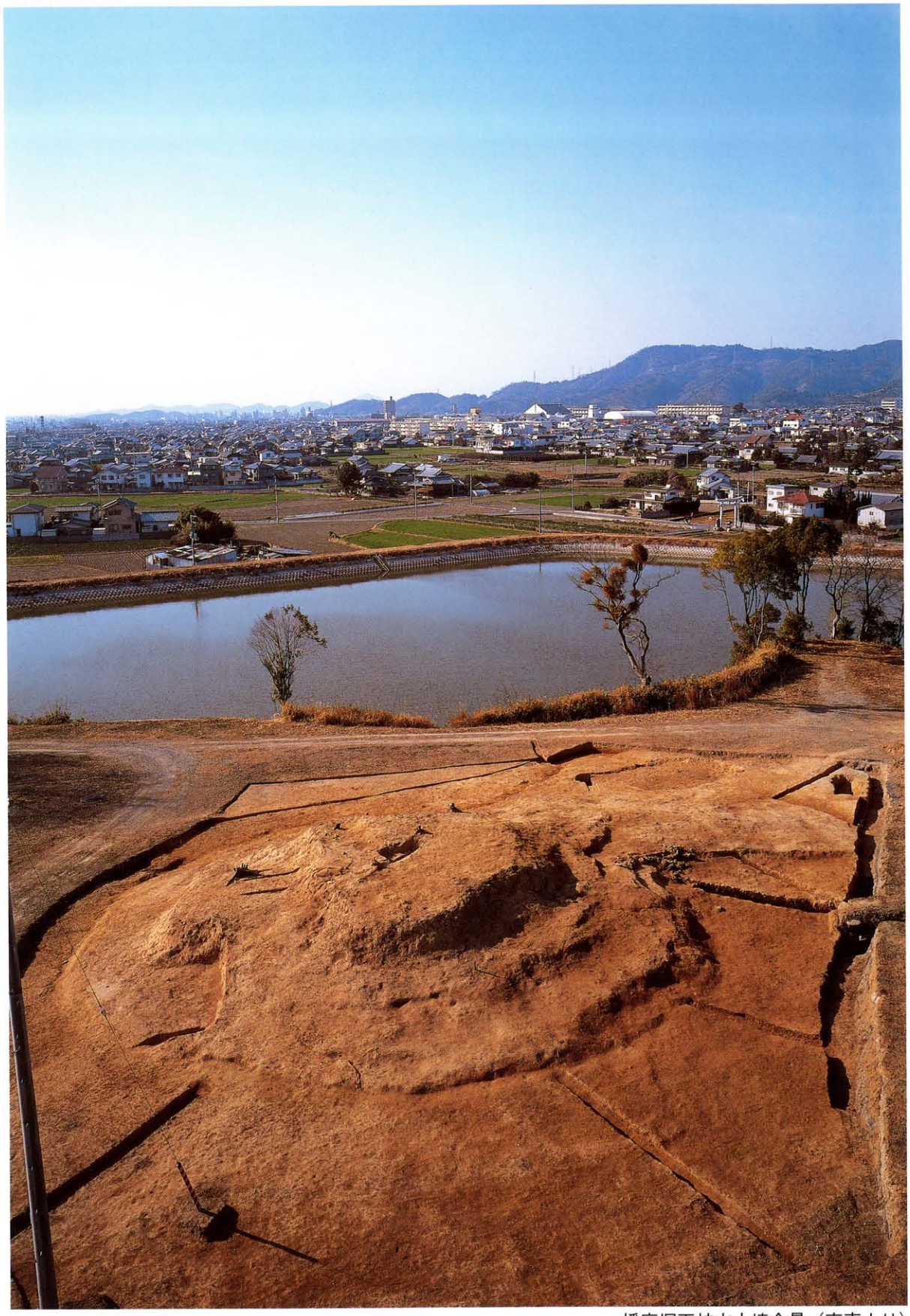
2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１



播磨塚天神山古墳全景（南東より）

巻頭図版 2

墳丘出土遺物

序

松山市の所在する松山平野は、西を瀬戸内海の斎灘・伊予灘に面した県下最大の沖積平野で、古来より海上交通における要衝の地であったと考えられます。そのため文化的交流が盛んで、たくさんの人々が生活していたことが発掘調査により確認されています。

今回実施された播磨塚天神山古墳の調査においても、古墳時代における松山平野の一側面を垣間見ることができました。調査の結果、天神山古墳が前方後円墳であることが判明しており、葉佐池古墳の鎮座する小野地区に、また新たなる首長墓の存在が明らかになりました。石室は盗掘によって破壊されていましたが、わずかに残された金銅製品は、どれも稀に見る優品ばかりで当時の華やかさを彷彿とさせてくれます。また、墳丘周辺より出土した埴輪は、平野内でこれまでに例を見ないほど多量なものです。

このような成果をあげることができましたのも、関係者各位の皆様の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚く御礼を申し上げます。

天神山古墳の発見は、いまだ地中に眠っている未知なる埋蔵文化財の存在を私たちに知らせてくれました。松山市には、まだまだ貴重な遺跡が数多く残されていると考えられます。埋蔵文化財の保護ならびに発掘調査に対する一層のご理解とご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の糧となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成13年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　中村時広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成10年12月１日から平成11年８月にかけて実施した松山市南梅本町甲417番地外に所在する播磨塚天神山古墳の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した方位は磁北である。

3．遺構および遺物出土状況の実測は、発掘担当調査員および山本健一、河野史知、小笠原善治、岡崎政信、栗林和孝、保島秀幸が担当し、作図・製図は調査員および丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子が行った。

4．遺物の接合および復元は丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美、青野茂子、渡部英子、徳田弘子、西川千秋、松本美代子が行い、実測・製図は丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美が担当した。

5．遺構の写真は栗田茂敏、大西朋子が行い、遺物撮影および写真レイアウトは大西朋子が行った。

6．出土金属製品に関しては山本健一、２号石室出土人骨（歯）に関しては小笠原善治、古代～中世に属する遺物に関しては栗田正芳、宮内慎一の協力を得た。また須恵器に関しては栗田茂敏、山之内志郎、埴輪に関しては青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所）、藤川智之（財団法人徳島県埋蔵文化財センター）、山内英樹（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）の助言を得、１号石室内出土金銅製品に関しては、前園実知雄（奈良芸術短期大学）、姜仁求（韓国精神文化研究院）、岡田敏彦（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）の指導を賜った。

7．本書にかかわる遺物および記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されている。

8．本書の執筆・編集は、栗田茂敏の指導のもと吉岡和哉が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
1．調査に至る経緯……1
2．調査の経過……1
3．調査・刊行組織……2
4．調査日誌……3

第Ⅱ章　古墳の立地と環境
1．古墳をめぐる自然環境……5
2．古墳名称の由来と歴史環境……5

第Ⅲ章　調査の手順と方法
1．調査以前の墳丘……10
2．調査地削平状況と埴輪出土地点の調査……10
3．調査の方法……12
4．調査グリットの設定……15

第Ⅳ章　墳　丘
1．立地……16
2．築造過程……16
3．盛土単位……18
4．規模と形態……32

第Ⅴ章　墳丘出土遺物
1．トレンチ出土遺物……36
2．東くびれ部円筒埴輪列・須恵器大甕……36
3．墳裾周辺流土内出土遺物……39

第Ⅵ章　石室の構造と出土遺物
1．中心主体（1号石室）……74
2．小型竪穴式石室（2号石室）……85

第Ⅶ章　古墳に直接伴わない遺物
1．弥生時代以前の遺物……90
2．古代以降の遺物……90

第Ⅷ章　科学分析　　㈶元興寺文化財研究所
1．分析内容……92
2．使用機器及び測定条件……92
3．分析結果及び製作技法の推測……92

第Ⅸ章　総　括
1．墳丘……100
2．墳丘出土遺物……100
3．石室……101

挿　図　目　次

第1図　調査地周辺の古墳……6
第2図　調査地位置図……9
第3図　調査前地形測量図……11
第4図　墳丘北側攪乱坑内遺物出土状況……12
第5図　墳丘全測図……13
第6図　トレンチ配置図……14
第7図　グリット配置図……15
第8図　墳丘土層断面図(1)……19～22
第9図　墳丘土層断面図(2)……23～26
第10図　墳丘土層断面図(3)……27～30
第11図　古墳土層断面模式図……31
第12図　墳丘想定復元図……34
第13図　T1遺物出土状況・出土遺物実測図……36
第14図　東くびれ部埴輪列樹立状況……37
第15図　東くびれ部埴輪列完掘状況……38
第16図　円筒埴輪口縁部分類……39
第17図　円筒埴輪タガ分類……39
第18図　円筒埴輪実測図(1)……42
第19図　円筒埴輪実測図(2)……43
第20図　円筒埴輪実測図(3)……44
第21図　円筒埴輪実測図(4)……45
第22図　円筒埴輪実測図(5)……46
第23図　円筒埴輪実測図(6)……47
第24図　円筒埴輪実測図(7)……48

第25図　円筒埴輪実測図(8)……49
第26図　円筒埴輪実測図(9)……50
第27図　円筒埴輪実測図(10)……51
第28図　円筒埴輪実測図(11)……52
第29図　円筒埴輪実測図(12)……53
第30図　円筒埴輪実測図(13)……54
第31図　円筒埴輪実測図(14)……55
第32図　円筒埴輪実測図(15)……56
第33図　円筒埴輪実測図(16)……57
第34図　円筒埴輪実測図(17)・線刻埴輪実測図……58
第35図　盾形埴輪推定復元図１……59
第36図　盾形埴輪推定復元図２……59
第37図　盾形埴輪推定復元図３……59
第38図　形象埴輪実測図(1)……60
第39図　形象埴輪実測図(2)……61
第40図　形象埴輪実測図(3)……62
第41図　形象埴輪実測図(4)……63
第42図　形象埴輪実測図(5)……64
第43図　形象埴輪実測図(6)……65
第44図　形象埴輪実測図(7)……66
第45図　須恵器実測図(1)・土師器実測図……68
第46図　須恵器実測図(2)……69
第47図　須恵器実測図(3)……70
第48図　須恵器実測図(4)……71
第49図　須恵器実測図(5)……72
第50図　須恵器実測図(6)……73
第51図　１号石室測量図(1)……75
第52図　１号石室測量図(2)……76
第53図　１号石室出土遺物実測図(1)……77
第54図　１号石室出土遺物実測図(2)……78
第55図　１号石室出土遺物実測図(3)……79
第56図　１号石室出土遺物実測図(4)……81
第57図　１号石室出土遺物実測図(5)……82
第58図　１号石室出土遺物実測図(6)……83
第59図　剣菱形杏葉推定復元図……84
第60図　２号石室測量図(1)・近世小壺出土状況……86
第61図　２号石室測量図(2)……87
第62図　２号石室測量図(3)・出土遺物実測図(1)……88

第63図　２号石室出土遺物実測図(2)……89
第64図　弥生時代以前出土遺物……90
第65図　古代以降出土遺物……91
第66図　出土遺物取り上げグリット配置図 ……104

表　目　次

表１　XRFによる検出元素 ……92
表２　耳環の法量（単位は㎜）……93
表３　円筒埴輪観察表１ ……105
表４　円筒埴輪観察表２ ……106
表５　円筒埴輪観察表３ ……107
表６　円筒埴輪観察表４ ……108
表７　円筒埴輪観察表５ ……109
表８　円筒埴輪観察表６ ……110
表９　円筒埴輪観察表７ ……111
表10　円筒埴輪観察表８ ……112

写　真　図　版

巻頭図版１　播磨塚天神山古墳全景（南東より）
巻頭図版２　墳丘出土遺物
巻末図版１　播磨塚天神山古墳全景（南より）
巻末図版２　１号石室出土遺物・２号石室出土遺物

図版１　調査前近景（西より）・調査前全景（南東より）
図版２　墳丘北側攪乱坑遺物出土状況（北東より）・東くびれ部遺物出土状況（北東より）
図版３　東くびれ部円筒埴輪列検出状況（東より）・西くびれ部遺物出土状況（北より）
図版４　墳丘全景（北より）
図版５　Ｔ７トレンチ南壁土層（北より）・Ｔ６トレンチ南壁土層（西より）
図版６　Ｔ２トレンチ北壁土層（西より）・Ｔ３トレンチ北壁石室裏込め状況
　　Ｔ３トレンチ南壁土層（東より）
図版７　Ｔ１トレンチ西壁土層（南東より）・Ｔ１トレンチ遺物出土状況（北東より）

図版８　１号石室二次埋葬面（南より）・１号石室二次埋葬面（北より）
　　１号石室一次埋葬面（北より）
図版９　１号石室一次埋葬面（南より）
　　１号石室遺物出土状況（刀子飾金具・剣菱形杏葉・耳環・銀製空玉）
図版10　２号石室検出状況（西より）・２号石室検出状況（東より）・近世小壺出土状況
図版11　墳丘出土遺物(1)　円筒埴輪
図版12　墳丘出土遺物(2)　円筒埴輪
図版13　墳丘出土遺物(3)　円筒埴輪
図版14　墳丘出土遺物(4)　円筒埴輪
図版15　墳丘出土遺物(5)　円筒埴輪・線刻埴輪
図版16　墳丘出土遺物(6)　朝顔形円筒埴輪
図版17　墳丘出土遺物(7)　形象埴輪（盾）
図版18　墳丘出土遺物(8)　形象埴輪（蓋・家）
図版19　墳丘出土遺物(9)　土師器・須恵器
図版20　墳丘出土遺物(10)　須恵器
図版21　墳丘出土遺物(11)　須恵器
図版22　Ｔ１出土遺物・１号石室出土遺物(1)（須恵器・鉄鏃・俵鋲・刀子・鎖）
図版23　１号石室出土遺物(2)（飾金具・鞍橋・鉸具・辻金具）
図版24　１号石室出土遺物(3)（剣菱形杏葉・耳環・刀子飾金具・大刀飾金具）
図版25　１号石室出土遺物(4)（刀子飾金具・銀製空玉）・２号石室出土近世小壺

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経緯

平成10年８月13日、帝京育英財団理事長冲永洋子氏、および松岡覚氏より試掘・確認調査の申請が提出された。宅地開発に伴うもので、申請地は松山市南梅本町甲417番地他22筆、調査対象面積は16,121.04㎡である。

申請地は、平成元年１月24日の段階において、松山市農業土木課より県営老朽ため池等整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査の申請が提出された地域である。加えて同年７月４日には、南梅本地区土地改良区より老朽ため池堤補強採土に伴う埋蔵文化財の確認調査の申請、さらに平成４年１月27日に帝京育英財団・松岡覚氏より埋蔵文化財の試掘・確認調査の申請が提出された地域でもある。それらの申請を受けて、過去に実施した試掘調査の結果、申請地の大部分を占める平坦部に遺構の存在は認められなかった。しかし、申請地のほぼ中央に盛り上がる“高まり”の周囲に須恵器片および埴輪片の散乱した状況が観察され、この“高まり”が古墳である可能性が非常に高く、特にその部分に関して本格調査を実施する必要のあることが判明していた。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「№107　播磨塚古墳群」内に所在する。申請地の東側、約500m離れた位置には播磨塚古墳が南東に開口しており、古墳時代終末期の古墳として広く周知されている。また、その正確な出土状況は明らかでないが、本古墳群内出土遺物として、切子玉６・銀環３・筑紫鉾・獅噛環頭・壺形装飾付台付須恵器・器台などが知られており、なかでも獅噛環頭大刀は県内唯一の出土である。

申請地内に古墳が存在することは過去の調査結果より明確で、申請地の中央に存在する墳丘部分に関して本格調査を実施する運びとなり、平成10年11月２日、財団法人帝京育英財団と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは発掘調査委託業務契約を締結した。

本格調査（野外調査）は帝京育英財団の協力および、松山市教育委員会の指導のもとに平成10年12月１日より平成11年３月31日迄の予定で松山市埋蔵文化財センターが実施した。

2．調査の経過

調査開始当初より天神山古墳の墳形に関しては議論のあったところであるが、調査が進むにつれて、天神山古墳が単なる円墳ではない可能性が高まった。

平成11年１月下旬、くびれ部円筒埴輪列の検出により、当古墳が前方後円形をしていることがあきらかになった。加えて、古墳全体が膨大な量の土砂（流土）によって埋没しており、さらにその最下層に埴輪片を大量に含んでいる事実が判明した。墳形確認調査の結果、当初予定していた約２倍の範囲に調査面積が拡大することが判明し、調査期間の見直しが必要となった。

以上の理由より、松山市埋蔵文化財センターは帝京育英財団に対して調査期間の延期を依頼した。

松山市埋蔵文化財センターの依頼・説明を受け、帝京育英財団は遺跡の重要性を理解し、平成11年６月30日まで調査期間延期の快諾を示した。

平成11年５月13日、報道対象の現地説明会、同年５月15日、市民対象の現地説明会を開催する。

同年５月下旬、既に２月下旬の段階に検出し調査を進めていた１号石室に加え、新たに小型竪穴式石室（２号石室）を検出した。

この時点で、墳丘外側に堆積した流土中から出土する埴輪片が想像以上に多量で調査が思うように進行しなかったこともあり、再度帝京育英財団に対して調査期間の延期を依頼。その結果、平成11年８月31日まで延期することで快諾を得た。

最終的に屋外調査期間を平成10年12月１日～平成11年８月31日までと定め、発掘調査を実施した。

３．調査・刊行組織（平成13年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢陽三
事務局	局長	團上和敬
	局長付参次	森脇　將
	次長	赤星忠男
文化教育課	課長	馬場　洋
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	二宮正昌
	事務局次長	江戸　孝
	事務局次長	森　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　隆
	専門監	野本　力
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	調査員	栗田茂敏　相原浩二　吉岡和哉

発掘作業員

相原勇、岡本克司、岡崎政信、岡良茂、栗林和孝、田中茂樹、友近志郎、高橋邦太、中路勝巳、灘野紀弘、保島秀幸、宮内徹、広田美知子、峯本幸代、矢鋪妙子

整理作業員

丹生谷道代、横田知子、多知川富美子、村上真由美、矢野久子、青野茂子、渡部英子、徳田弘子、西川千秋、松本美代子

4．調査日誌

平成10（1998）年

12月１日
現場作業開始。墳丘周辺を覆い尽くす草木類の伐採除去作業を行う。

12月２日
測量基準杭（業者委託）の設定。

12月３日
墳丘北部より円筒埴輪の集中出土地点発見。

12月４日
調査前（伐採後）、墳丘現況写真の撮影。測量基準杭を墳丘周辺に展開。

12月７日
調査に伴う古墳の供養（長隆寺住職）。

12月８日
測量基準杭の展開作業終了。

12月９日
調査前の墳丘測量開始（10㎝コンタ）。

12月10日
造成土確認のため、墳丘北側に幅１ｍのトレンチを設定する。

12月18日
池の土手改修工事の際の土取りが現地表面から３ｍ以上に及び、同量の造成土が持ち込まれていることを確認し、造成土確認トレンチの掘削を終了。

12月22日
調査前墳丘測量を終了し、墳丘表土の除去作業を開始する。

12月25日
平成10年の野外調査終了。

平成11（1999）年

１月５日
野外調査再開。

１月11～14日
墳丘東側に広がる造成土の範囲を確認する為、重機でトレンチを掘削。このトレンチの土層観察により墳端部及び墳丘から流れ落ちたと考えられる埴輪片を確認し、その位置関係から墳形が単なる円墳とは異なる可能性がでてきた。

１月13日～22日
墳丘北側の埴輪片集中出土箇所に攪乱坑が伴うことが判明。攪乱坑完掘後、その床面に円筒埴が３個体一列に並んだ状態で樹立していることを確認。さらに墳丘北端部が直線的に延びることを確認し、当古墳が前方後円墳である可能性が強まる。これ以後、トレンチを設定し墳形の確認・検出作業を進める。

２月17日
墳丘の周囲に堆積する流土上部を掘り下げることによって墳形を際立たせ、前方後円形を呈する墳丘の検出作業を終了する。高所作業車を用いて上空より写真撮影を実施する。

２月19日
墳丘の周囲に堆積する流土中の下層に包含される遺物の検出作業開始。墳頂部に石室の盗掘にともなう攪乱坑を検出し、掘り下げ作業を開始。

２月26日
新居浜市より「史跡見学ツアー」の参加者来る。

３月２日
前夜、事務所に空き巣が侵入。

３月５日
１号石室攪乱坑を約２ｍ掘り下げた結果、石室側壁及び奥壁が現れる。

３月17日
１号石室内より耳環、高坏脚部片出土。

３月31日
１号石室内より金銅製品類（辻金具・杏葉）出土。

４月22日
墳丘周囲に広がる流土内出土遺物の検出作業終了。出土状況を高所作業車を使って写真に収める。

４月27日
１号石室より刀子飾金具出土。

５月12日
１号石室の二次埋葬面（玉砂利）の検出を終了し、写真撮影を行う。

５月13日
報道記者発表。墳丘測量の開始。

５月15日
現地説明会開催。350人の観衆が集う。

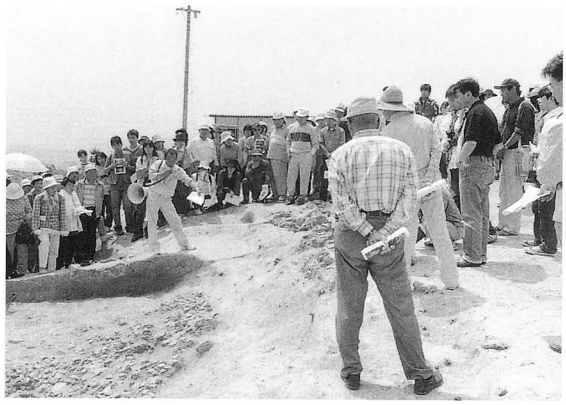
５月20日
ラジコンヘリコプターを用いた写真測量。

５月21日
墳丘主軸に沿ってトレンチを設定し、掘削開始。

５月27日
墳丘測量の終了。後円部の中心から北側に約５ｍ離れた地点において攪乱坑を発見し、内部より２号石室を検出する。

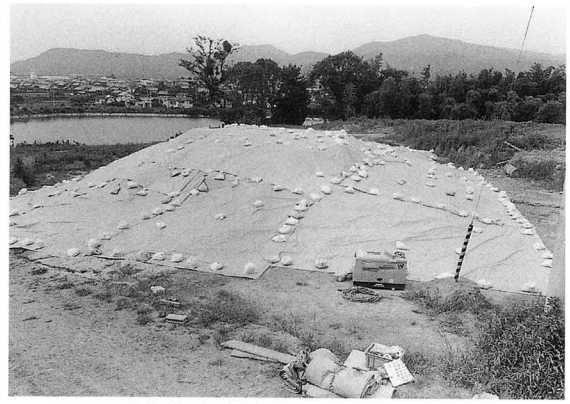
５月28日
Ｔ１内より、土師器壺形土器出土。

5月29日
1号石室二次埋葬面の測量を終了し、掘り下げ作業を開始する。2号石室検出終了。写真撮影後、掘り下げを開始する。
6月16日
1号石室一次埋葬面の検出完了。写真撮影。
6月30日
2号石室、北東コーナーより近世小壺出土。
7月1日
トレンチ土層図および石室実測作業を本格的に開始する。
7月26～29日
台風5号の接近に伴い、野外調査中止。
8月16日
T1完掘。前方部と後円部の接合状況を確認し、写真撮影。
8月19日
石室およびトレンチの埋め戻し作業開始。
9月2日
埋め戻し作業終了。
9月3日
ブルーシートと土のうを用いて墳丘を保護し、野外調査を終了する。
9月6～7日
現場事務所の解体撤去。
9月8日～
室内整理作業。


現地説明会

調査風景

調査風景（埋め戻し作業）


調査後墳丘被覆状況（南より）

第Ⅱ章　古墳の立地と環境

1．古墳をめぐる自然環境

松山平野は、平野のほぼ中央部を西流する重信川（伊予川）と、その支流によって形成された扇状地や氾濫原、三角州性堆積物および海岸部の海浜堆積物などで構成される肥沃な沖積平野である。

播磨塚天神山古墳の所在する小野地域は、松山平野の中でも東部に位置し、重信川の支流である小野川、悪社川および内川によって形成された扇状地が広範に分布する地域である。

天神山古墳は西を悪社川、東を内川によって開析された低平な洪積台地の南西端部、標高81～85mに位置し、墳端部と現水田面の比高差約８ｍを測る。

2．古墳名称の由来と歴史環境

天神山古墳の位置する微高地上には、かつて20基とも30基ともいわれる数の古墳が存在していたといわれ、古くから播磨塚と呼ばれていた。この微高地は明治時代、梨・柑橘類の栽培適地として開墾され、さらには陸上自衛隊松山駐屯地の設営時に削平されている。そのため、過去に存在した古墳のうちそのほとんどが消滅し、現在では当古墳と駐屯地内に７世紀前半と考えられる横穴式石室の一部が残されているにすぎない。

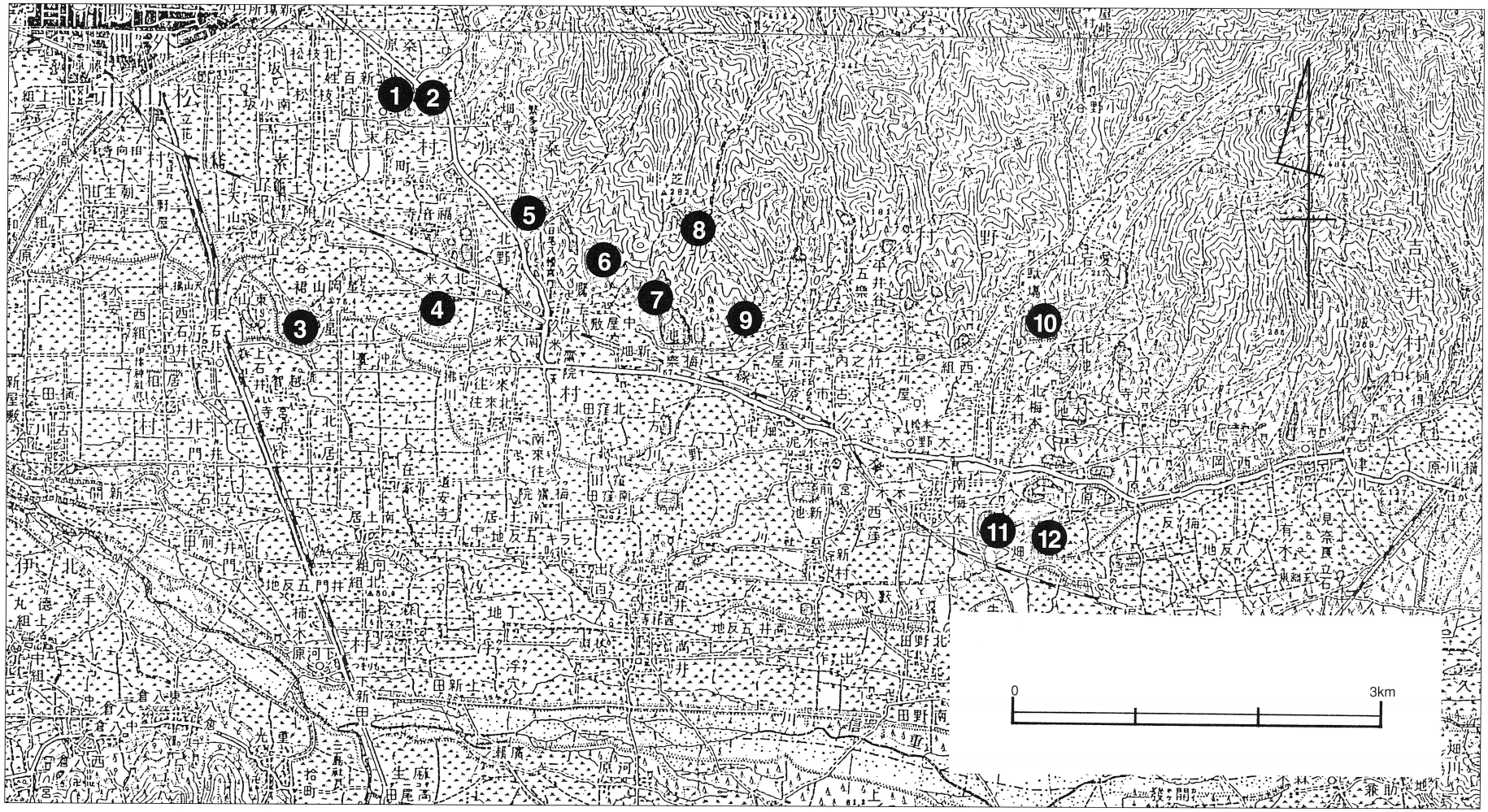
播磨塚という名称は、来目部（久米部）小楯伝承によるもので、この地に播磨国の官人であった小楯の古墳が造られたことに由来する。小楯に関する記載は『播磨国風土記』・『古事記』・『日本書紀』に詳しく、雄略（倭王武）死去後の王位継承問題勃発時に活躍した人物、播磨国で２皇子「億計（仁賢）・弘計（顕宗）」を発見し、その功績により「山部連」を賜り「山官」となった人物として記載されている。

また、当古墳は古くから地元民の信仰の対象とされ、天神様が祀られており通称『天神山』と呼ばれていた。したがって、播磨塚古墳群内に所在する天神山古墳ということから、調査にあたって『播磨塚天神山古墳』と命名した。

播磨塚古墳群が属するエリアは古代久米郡域の東端部付近にあたるものと考えられる。７世紀前半代、久米地域周辺が平野内の権力を掌握したであろうことは、文献資料および発掘調査成果（考古資料）により支持できるところである。私見によれば、当地域の独自性およびその優位性は、遅くとも弥生時代後期には芽生えていたものと考えられ、それは釜ノ口遺跡あるいは東本遺跡周辺に巨大竪穴式住居址群が出現する事実、加えてそれらの集落が破鏡を所有していることより推測できる。以後、古墳時代前期初頭には豪族居館（神殿）が出現し、(注1)中期から後期にかけて前方後円墳が集中して築造されるなど、その独自性は後の段階にも脈々と受け継がれ、古代に至り久米氏の氏寺、来住廃寺跡（国指定史跡）や久米官衙遺跡群の成立へと繋がっていくものと考えられる。

以上のように、旧久米郡域周辺は松山平野のなかでも遺跡密度の高い地域のひとつであるが、ここでは天神山古墳を中心とした地域に所在する主要遺跡、特に天神山古墳の築造年代と前後する時期の首長墓について概観する。

経石山古墳は全長約48.5mの前方後円墳である。築造時期は５世紀後半～末頃と推定されるが、墳



1　経石山古墳　2　三島神社古墳　3　西山古墳　4　二つ塚古墳　5　タンチ山古墳　6　五郎兵衛谷古墳
7　素鷲神社古墳　8　桧山峠７号墳　9　観音山古墳　10　葉佐池古墳　11　播磨塚天神山古墳　12　播磨塚古墳

第１図　調査地周辺の古墳（Ｓ＝１：50,000）

丘部未調査のため正確な時期および主体部の構造は不明である。現在までに２度の調査が実施され、後円部にめぐる周溝を確認している。

三島神社古墳は、経石山古墳の東側280m離れた位置に所在した６世紀初頭の前方後円墳である。墳丘規模は全長45.2m、後円部直径23m、前方部幅20mを測る。主体部に後円部の背後に開口する片袖式の横穴式石室を有し、石室内より滑石製石製品、銀製空玉、金銅製垂飾製品、鉄地金銅張方形革金具、銀製耳環などが出土している。また、石室付属施設として排水溝、墳丘外表施設として前方部に円筒埴輪列を確認している。

タンチ山古墳（双子塚）は、第二次世界大戦中、滑走路の建設時に消滅した古墳である。南側に開口する石室を主体部に持ち、石棚を有する瓢箪形の古墳であったといわれ、約60mを測る前方後円墳であったと考えられている。出土遺物として、銀製空玉、鉄槍などがある。

五郎兵衛谷古墳（１号墳）は、墳丘の周囲に周溝をめぐらす直径10m程度の小規模な円墳である。石室は削平が著しく、わずかに基底石の痕跡を残すのみで、６世紀代に構築された在地的な横穴式石室であったことをうかがわせるにすぎない。石室内より鉄矛、鹿角装刀子、三累環頭大刀を出土しており、墳丘規模に比して出土遺物が豪華である。また、同様に三累環頭大刀を出土した古墳として星岡町の西山古墳が知られるが、墳丘規模およびその形態など不明な部分が多い。

二つ塚古墳は、推定長63m、後円部直径約30mを測る６世紀前半の前方後円墳である。現在、わずかに後円部の一部を残すのみで、内部構造など詳細は判明していない。昭和47年に実施された農免道路改修工事の際、前方部より円筒埴輪列を確認している。また当古墳の近隣には、かつて桜塚とよばれた古墳があり、長鎖付耳飾および王冠を出土したといわれるが現在は不明である。

桧山峠７号墳は、５世紀末の前方後円墳である。全長不詳、後円部直径16～17mを測り、主体部に竪穴式石室を有する。石室は砂岩の塊石小口積みによる構築で、内部より轡、刀子、砥石などが出土している。また、くびれ部推定位置より有蓋高坏を中心に、須恵器が破砕された状況で出土しており、くびれ部祭祀にかかわる貴重な資料を供している。

素鵞神社古墳は、切妻の家形埴輪および単鳳文環頭大刀の出土が伝えられる古墳で、その規模は直径30mを測るともいわれ、平野内でも最大級の円墳である。

観音山古墳は、墳丘形態および規模、主体部の構造など、その全容が判明していない未調査の古墳である。その外見より、全長が80m程度の帆立貝式前方後円墳である可能性を残すが、直径30～40m程度の円墳とも考えられる。墳丘上より外面に二次調整を施す埴輪片とともに盾、靫、短甲、家形埴輪の破片などを採集しており、５世紀代に築造された首長墳である可能性が高い。

波賀部神社古墳は、５世紀末に築造された前方後円墳で、後円部直径28m、全長62mを測る。神社本殿が奉斎される際に主軸に直交する形で石室が露出し、発掘調査を実施したが記録は残存しない。その時の出土遺物として金環、轡、蓋坏、高坏、台付壺などが知られるが、現在は東京国立博物館に保存されている。また、その他の出土遺物として円筒埴輪および平瓶が知られる。

葉佐池古墳は、６世紀中頃に築造された前方後円墳で、後円部直径約35m、全長約60mを測る。発掘調査の結果、墳丘から３基の横穴式石室と１基の小型竪穴式石室を確認しており、そのうち２基の横穴式石室は未盗掘の状態で発見された。未盗掘の石室内からは組み合わせ式木棺、副葬した須恵器、鉄製品などが当時置かれたままの状態で見つかっており、出土人骨からモガリ儀礼の存在が指摘されるなど古墳時代研究に欠くことのできない遺跡である。

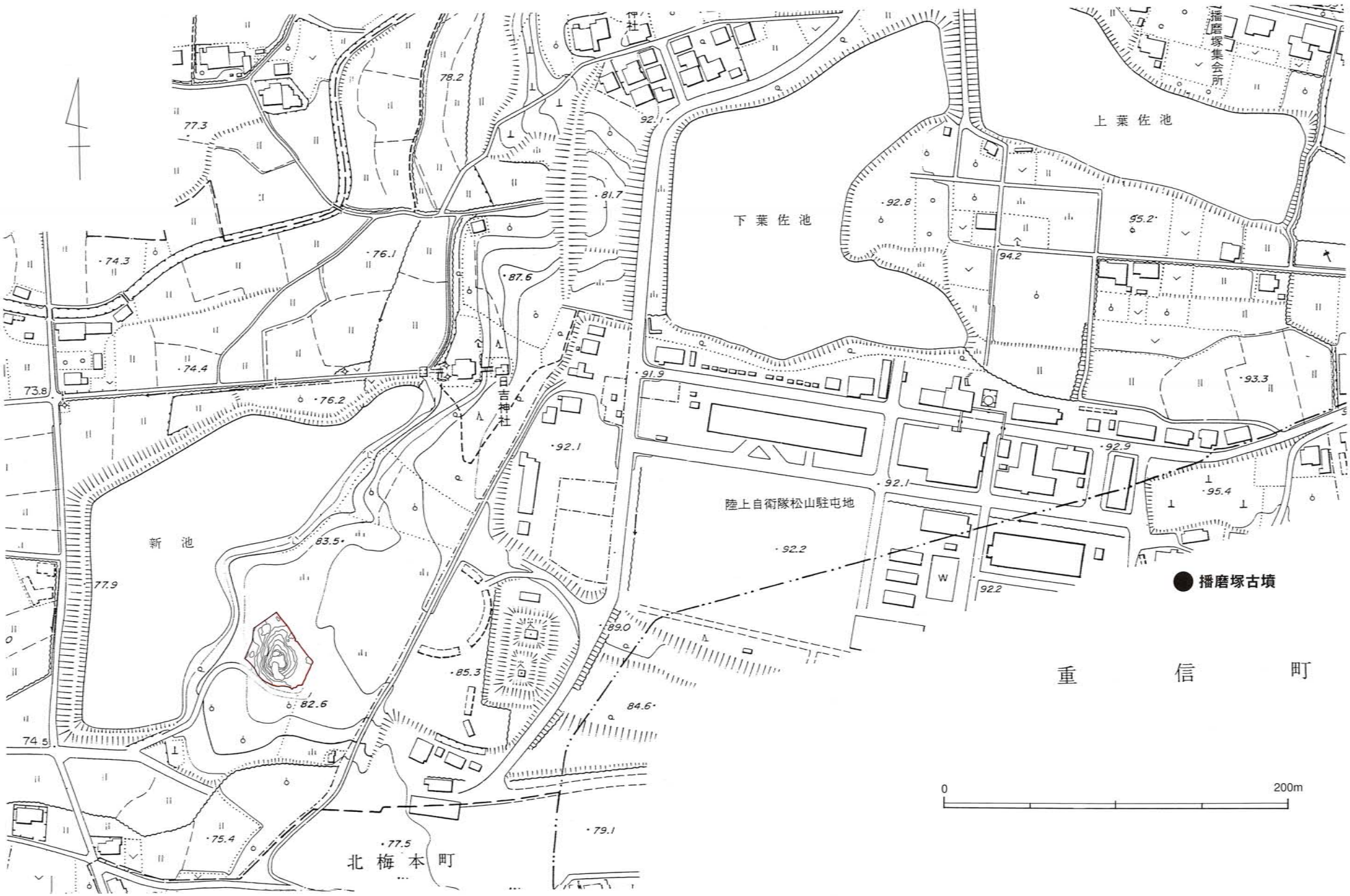
播磨塚古墳は、天神山古墳の位置する播磨塚古墳群に所在する終末期古墳である。群内には当古墳のほかに数基の古墳が存在することが確認されているが、陸上自衛隊松山駐屯地内に所在する当古墳以外はその存否が明確でない。(注2) 播磨塚古墳は墳丘の規模、形状は不明だが、主体部に切石を用いて構築した両袖式横穴式石室をもつ。本格的な調査は実施されていないが、本墳出土遺物として獅噛環頭、装飾台付壺などが知られるが、出土地や出土状況について不明な部分が多い。

（注１） 平成10年度、樽味四反地遺跡６次調査地において検出された。発掘調査の結果、約12．6m（６間）×10.2m（６間）の掘立柱建物（総柱）および、敷地を区画する溝（濠）、溝の内側にめぐる柵列を確認している。

（注２） 愛媛県内古墳分布調査報告書には、天神山古墳の北方200mに位置する日吉神社境内に７基の円墳が分布すると記載されているが、現在その存在が不確実であるので記述を避けた。しかしながら、播磨塚古墳群内には天神山古墳同様、未発見の古墳が数基存在するものと考えられる。

［参考文献］

松原弘宣1992 『熟田津と古代伊予国』創風社出版
松山市教育委員会1980 『松山市史料集　第１巻　考古編』
松山市教育委員会1987 『松山市史料集　第２巻　考古編Ⅱ』
松山市史編集委員会1992 『松山市史　第１巻　自然・原始・古代・中世』松山市役所
愛媛県史編さん委員会1982 『愛媛県史　原始・古代１』愛媛県
愛媛県史編さん委員会1986 『愛媛県史　資料編考古』愛媛県
冨田尚夫2000 「愛媛県における前方後円墳」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集
長井数秋・岡田敏彦1991 「第15章　伊予」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社
西田栄・森光晴・岡田敏彦ほか1991 「Ⅱ 愛媛県内古墳分布の特色」『愛媛県内古墳 分布調査報告書』愛媛県教育委員会
栗田茂敏2001 「播磨塚天神山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報 12』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
橋本雄一・小玉亜紀子1999 「樽味四反地遺跡６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　11』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



第２図　調査地位置図（Ｓ＝１：3,000）

第Ⅲ章　調査の手順と方法

1．調査以前の墳丘

天神山古墳の所在する洪積台地は、明治時代中期以来、果樹栽培の栽培適地として梨・柑橘類の栽培が盛んにおこなわれた地域である。現在もその名残で果樹園が所々に残っているが、近年宅地開発の波が当台地周辺にまで迫ってきている。

そのような状況の中、天神山古墳も梨・柑橘類の栽培地として利用されたわけであるが、当古墳には天神様が古くから祭られており、その影響もあって墳丘の遺存状況が比較的に良好で、最小限の開墾行為でおさまったものと考えられる。天神山古墳は南側に比して北側が緩斜面状を呈するものの、古墳の周囲には人為的に土砂を持ち込んだ形跡が広く確認されたこともあり、試掘調査の段階および調査開始段階において、視覚的印象より直径20～30m程度の円墳であると考えた。また、伐採後の表面観察の結果、円筒埴輪片が墳丘上に散在する状況、特にそれが墳丘北東部の一箇所で顕著なことを確認した。（第３図）

2．調査地削平状況と埴輪出土地点の調査

第Ⅰ章１で既に述べたように、調査地は平成元年ため池（新池）の整備事業および、池の土手を改修するために採土が行われた地域である。採土の行われた箇所は人工的にバラスを敷いていた為、肉眼観察で明確に判別することが可能であった。しかしながら、どの程度の深さまで掘り下げたのか確認していなかったこともあって、墳丘北東部に確認トレンチを設定した。（造成土確認トレンチ）その結果、掘削の深さが３m以上に及ぶこと、さらに墳丘がトレンチ配置位置まで及ばないことを確認した。

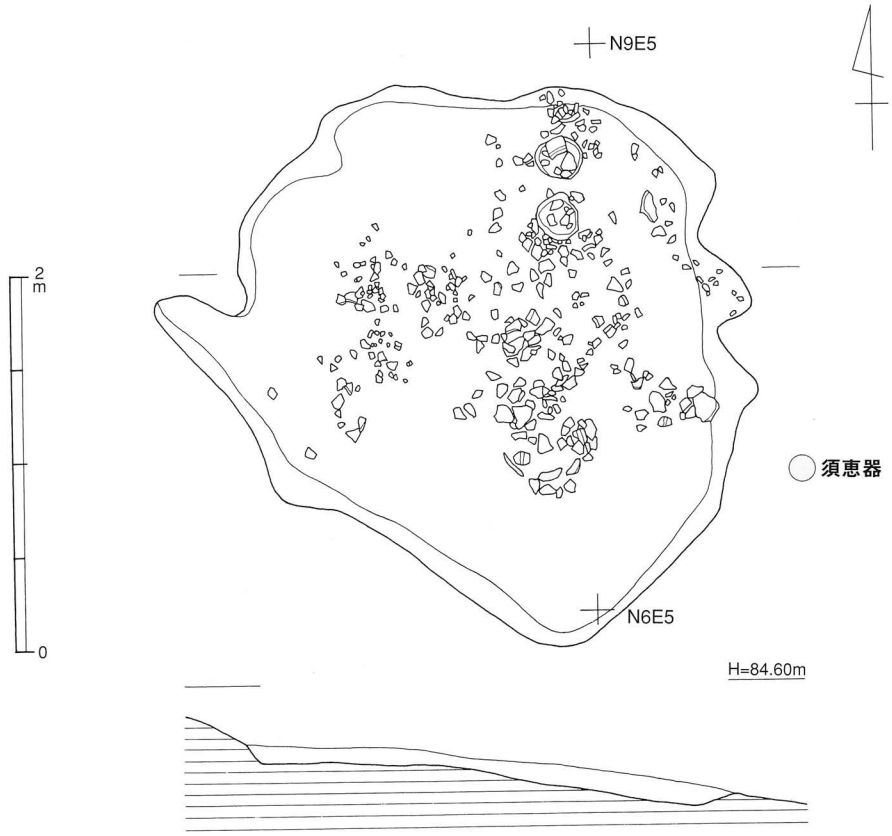
また、トレンチ掘削作業と並行して、墳丘上に外部より持ち込まれた土砂の除去作業を開始し、続いて墳丘の精査、石室の検出作業および円筒埴輪片集中出土地点の調査を実施した。

調査の結果、円筒埴輪を多量に出土する地点より近現代に掘られた穴（攪乱坑）の存在を確認し、そこに埴輪片が流入しており、しかもその床面には円筒埴輪がほとんど当時の位置に遺存していることが判明した。（第４図）

本地点の調査より判明したことは重要で、実際にこの部分の調査によって古墳全体の調査が一気に前進したことは事実である。ほとんど直線的で一列に立ち並ぶ円筒埴輪列の存在より、天神山古墳が前方後円墳である可能性が強まり、円筒埴輪列検出レベルがそれまでの調査で認定していた墳丘面よりかなり下に位置することが判明したのである。つまり、天神山古墳は単なる円墳ではなく、しかも墳丘上に墳丘より流れ落ちた同質の土（墳丘流土と呼称する）が厚く堆積していたわけである。

そこで得られた所見をもとに、任意にトレンチを設定しながら入念に墳丘精査を実施した結果、墳丘から流れ落ちたと考えられる埴輪片を大量に含んだ墳丘流土の下位に本来の墳丘を確認し、墳形とその規模をほぼ確定した。

第３図　調査前地形測量図（Ｓ＝１：250）



第４図　墳丘北側攪乱坑内遺物出土状況（Ｓ＝１：40）

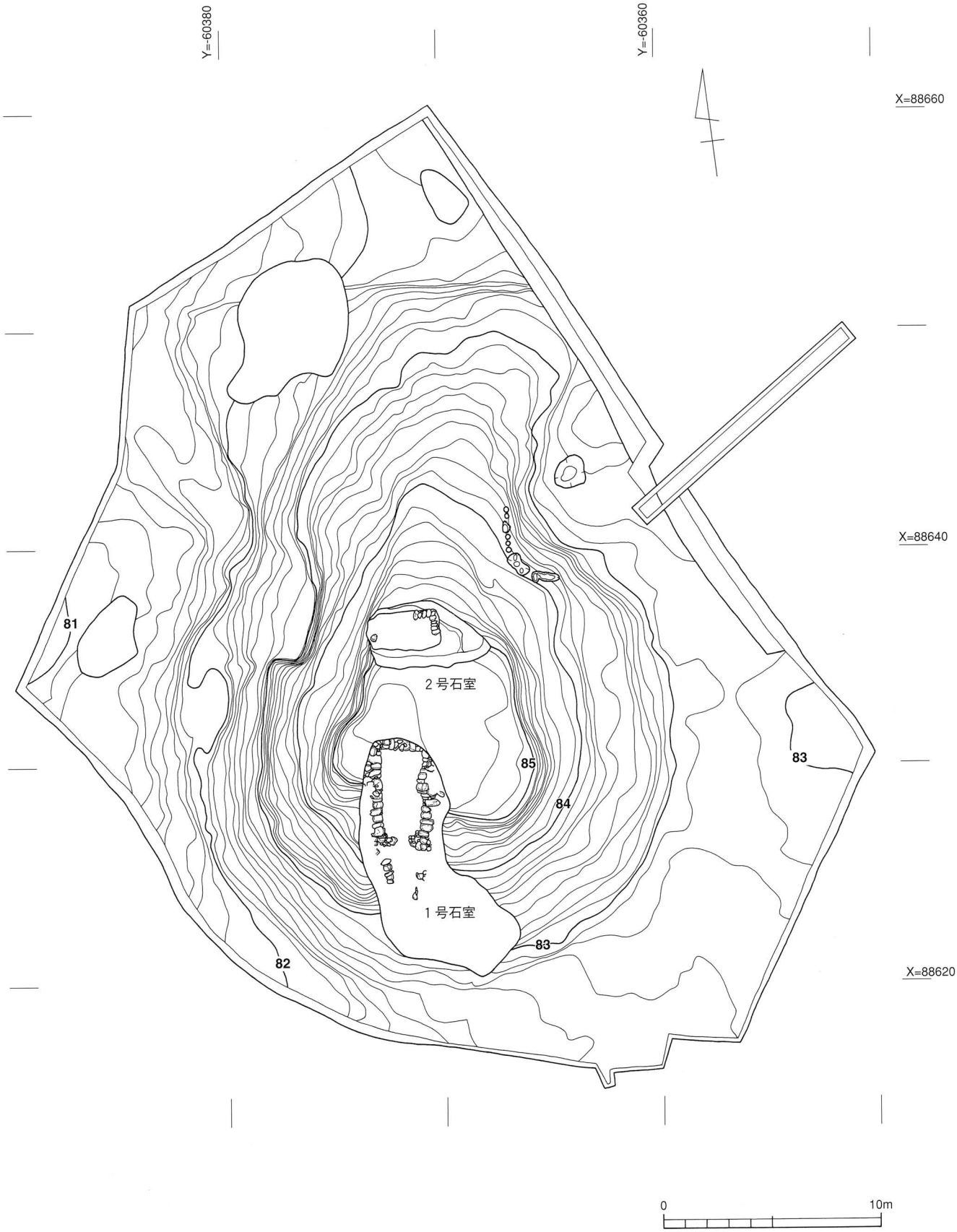
３．調査の方法

墳丘部に堆積していた客土及び墳丘流土の除去作業によって、くびれ部テラス上に円筒埴輪列を検出し（第14図・第15図）、天神山古墳が前方後円墳であることが判明、加えて墳端部周辺に堆積する流土の下層には多量の埴輪片が含まれることを確認した。したがって、この時点で墳丘主軸ラインを決定し、墳丘周囲に土層観察用ベルト（第６図Ｂ１～Ｂ８）を設定して墳丘流土中に堆積する遺物の発掘作業およびその記録、墳端部の検出作業を実施した。さらに、それと並行して主体部の検出・確認作業を実施し、後円部南側に大規模な盗掘坑、内部より横穴式石室を検出した。

主体部（１号石室）検出作業を終了し、墳丘流土内遺物の大半が出土した状態で記録撮影を実施、遺物取り上げ作業と並行しながら墳丘構造解明を目的としたトレンチ（第６図Ｔ１～Ｔ７）を設定した。

各トレンチ調査においては、墳丘構造に関する数多の情報を入手することができ、なかでもＴ１における発掘調査では非常に大きな成果を得ることができた。墳丘築造過程をある程度把握することができたことに加えて、新たに石室を１基検出し、墳丘築造過程中に実施された祭祀行為の痕跡を確認できたのである。（詳細は第Ⅳ章参照）

墳丘トレンチ調査の進行する中、トレンチ調査によって検出した２号石室の発掘調査および１号石室床面下部構造の確認作業を実施した。その結果、１号石室の床面に敷かれた礫床（玉砂利）中より金銅製品が出土、礫床下部より初葬時の埋葬面が姿を現した。



第5図　墳丘全測図（S＝1：250）

Y=60380
Y=60360
X=88660
X=88640
X=88620
B1
T4
T5
B5
B6
T1
T6
T7
B8
B7
81
2号石室
T3
T8
B3
B2
T2
T9
85
83
T10
84
1号石室
83
82
B4
0
10m
(S＝1：250)

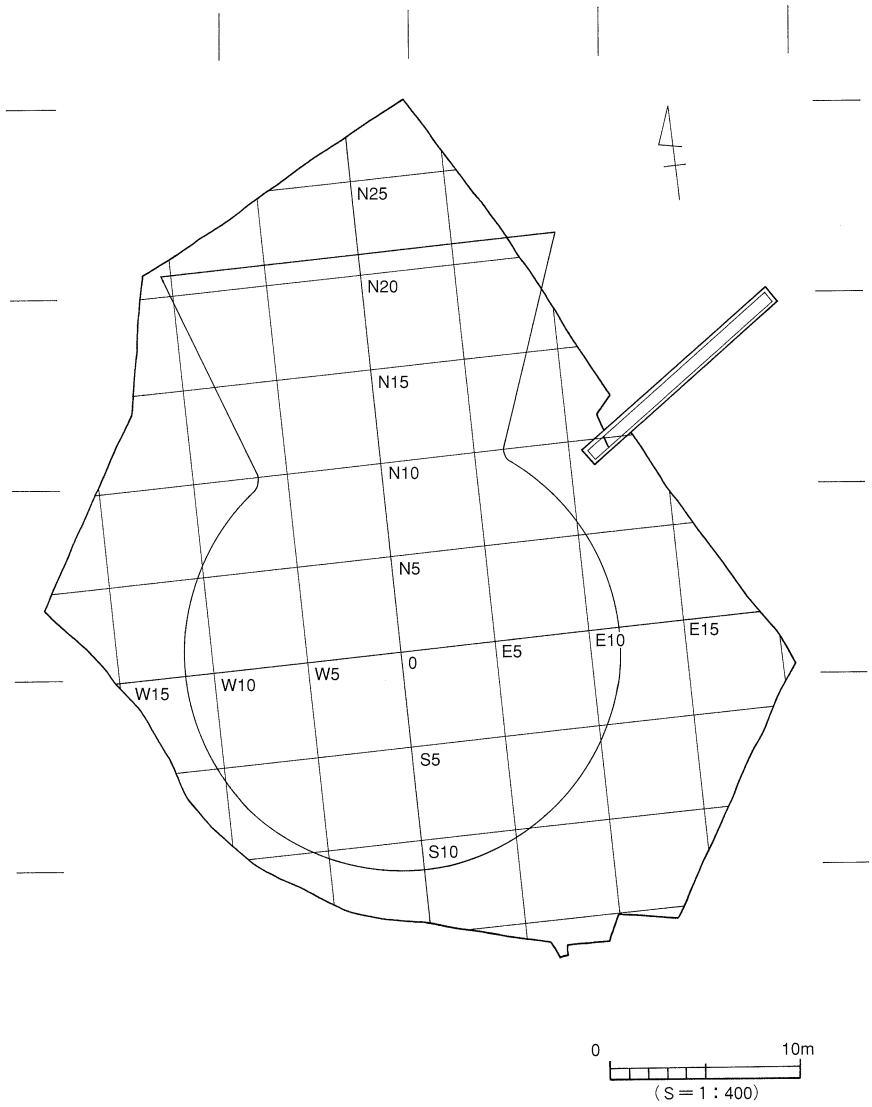
第6図　トレンチ配置図

１号石室および２号石室の発掘作業終了後、Ｔ１の掘り下げ作業（２号石室部分）および、１号石室の石室主軸に沿ったトレンチ（第６図Ｔ８～Ｔ10）を設定し、石室構築方法を確認。最後に各土層の記録を実施し、各遺構およびトレンチを埋め戻して調査を終了した。

４．調査グリットの設定

天神山古墳は、本来積み上げられていた墳丘盛土の大部分を自然の力あるいは後世の削平により失っていると考えられる。しかしながら、周囲の地山面を削り出した土を用いて墳丘を構築する性格上、墳端部の遺存状態は良好であり、比較的容易に墳形および墳丘規模を確定することができた。したがって、測量図面を参考に墳丘外形ラインと後円部中心点（０）を導き出し、墳丘主軸ラインを決定、それに沿う形で調査グリットを設定した。また、前項で説明した墳丘確認トレンチ（Ｔ１～Ｔ７）もこれに依拠している。

グリットは、後円部中心点（０）を基点に５メートル間隔で設定し、結果として調査区内を60グリットに区分した。石室の調査を除き、天神山古墳の測量調査は基本的にこのグリットを基準に実施した。



第７図　グリット配置図

第Ⅳ章　墳　　丘

1．立地

現在、播磨塚天神山古墳（以下、天神山古墳と記す）は山崎池の東側、洪積台地上に立地している。池は、近世期（記念碑によれば1615年）に農業灌漑用水確保の為に造られたもので、本来古墳に伴うものではない。東側を除く周囲を土手によって築いていることから判断するに、旧地形を利用して構築した可能性が高く、その構築に際して地形に大きな改変を与えたとは考えがたい。したがって、天神山古墳は過去においても現在同様、南西部にやや突き出た洪積台地の先端部に立地していたものと考えられる。

古墳の立地する洪積台地は、東側を重信川の支流である内川、西をその支流である悪社川によって浸食され、北梅本町太尺寺辺りから天神山古墳まで南西方向に突き出すような地形になっている。また、台地周辺にはそれらの河川によって形成された肥沃な扇状地が広がり、天神山古墳地山面との比高差約８ｍを測る。

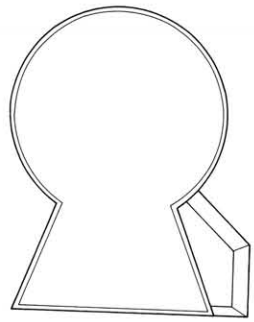
墳頂部からの眺望は特に優れ、波賀部神社古墳や葉佐池古墳をはじめ松山平野の主要な首長墳を一望することができ、天気の良い日には遠く伊予灘を望むことも可能である。

2．築造過程

天神山古墳における墳丘の築造過程は、**(1)地山整形　(2)石室の構築および後円部の築造　(3)前方部の築造**　以上、３段階に大きく分けることが可能である。(注1)以下、各段階ごとに説明を加える。

(1)　古墳の形･規模、石室の位置･規模などを企画し、その後古墳を築造する位置を決定し地山整形を行う。天神山古墳の場合は平坦な場所を選択し、前方後円形に設定した輪郭外側部分を削り出して基盤とする。(注2)

　またこれと同時に、西側くびれ部から前方部先端までの一定範囲を、基盤面より一段低くテラス状に削り出すものと考えられる。(注3)

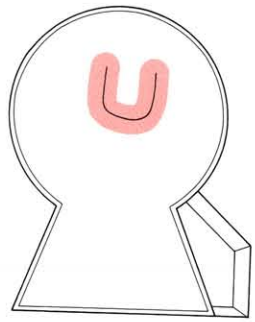


(1)　地山整形

(2)　地山整形（地山削り出し）によって生じた土砂を用いて石室の構築および後円部の築造をおこなう。(注4)

ａ．石室の構築

①　基盤上に石室の位置を決定し、約30～40㎝の深さに墓壙を掘り込む。墓壙はおそらく、石室の形状を意識した形、つまり長方形状を呈しているものと考えられる。また、奥壁部分は通常の掘り方であるが、側壁部分に関しては特に二段掘りにしていることを確認しており、これが何のために施された工法なのか断定できない。(注5)

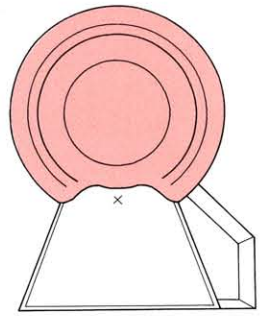


(2)-a　石室の構築

② 外側に粘土をつめ込み、補強しながら墓壙内に３～４段の石を積み重ねる。さらに引き続き、石室の周囲に墳丘を築きながら、３段前後の石を積み上げる。この時点で、墓壙より一回り大きなクレーター様の擬似墳丘が完成し、石室の構築は一旦終了しているようにみえる。(注6)

b．後円部の盛土

石室の構築と並行して、後円部全体の盛土作業を行う。基本的に周囲に土を盛り、その内部に土を充填していく方法で墳丘および石室を構築していくが、石室の周囲をとり巻くような土手状の高まりは確認できない。特に、しまりの強い同質の土砂を標高83m～83.6mのレベルでほぼ平坦に積み上げる状況を確認しており、これとほぼ同様の状況が上位レベルにおいても推定可能である。このことより、作業面を設けながら数段階に分けて墳丘を築造した可能性が高い。



(2)−b 後円部の築造

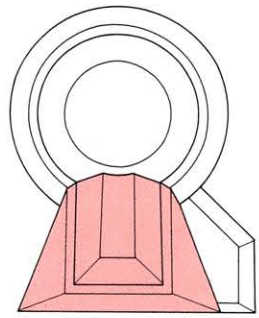
後円部の築造にあたり、盛土の北限を後円部中心点より８mの位置に定めて墳丘を築く。さらに後円部の西側および東側についても、後円部中心点より約８m離れたラインを境に、内側と外側で使用する土の種類（質）を区別しながら交互に墳丘を築造している。(注7)また、盛土作業を開始する当初段階より、古墳（前方後円形）の周囲に埴輪を樹立することを計画していたことは確実で、つまり、くびれ部において埴輪の樹立を確認した部分の土質と、後円部中心を基点に半径約８mで描いた円弧の外側に積まれる土の質が共通する事実より指摘可能である。

以上、石室の構築作業と後円部の盛土作業、埴輪列の樹立作業は複雑に連動していたと考えられ、ほとんど同時進行で分業、築造された可能性が高い。

(3) 後円部完成後、北側に付加する形で前方部を築く。

後円部が完成したのち、まず後円部北側前面にて土師器の壺形土器を用いた儀式（祭祀）を執り行い、その後前方部の築造作業に移行する。（第Ⅴ章１参照）

前方部の築造にあたっては後円部と同様、地山整形時に掘削した土砂を使用するが、特に墳丘盛土の中央部分と周縁部分に用いる土の種類（質）を明確に区別して交互に墳丘を築造しており、これは後円部同様、周縁部に配する埴輪の樹立を考慮して行ったものと考えられる。



(3) 前方部の築造

（注１） 形式的に分けたもので、実質的には(1)地山整形をしながら(2)石室の構築および後円部の築造をおこなったり、同じく(1)地山整形をしながら(3)前方部の築造を実施したと考えられる。

（注２） このことは、地山上に最大５cmの厚さで薄く堆積している黒色粘質土の範囲より推定可能であるが、黒色粘質土の堆積年代すなわち、平坦面の造成年代は特定できなかった。

黒色粘質土上面のレベルにはばらつきが見られ、さらにその堆積状況が黒色粘質土層以下の自然堆積層と近似することを確認しており、黒色粘質土を意図的に薄く敷き平坦にしたとは考えられない。また調査期間の制約上、地山整形の及ぶ範囲の確認までは至らなかった。

（注３）　これはあくまでも、調査完了時の地形測量図で表現される平坦部の範囲を積極的に評価した場合の推測に過ぎない。しかし、この平坦部周辺は他の地点と比べて形象埴輪の出土傾向が高く、本地点周辺に形象埴輪が集中して樹立していた可能性が高い。そのことよりテラス状方形区画の存在を推定するものである。

（注４）　①地山上に薄く堆積する黒色粘質土。②黒色粘質土層以下40～60cmの厚さで堆積する黄色系土。③黄色系土直下に基盤層として広がる礫混じりで白色の強い黄灰白色土。以上３種類の土砂が地山整形（地山削り出し）によって生じ、各段階でそれぞれを使い分けながら石室および墳丘を築く。

（注５）　側壁側に施されることから判断すると、側壁を持ち送ることを前提とした掘り方である可能性が高い。

（注６）　今回検出した石室側壁の遺存状況は最大でも７段で、そのためこれ以上の詳細は不明である。

（注７）　土質変化の境界線は１本線で分けることのできるような単純なものではなく、８ｍラインを意識して粘性、しまりの異なる２種類の土が交互に重なったような状況を確認している。また、円筒埴輪を樹立するにあたって明確な整地面を設けていないことから、墳丘築造過程のなかに埴輪樹立作業が組み込まれていた可能性が高い。

３．盛土単位

天神山古墳は墳丘周囲の表土以下地山部分を削り出すことによって整形し、そこで生じた土砂を利用して築造したと考えられる。また前項注釈で記載済みであるが、使用した土（＝削り出した土）は３種類に大きく分けることができ、すなわち①黒色粘質土②黄色系土③黄灰白色土（砂礫混）に区別することが可能である。(注1)

以上、天神山古墳の盛土作業は基本的に３種類の土砂を用いて実施されたと考えられる。さらに、墳丘トレンチの壁面における土層観察の結果、これら土色（土質）の異なる土砂がそれぞれある程度独立し、部分的あるいは平面的に分布していることを確認した。特に後円部においては、段階的に「③黄灰白色土」に起因するしまりの強い灰色系土や「①黒色粘質土」を使用して平坦な土台面を形成しており、工程ごとに使用する土を使い分けていた可能性が高い。すなわち、盛土作業の要所、でしまりの強い土を用いて平坦面を造り出し、それによって次の盛土作業を行うための作業面を設けながら、段階的に墳丘を築造した可能性が高い。

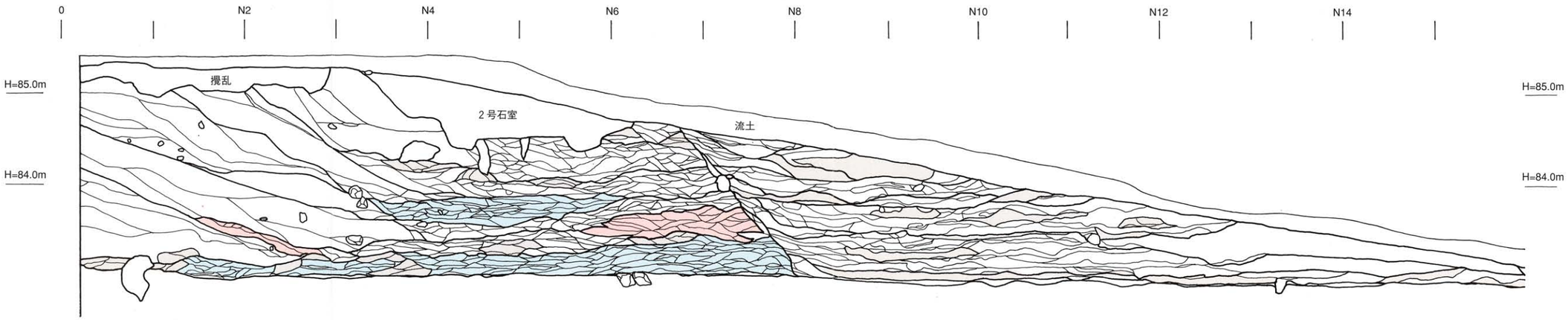
さらに、色調がある程度異なることより、盛土に用いた土砂（土塊）の最小単位が比較的に判別可能であり、部分的ではあるが後円部および前方部盛土中に盛土単位と思われるレンズ状の塊を確認した。

トレンチ断面上で２次元的に確認したに過ぎないため詳細（立体的広がり）は不明だが、当古墳で確認できた土塊は静岡県・大門大塚古墳や大阪府・蔵塚古墳、福岡県・五郎山古墳、愛媛県・大池東１号墳などで検出された土嚢状構造物あるいは帯状構造物などと性格を一にするものである可能性が高い。(注2)

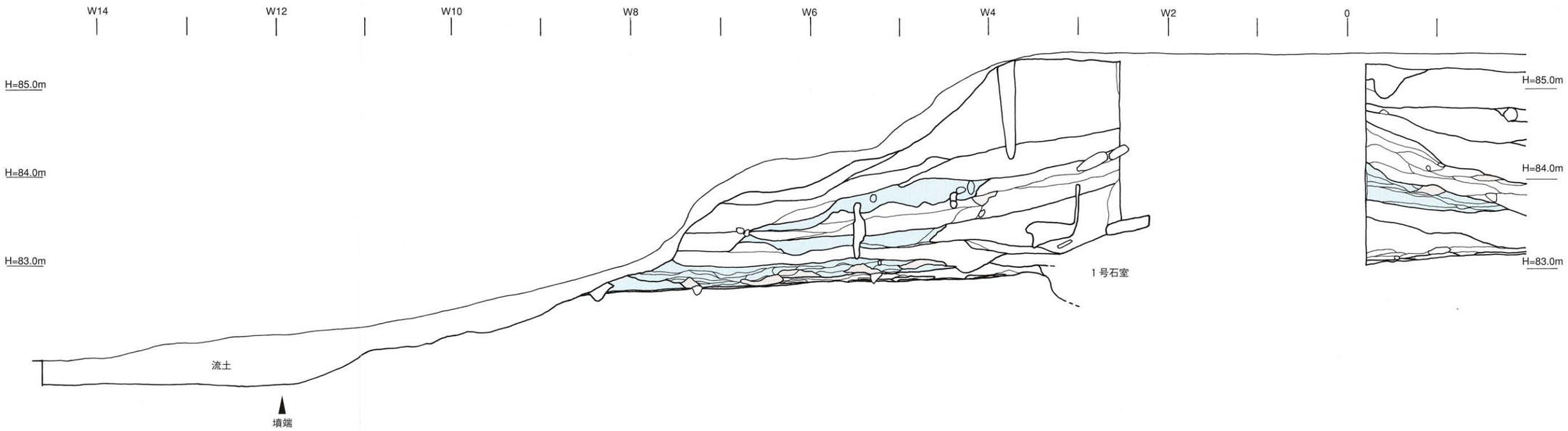
（注１）　埴輪樹立箇所に用いるしまりの弱い土は墳丘中央部に用いられている土とは全く種類の異なる土であるかの如く感じられるが、基本的に同種（地山）の土である。そしてこの違いは固め方など使用方法の差異によって生じたと考えられる。

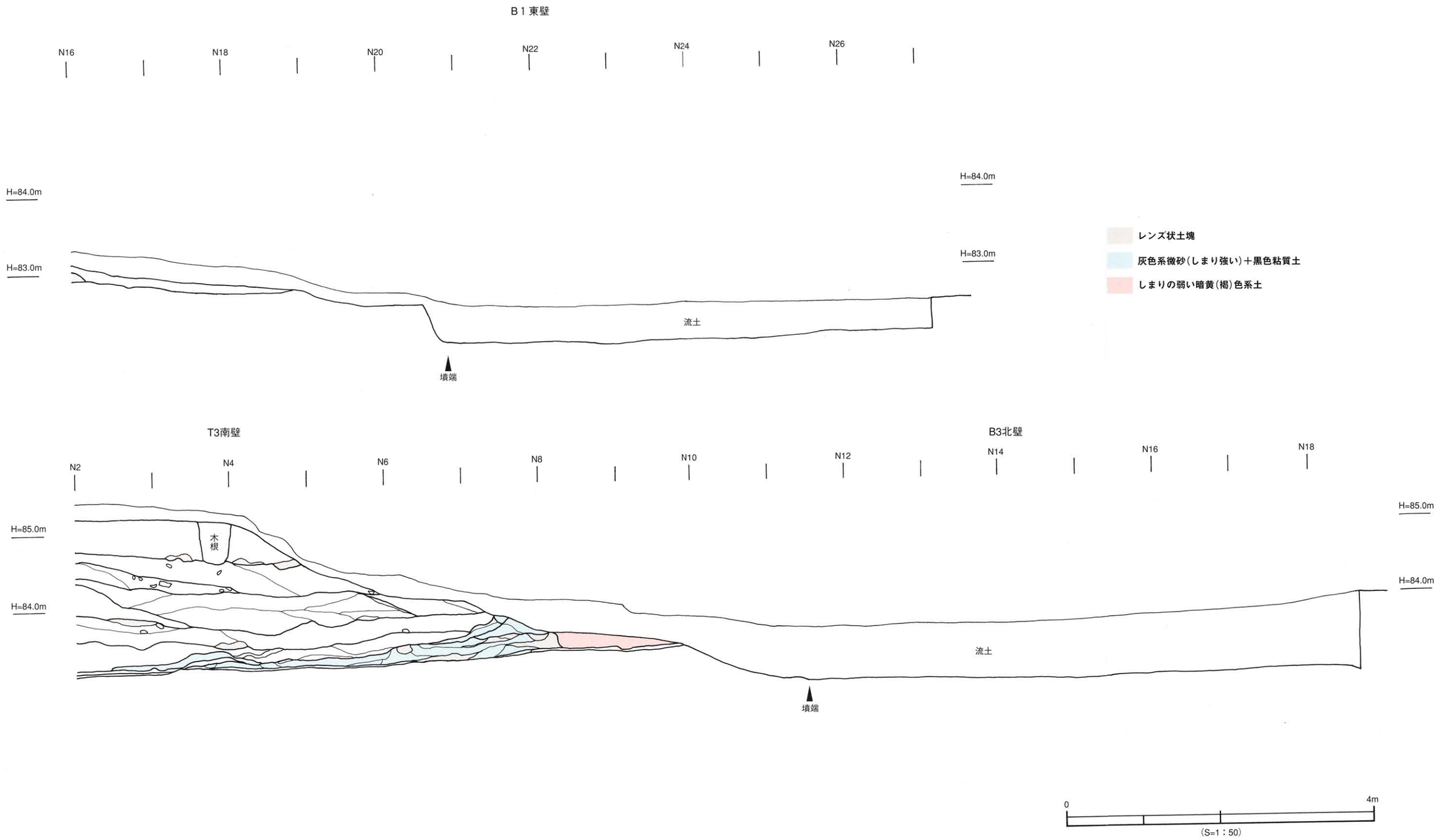
（注２）　土嚢・土俵・土塊積み工法に関しては、江浦洋1998「蔵塚古墳」（財）大阪府文化財調査研究センターに詳しい。

T１西壁

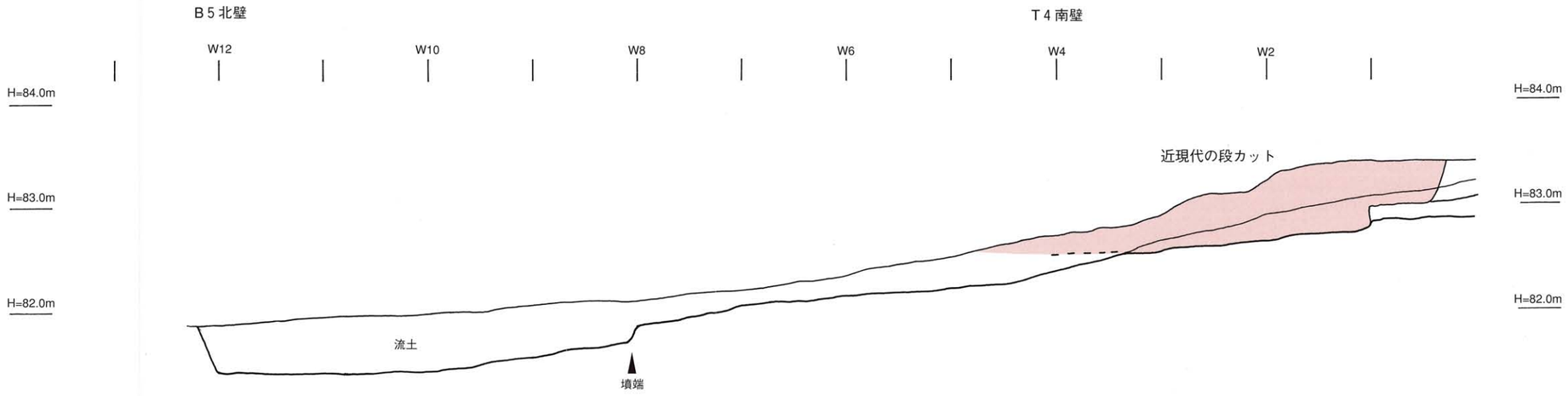


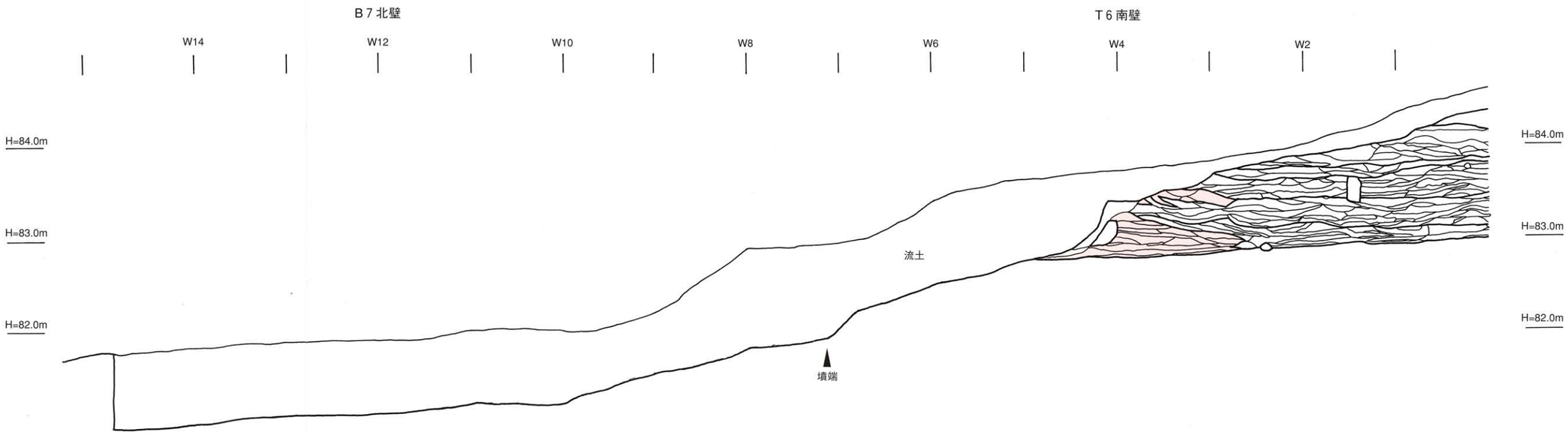
B２南壁　　T２北壁　　T3南壁

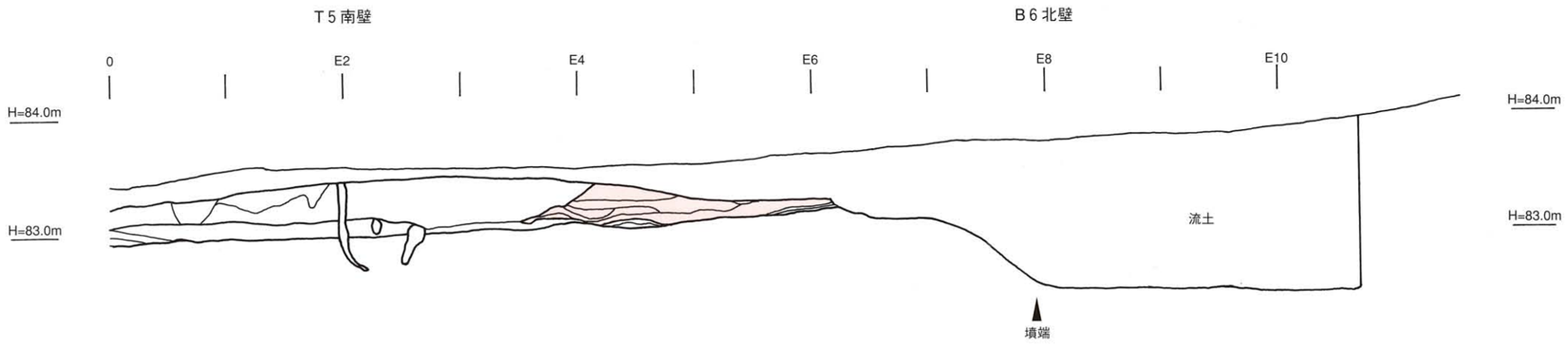


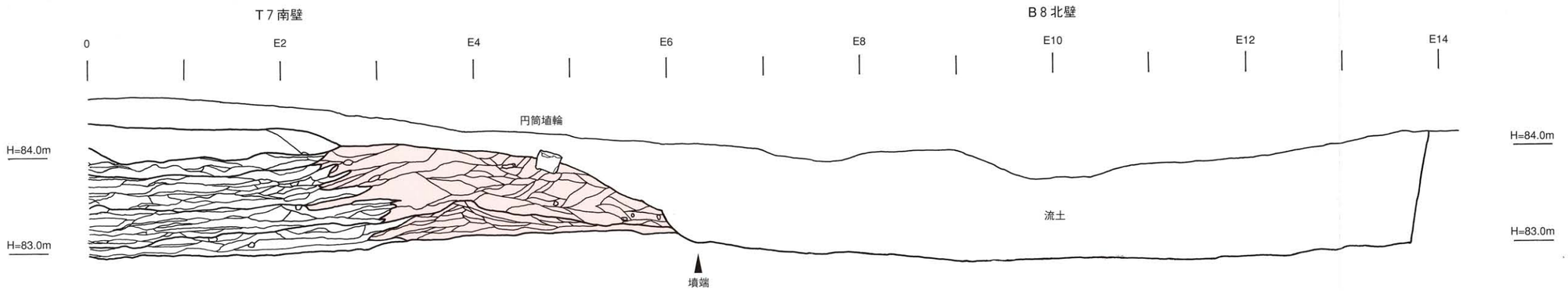


第８図　墳丘土層断面図(1)


B５北壁
T４南壁
W12
W10
W8
W6
W4
W2
H=84.0m
H=83.0m
H=82.0m
近現代の段カット
流土
墳端


B７北壁
T６南壁
W14
W12
W10
W8
W6
W4
W2
H=84.0m
H=83.0m
H=82.0m
流土
墳端





レンズ状土塊

灰色系微砂（しまり強い）＋黒色粘質土

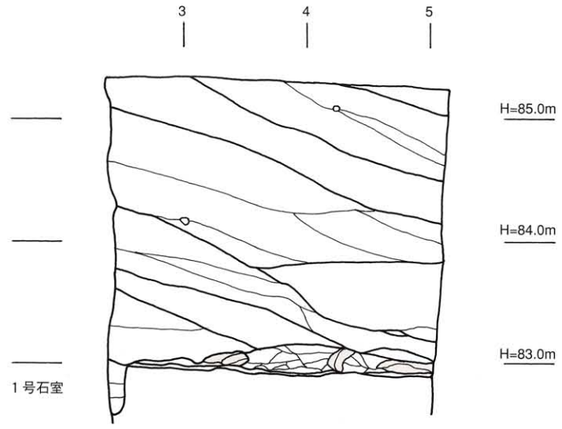
しまりの弱い暗黄（褐）色系土

0　4m

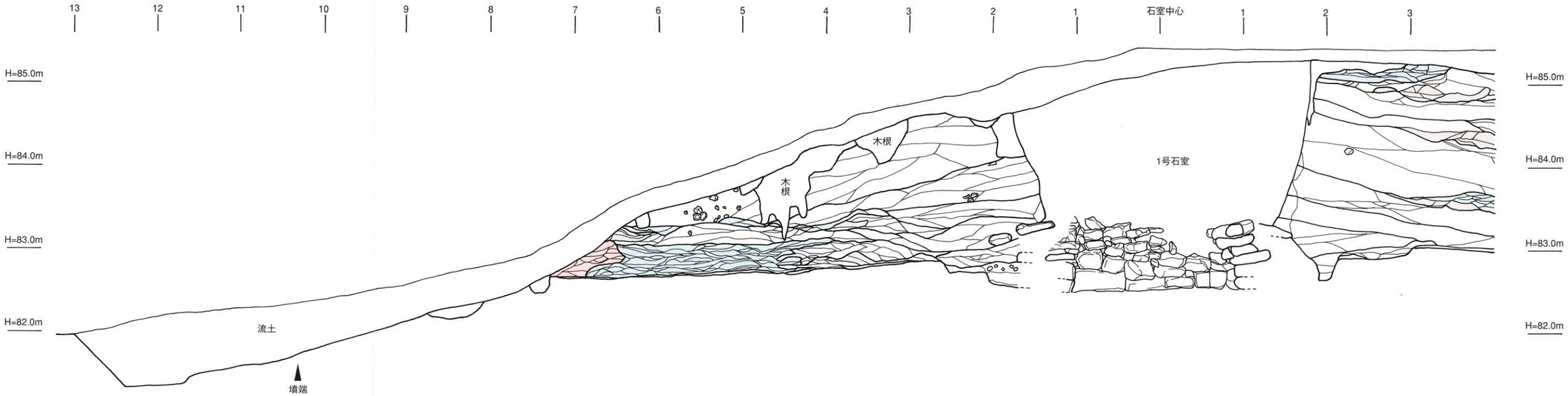
（S=1：50）

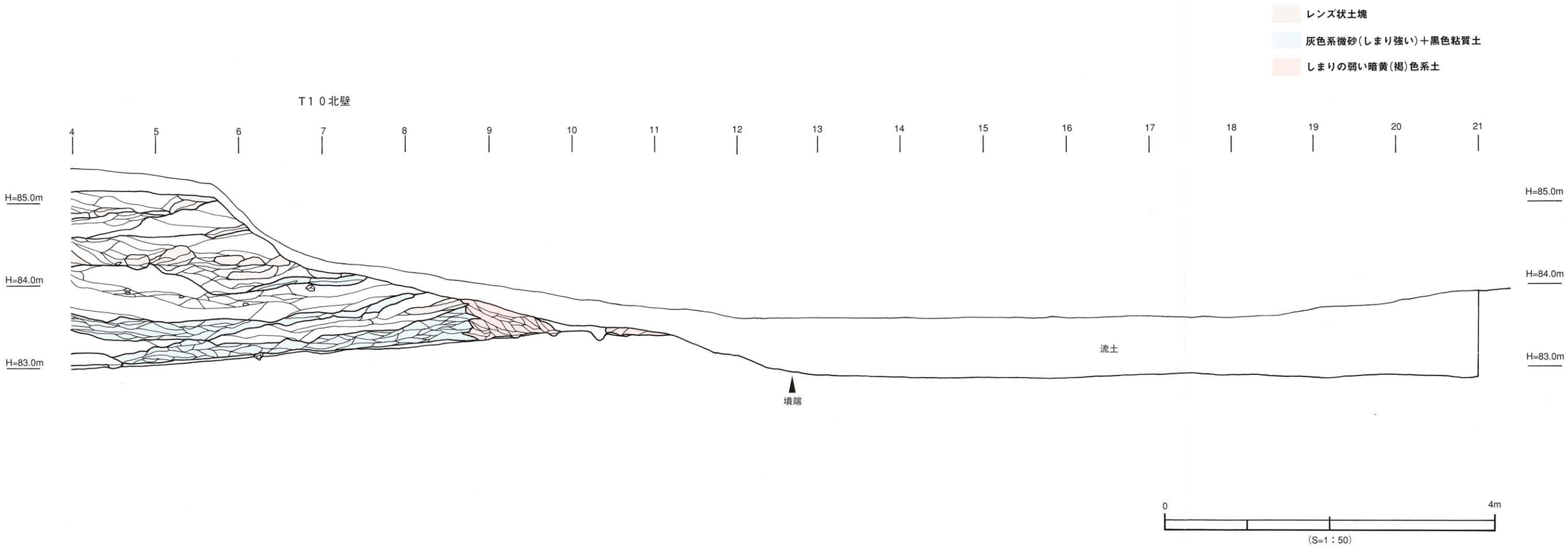
第９図　墳丘土層断面図(2)

T８西壁

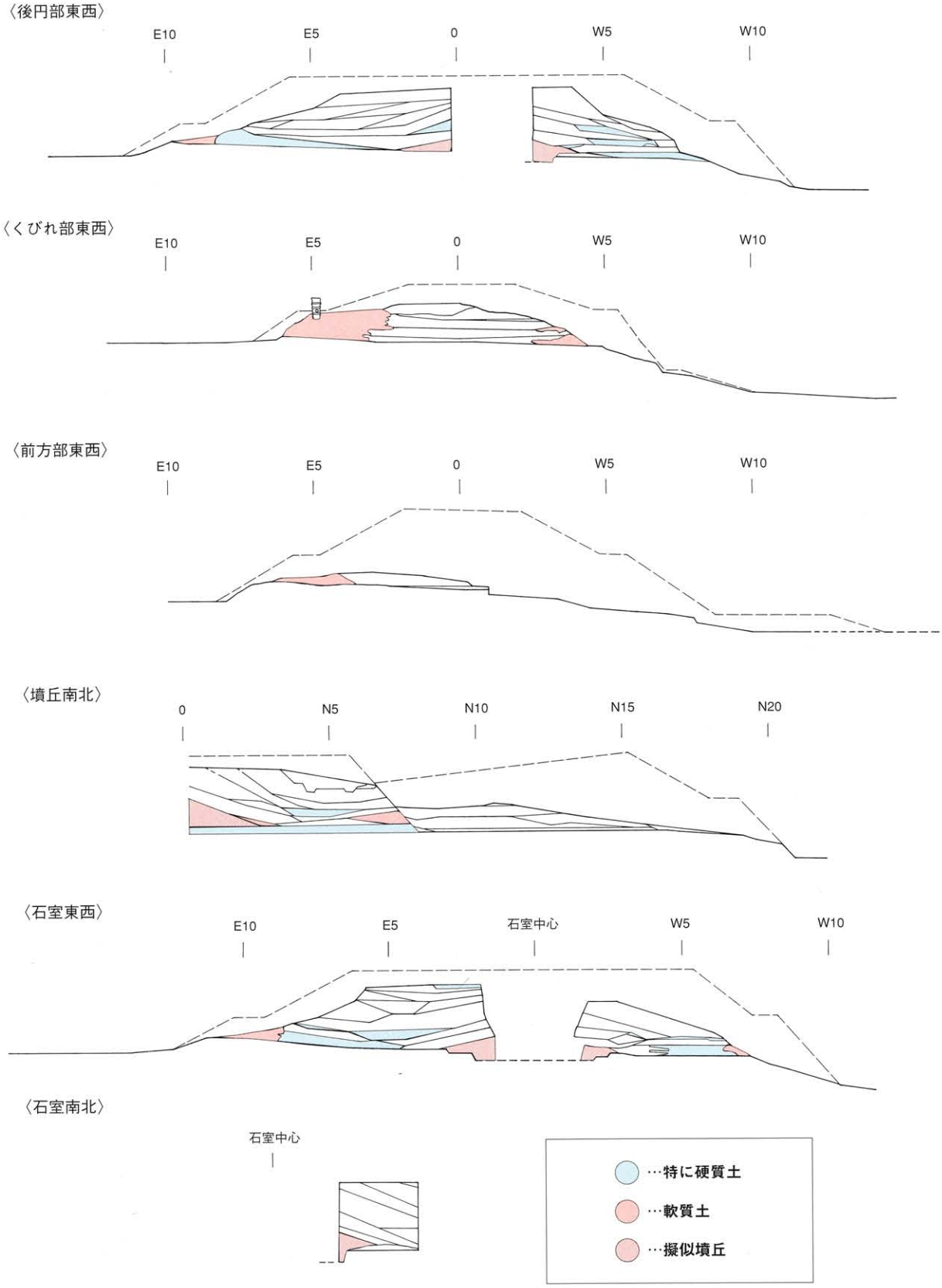


T９南壁　　T１０北壁





第10図　墳丘土層断面図(3)



第11図　古墳土層断面模式図（S＝1：200）

4．規模と形態

(1) 調査過程

天神山古墳は試掘調査時に埴輪片・須恵器片などを表採し、その出土状況および視覚的印象より古墳であることが推定されたに過ぎない。したがって、調査開始段階においては、その時期・規模および墳形・内部構造など不明な部分の多い古墳であった。

調査開始当初より、墳丘の大部分が削平を受け、さらにその上位を大量の土砂が覆っていることが確認されており、調査にあたって墳形の検出作業は困難を窮めた。したがって、墳丘の検出を目的に先ず人為的に積まれた土砂の除去作業を実施し、その結果土砂堆積以前の墳丘が姿をあらわした。

しかし、ここで検出した墳丘覆土内に埴輪片が含まれる事を確認し、追ってトレンチ調査を行った結果、さらに１m弱の流土が堆積する事実が判明した。また、墳丘検出作業の過程において円筒埴輪列を検出しており、このことが墳丘検出作業の効率を上げることになったのは言うまでもないが、同時に流土内に多量の埴輪片が包含されていた為、最終的に純粋な墳丘を検出するまで半年以上の月日を費やした。

以上のような経過のもとに墳形を確定、前方部端部を平面的に検出した段階で墳丘の主軸を決定し、主軸方向に則したトレンチ（第６図Ｔ１～Ｔ７）およびベルト（Ｂ１～Ｂ８）を設定し土層観察を行った。

(2) 規模と平面形態

土層観察の結果、墳丘最下部（基盤）はすべて地山削り出しによることを確認し、墳丘の規模および外面形態は地山整形の痕跡に基づいて復元した。墳端部地山整形痕の遺存状況は比較的良好で、地形測量および、くびれ部円筒埴輪列の遺存状況、トレンチ調査によって得られた成果などを総合して判断した結果、天神山古墳は全長32.5m、後円部直径23m、前方部長11m、同幅21m、くびれ部幅13mの規模を測り、墳丘主軸をN―５°30′―Wに配する前方後円墳であることが判明した。

(3) 築造企画１―既存の研究成果との比較―

上述した通り、天神山古墳は全長32.5m、後円部直径23mの前方後円墳である。石部・田中・堀田・宮川諸氏の共同研究によって提示された方法に従えば、４区型よりも小さく３区型よりもやや大きな前方後円墳ということになる。(注1)したがって、「前方部の短小な帆立貝形古墳の類型」（宮川1992）にはいるものと理解できる。さらに、後円部を８等分した１区画は288cmとなり、石部氏らの推定した「小尋」よりもやや小さい程度である。

しかしその反面、明確に３区型とも４区型とも断言できない中途半端な前方部を有し、そのことから畿内の主要墳や全国の大型古墳などのいわゆる“定型的な前方後円墳”に適用された企画とはやや異なる独自の築造企画を持っていた可能性も考えられる。(注2)また近年、大阪府羽曳野市飛鳥で調査された後期古墳―墳長53.5mを測る前方後円墳―の調査では、後円部直径を10等分して得られる単位を用いた築造企画例の存在も判明しており（江浦1998）、築造企画の画一的な解釈は避けるべきかも知れない。

しかしながら現段階においては、石部氏らの研究に対する否定的な材料よりも肯定的な要素が多いことも事実であり、石部氏らの研究成果と江浦氏の研究成果を踏まえて天神山古墳の築造企画について考えていきたい。石部氏らの研究、江浦氏の研究に共通しているのは、後円部を何等分かに区分し、

それと墳丘造成により生じた痕跡との適合性を検証する方法であるといえ、まず最初にそれらに必要なデータの抽出を行う。

天神山古墳の調査において得られたデータ“墳丘の造成に関連して残された痕跡”をもとに、天神山古墳の築造企画について考えていくわけであるが、調査によって得られたデータには、①墳形およびその規模、②円筒埴輪列の樹立痕跡、③後円部北側墳端ポイントがある。①より23（後円部直径）および、32.5（墳長）、②・③より８（後円部中心点より後円部盛土北端および円筒埴輪専用盛土境界ライン）という数値を導き出すことが可能である。以下、既存の研究成果への適用を試みる。

石部氏らの研究に適用した場合、後円部:前方部の比率が８：3.3となり、前述したようにやや不整合な印象を受ける。さらに後円部中心部から８ｍ離れたラインであるが、それも区画とは適合しない。次に、江浦氏の研究に適用して後円部を10等分した場合であるが、後円部：前方部の比率が10：4.1となり、やや適合するような印象を受ける。しかし、この方法においても８ｍラインが全く適合しない。

以上、天神山古墳に関して、後円部を８等分する方法と10等分する方法を用いて墳丘造成痕跡との適合性を調べたのだが、いずれにおいても明確に肯定できるような結果は出なかった。しかしながら否定するだけでは何も得られない。したがって、現在最も普遍的に用いられている方法を採ることとし、すなわち、石部氏らの研究成果に従って天神山古墳の築造企画の復元を試みる。

（注１）　後円部直径を８等分した単位（１区画）を基準に方眼を描き、前方部前端線の重なる位置によって前方後円墳を分類する方法。

（注２）　石部氏らの共同研究において、１区画の長さが「約160cmから数cmと約150cmから数cmの２つの単位で割り切れる」ことが判明しており、それら２つの数字を身度尺の「尋」であると推定している。

(4) 築造企画２―立体的構造の復元―

天神山古墳は、地山を削り出してその基盤とすることより、当時の墳形を比較的そのまま残している古墳だといえる。しかし、部分的に脆弱な土を盛土として使用していることや、明治期に果樹園として開墾されたこともあり、後円部西側と前方部に積まれていた盛土の大部分を失っている。したがって、その立体的構造については不確定要素が多く、それは調査当初からの課題であった。

ａ．くびれ部円筒埴輪列以下

墳丘を検出した段階において、地山を削り出して整形した基盤面がテラス状に広がる状況が確認されており、当初はこれを墳丘段築の一段目として考えた。しかし、後の調査で墳丘にトレンチを設定してそれらの土層観察をおこなった結果、くびれ部円筒埴輪列がしまりの弱い専用の盛土中に樹立されることを確認し、さらにこれと同質の土が後円部中心点より約８ｍ離れた円弧の外側部分にも積まれることが判明した。

したがって、くびれ部テラス上において確認した円筒埴輪列が、墳丘全体に立ち並んでいたことは確実となり、(注1)それを前提条件に、後円部を８等分した区画を基準として円筒埴輪列の配置状況を平面的、立体的に復元した（第12図・第11図）。その結果、地山整形によって削り出した基盤面を段築として利用することは構造上不可能である事を確認し、したがって天神山古墳は、標高84ｍ前後のレベルに１段目の段築をもち、墳丘をほぼ全周する段築テラス上に円筒埴輪を樹立させる構造をとっていたと考えられる。

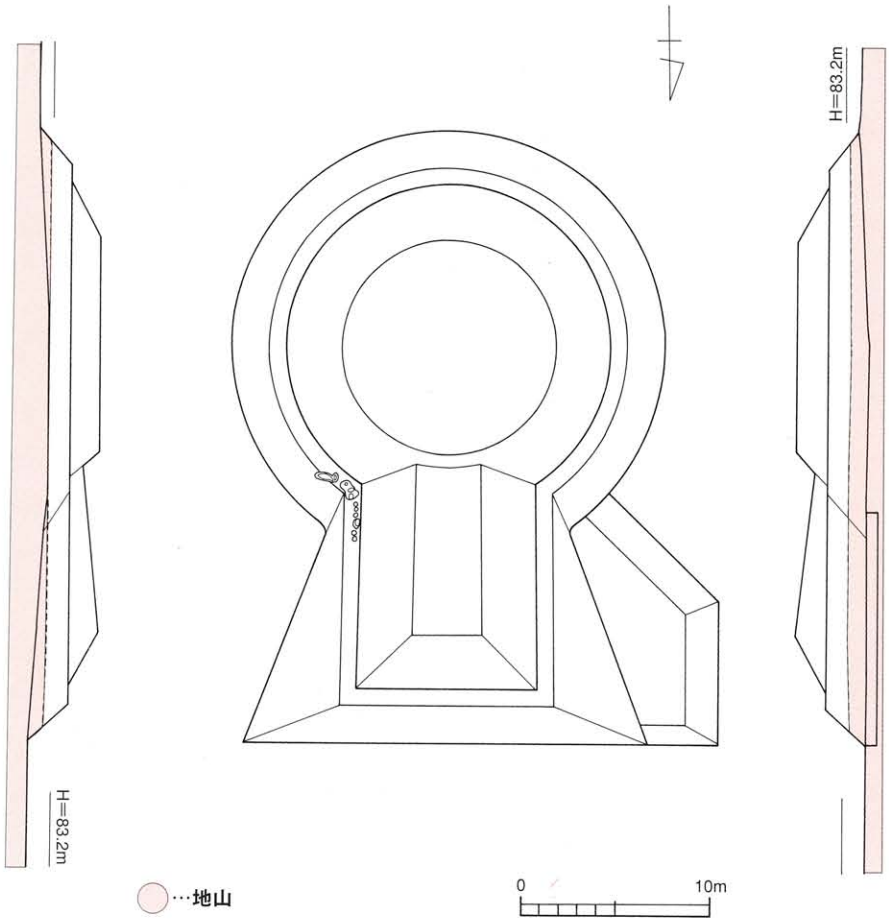
b．くびれ部円筒埴輪列上位

東くびれ部埴輪列の調査において、円筒埴輪の樹立する段築テラス面よりも高い位置（テラス面から20～40㎝上方の墳丘斜面）において、須恵器大甕の底部が墳丘上に座った状態で出土している。（第14図）そのことより、少なくともくびれ部周辺に関しては、円筒埴輪列検出テラス面よりも上位に何らかの施設が存在した可能性が考えられた。しかしながら、円筒埴輪の樹立する１段目テラス面と大甕出土地点の距離は非常に近く、大甕のために設けた特別な施設の存在は構造上考えられない。したがって段築の有無に関わらず、大甕は墳丘斜面上に直接設置された可能性が高い。

続いて後円部墳頂高を復元し、それにより埴輪樹立テラス面上位段築の存否について考証する。

後円部墳頂高の復元にあたり推定の根拠となるデータは、後円部墳頂平坦面の現況レベルおよびその範囲、墳丘主軸トレンチ（Ｔ１）で確認された後円部盛土の傾斜角度である。（後円部盛土の傾斜角度は45°、墳頂平坦面のレベルは現況で85～85.3mをはかる）これらを後円部８等分グリットに関連付けて解釈した結果、後円部墳頂の平坦面直径は11.5m、高さは標高85.7mに想定するのが最も適していると考えられ、それは現状の墳丘高および墳頂部平坦面の遺存状況とも矛盾を見ないことが判明した。

その想定に基づいて墳丘断面を復元した結果が第11図（破線部分）であるが、それによると‘墳端部から１段目テラスまでの高さ’と‘１段目テラスから墳頂部までの高さ’の比率が３：２（後円部西側）～３：４（後円部東側）の範囲に収まり、１段目テラス上位に段築を想定するよりも２段築成であったとするほうが全体としてバランスのとれた構造になると考えられる。しかしながら、上位段築の存否を確定できる証拠は見つかっておらず、根拠のない推測は避けるべきかも知れない。



第12図　墳丘想定復元図（Ｓ＝１：400）

したがって天神山古墳は、少なくとも１段の段築を有する古墳で、どちらかというと二段築成の前方後円墳である可能性が強い。第11図および第12図において推定復元した古墳の特徴としては、墳丘段築テラス上（１段目）に円筒埴輪列をめぐらすことの他に、東くびれ部から前方部東側にかけての部分に地山整形によって造り出すテラス状区画を有すること、前方部１段目墳丘が台形状に広がるのに対して上段墳丘は長方形状を呈することが挙げられる。(注2)

（注１）　円筒埴輪列が古墳を全周することは、墳丘上から流れ落ちた円筒埴輪片が古墳の周囲を取り囲んで出土していることより補強できるが、石室周辺の埴輪樹立状況については盗掘時に生じた攪乱の影響が大きく、発掘直前まで農業倉庫が建設されていたこともあって断定できない。

（注２）　復元想定図において、二段築成の前方後円墳として復元した。前方部の高さは後円部の高さとほぼ等しいものとして描いたが、実際の墳丘調査成果に基づくものではないことを断っておく。さらに、前方部東側に想定したテラス状区画の存在も推定の域をでるものではない。

(5) 天神山古墳のもつ視覚的効果

前方後円墳と円墳の違いは、円形の墳丘に長方形状の墳丘が付加するか否かにある。一般的に、前方後円形をした墳丘のほうが円形あるいは方形をした墳丘よりもランクが上であるとされており、そこには畿内大和政権の支配体制が現れているといわれているが、もしそうであれば当時の人々もそのことを当然理解していたものと考えられる。したがって、いかなる古墳もそれがもたらす“視覚的効果”をある程度期待して造られたことは確実で、前方後円墳ならばなおさらであったと考えられる。

前方後円墳が外見上（視覚的に）どのような印象を与えるかというと、円墳とも方墳とも異なる印象、円墳と方墳が融合されたことによって生じる独特な印象を与えてくれる。すなわち、前方後円墳の持つ最大の効果とは、２つの山が連なる長大な墳丘の存在を周辺地域に誇示することであり、そのような墳丘をもつ首長の力を周囲に知らしめることにある。

天神山古墳は、墳丘の主軸を南北方向に有することより、視覚的効果は特に墳丘の西側および東側から得られると考えられる。また、墳端部地山整形痕のレベルは、西側が81.7～82m、東側が82.2～83m、北側が81.7～82.2m、南側が82～83mを示し、天神山古墳は東(南)から見るよりも西(北)側から眺めたほうが威圧感のある古墳だということがわかる。すなわち、天神山古墳は西(北)からの外観を重視して造られた古墳であるとも言い換えることが可能で、つまり天神山古墳は、古墳の立地する台地の西(北)側に広がる地域に対して権力を誇示した古墳である可能性が強い。

［主要参考文献］

江浦洋・本田奈都子・瀬戸哲也・渡辺正巳1998　『蔵塚古墳－南阪奈道路建設に伴う後期前方後円墳の発掘調査－』㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第24集

石井隆博1997　「三ッ城古墳の築造企画」『大型古墳の築造と企画 第３回三ッ城古墳シンポジウム記録集』東広島市教育委員会

樋口吉文1997　「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社

小田富士雄・福岡大学考古学研究室1998　『国史跡 五郎山古墳－保存整備事業に伴う発掘調査－』筑紫野市文化財調査報告書 第57集

宮川徒・茂木雅博1992　「５ 企画と技術」『古墳時代の研究 第７巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣出版株式会社

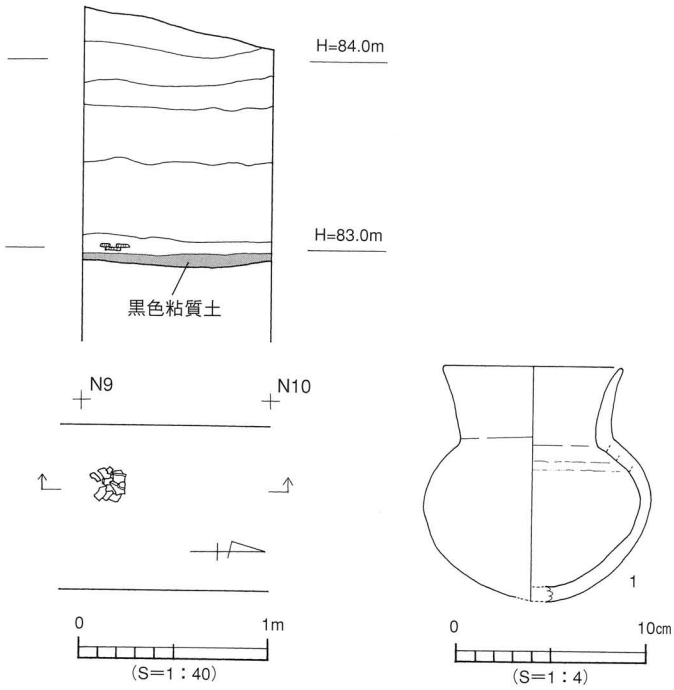
高尾和長・宮内慎一・相原浩二・水本完児1998　『大峰ヶ台遺跡Ⅱ ９次調査』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅴ章　墳丘出土遺物

1．トレンチ出土遺物

第13図１は、墳丘構造把握のために設定したトレンチ（Ｔ１）において出土した土師器の小型丸底壺である。黒色粘土層の直上盛土中において、土圧により潰れた状態で出土した。出土位置は、後円部中心より北側に9.2m離れた地点、すなわち後円部北側墳端から北に1.2m離れた場所である。

また、第Ⅳ章で述べたように、天神山古墳は後円部を築造した後に前方部を築くことが判明している。したがって、遺物の出土レベルおよび、その出土地点を積極的に評価するならば、古墳築造過程中（後円部の築造終了後から前方部築造開始直前までの期間中）に小型丸底壺をもちいた墳丘祭祀が行われた可能性が高い。



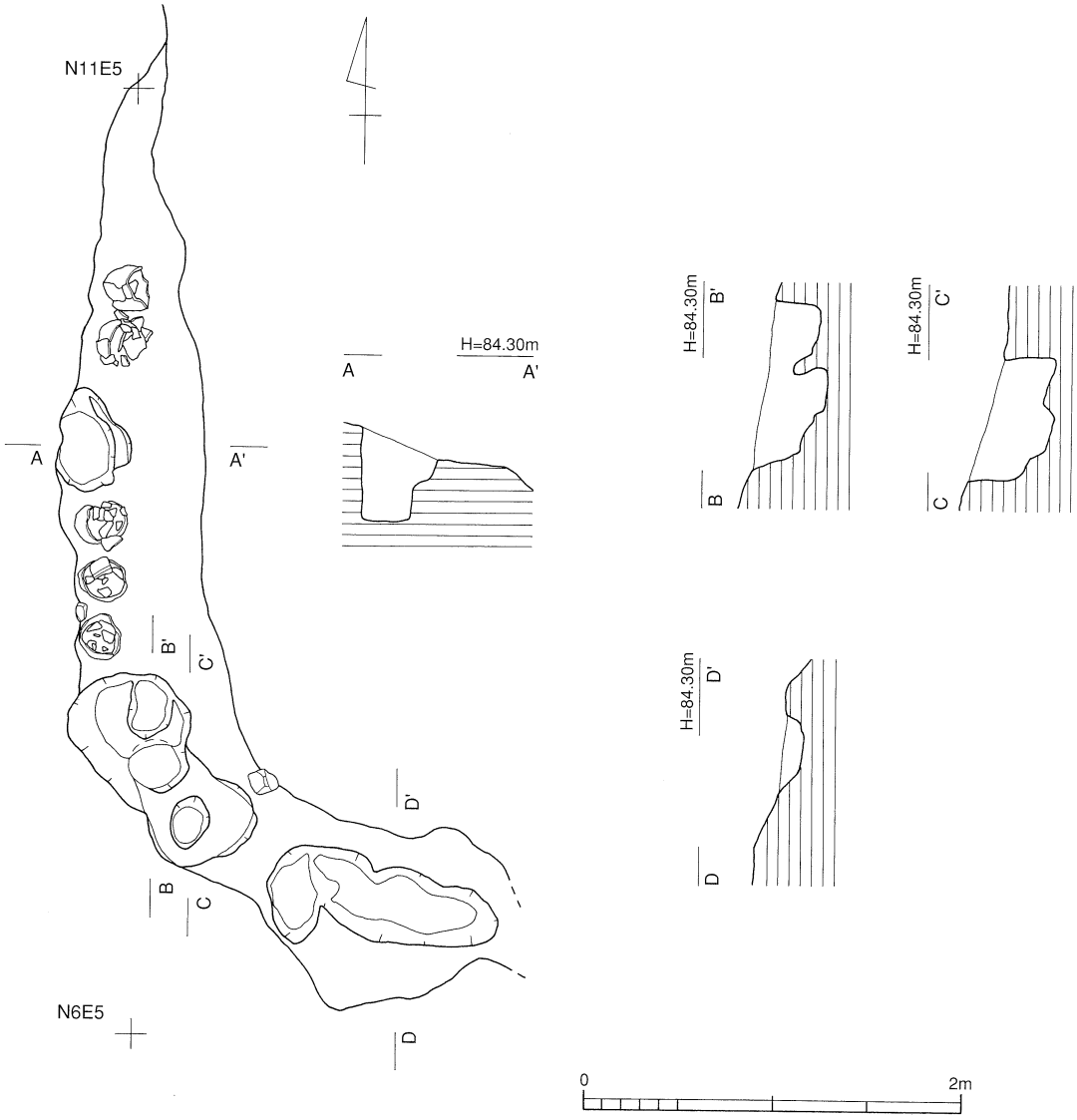
第13図　Ｔ１遺物出土状況・出土遺物実測図（Ｓ＝１：40・１：４）

2．東くびれ部円筒埴輪列・須恵器大甕

円筒埴輪片集中出土地点において検出した攪乱坑（第４図）の床面より、円筒埴輪の基底部が並んだ状態で出土したことは第Ⅲ章において説明済みのところである。その後継続して調査を実施した結果、前方後円墳の東くびれ部墳丘段築テラスを検出し、テラス上に基底部を埋設した状態で立ち並ぶ円筒埴輪列を検出した。出土した円筒埴輪は合計５個体で、いずれも基底部下半を埋設した状態、最下段タガを地表に出すような状態で検出している。したがって本地点に樹立していた埴輪に限って言えば、段築テラス部分が若干の削平を受けていることを考慮したとしても、最下段タガは地表との境界付近に位置していた可能性が高い。(注1)　また、東くびれ部に設定したトレンチ（Ｔ７）によって円筒埴輪の樹立状況を土層断面で確認した結果（第９図）、墳丘周縁部に埴輪専用と考えられる‘しまりの弱い盛土’を確認した。しかしながらその盛土中に、円筒埴輪樹立時に基底部を設置するために設けた‘テラス面’あるいは樹立作業に伴う‘掘り方’の存在は認められない。したがって、円筒埴輪の樹立は墳丘築造の設計段階より決定しており、墳丘中央部の盛土作業および円筒埴輪樹立部分の盛土と埴輪の樹立作業が、複雑に絡み合いながら並行して行われた可能性が強い。

また、円筒埴輪列に沿うかたちで数個の穴を確認したが、埴輪の底部を伴っておらず流土と共に若干の埴輪片を混入することより、円筒埴輪の‘抜き取り痕’であると考えられる。

第14図　東くびれ部埴輪列樹立状況（S＝1：20）



第15図　東くびれ部埴輪列完掘状況（S＝1：40）

さらに、円筒埴輪列樹立テラス面の上方に位置する墳丘緩斜面上において、須恵器大甕の底部を2個体分検出した。底部が墳丘盛土中に埋もれた状態で、くびれ部テラスと近接した位置に検出していることより、須恵器大甕は墳丘斜面上に直接埋設された可能性が高いと考えられる。

第20図15・16および第33図127・129・130は、東くびれ部テラス上の埴輪列を構成していた円筒埴輪である。土師質で焼成は良好、筒部外面にタテハケ調整を施し2次調整は認められない。タガは低い台形あるいはM字状を呈し、無黒斑である。基底部外面にナデ調整を施し、(注2)その後基底部下半に板状工具による押圧痕を残す。

第48図326および第49図329は、東くびれ部テラス面上方の墳丘緩斜面において出土した須恵器大甕である。326・329ともに胴部上位に最大径をもち、丸底の底部を有する。それぞれ器高47.8cm、54.3cm口径23.2cm、23.1cmを測る。

（注1）　天神山古墳出土埴輪の特徴は様々で、なかには基底部が極端に短いものもある。したがってすべての埴輪について適切な説明だとは言い切れない。

（注2）　第20図16において、タテハケ調整の上よりナデ調整することが確認できるが、それが普遍的なものかどうか確証を得ることができない。

3．墳裾周辺流土内出土遺物

天神山古墳の墳丘（特に墳裾部）は墳丘流土および客土によって埋没しており、さらに墳丘直上を被覆する墳丘流土中には多量の埴輪片および須恵器片が含まれていた。墳丘流土内には、上層に若干古代以降の遺物を包含するが、その下層に含まれる遺物は全て古墳時代後期の遺物に限定される。

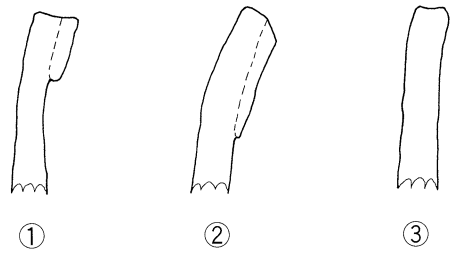
墳丘流土は天神山古墳の盛土が崩壊して流れた結果、墳裾部に堆積した土砂であり、また天神山古墳に近接して同時期の古墳が存在した可能性はない。したがって、墳丘流土内より出土した遺物は、ほとんど当古墳に伴う遺物であると考えることが可能である。

以下、埴輪および須恵器、土師器に分けて若干の説明を加える。

(1) 円筒埴輪

出土した埴輪には、（普通）円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪がある。普通円筒埴輪に関しては、口縁端部の表現に特徴が観られ、口縁端部外面に①細いタガを有するもの、②太いタガを有するもの、③タガをもたないもの、以上３タイプに分類可能である。（第16図）

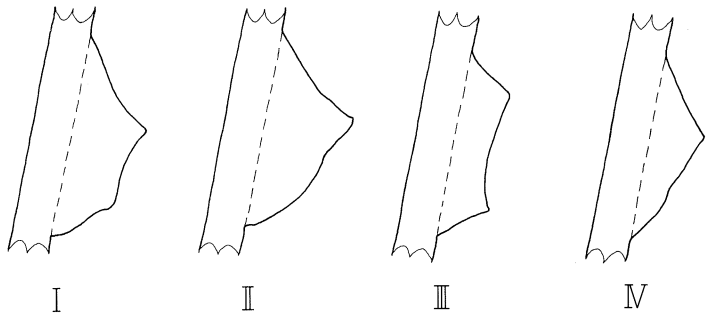
挿図の掲載順序は、ほとんどそれに基づいて決定したが、６分の１掲載資料（大型品）と４分の１掲載資料とにわかれる為、一部不規則であることを断っておく。また、筒部単独資料および基底部資料に関しては（普通）円筒埴輪および朝顔形円筒埴輪の区別が明瞭でなく、その判断が困難であるため最後に一括して掲載した。



第16図　円筒埴輪口縁部分類

今回出土した円筒埴輪（朝顔形を含む）のタガはその形状より、Ⅰ…タガの上端をつまみ出し、下端は丸みを持たせてつまみ出すタイプ、Ⅱ…タガの上端をつまみ出し、下端は丸みを帯びるもの、Ⅲ…突出度の低いM字突帯、Ⅳ…上端部をつまみ出すものの、下端部のつまみ出しが非常に弱く、そのため断面三角形状を呈するもの、以上大きく４つのタイプに分類可能である。（第17図）

第18図２～第19図８、第22図26および28～34は口縁端部外面に細いタガを有する円筒埴輪、第19図９・10、第22図25・27は太いタガを有する円筒埴輪、第19図11～第20図17、第23図35～42は口縁端部外面にタガをもたない円筒埴輪、第21図および第24図～第26図は朝顔形円筒埴輪である。



第17図　円筒埴輪タガ分類

そこで、各タイプの円筒埴輪ごとにその埴輪の持つ属性を観察し検討した結果、以下に示す特徴が判明した。（表３～10参照）

①タイプの円筒埴輪は総じて焼成良好で堅固、やや還元焔焼成された個体が多く、筒部タガの形状はほとんどがⅠ式あるいはⅡ式である。②タイプの個体については出土点数が少なく、個体による差異が著しいため言及することはできないが、③タイプの円筒埴輪は、①タイプに比して酸化焔焼成が著しく脆い個体がほとんどである。さらに、筒部タガの形状はほとんどⅢ式で、Ⅱ式の個体がわずかに１点含まれる。

以上のことより、①タイプの口縁を有する円筒埴輪と、③タイプの口縁を有する円筒埴輪が、全く相異なる属性を有することがわかる。それぞれの焼成（色調）が異なり、タガの形状も全く異なるというのは一体どういうことなのであろうか。このことを念頭に置きつつ、続いて朝顔形円筒埴輪の属性および、円筒埴輪の筒部属性および基底部属性について考える。

朝顔形円筒埴輪に関して、口縁端部より基底部までの全容を知ることが可能な完形品は第21図24の１点のみである。さらに、筒部以下の部分に関しては普通円筒埴輪との判別がつきづらく、そのため筒部および基底部調整に関して不明な部分が多い。しかしながら、口縁部から受部、受部より肩部、肩部より筒部など、多様な破片が出土していることも事実であり、それらより情報の抽出を試みた。

その結果、ほとんどの朝顔形円筒埴輪は焼成が甘く、さらにⅢ式のタガを有することが判明した。すなわち③タイプの普通円筒埴輪と共通した特徴を有することになる。

つぎに、円筒埴輪筒部片について検討を加える。

円筒埴輪筒部片の属性を検討した結果、埴輪の焼成具合とタガの形状には以下のような関係が認められた。すなわち、焼成が比較的良好な個体のうち９割以上のタガ形状がⅡ式であり、さらに焼成がやや甘い埴輪のうち、５割を越える個体が同じくⅡ式のタガを持つことが判明した。これより、‘Ⅱ式のタガをもつ’という属性と‘焼成が良好’という属性は単純にイコールでつなげるものではなく、Ⅱ式のタガを持つ埴輪の中でも一部の埴輪、すなわち①タイプの口縁を有する埴輪を主体とした円筒埴輪が良好な焼成条件のもとにおかれていた可能性が高い。

つづいて、円筒埴輪基底部の成形および調整方法の面から検討を加える。基底部直径は、ほとんどが17cm～26cmの範囲（20cm前後に集中する）に収まるもので、タガの形状あるいは焼成状態との関連はないと考えられる。しかしながら、タガの形状あるいは焼成状態などの影響を受けることなく20cm前後の大きさに収斂することより、ある程度同じ規格を志向して製作を開始した可能性も考えられる。(注1)

基底部の高さ、すなわち底部から最下段タガまでの高さは、およそ15cm未満とそれ以上でラインを引くことができる。一部例外は見られるものの、概して15cm未満の個体にはⅡ式あるいはⅠ式のタガが伴い、外器面にタテハケが顕著に残る個体が多い。さらにそれとは対照的に、15cm以上の基底部を有する埴輪にはⅢ式のタガが伴い、外器面調整としてはハケ目調整に加えて、ナデ調整、板状工具による押圧などが施される。(注2)また、それらと焼成状態との関連性は、筒部で得られた見解と同様、Ⅱ式のタガを持つ埴輪のうち一部の埴輪が良好な焼成を受けていると考えられる。

以上、天神山古墳出土円筒埴輪の属性を検討した結果、以下のことが判明した。

(1) 口縁端部に細いタガを貼り付けるタイプ(①タイプ)の円筒埴輪は、ほとんど筒部にⅠ式あるいはⅡ式のタガをもち、焼成良好でやや還元焔焼成を受けやすい条件のもとに焼成された可能性が強い。また、その基底部は高さ15cm未満の低いタイプであると考えられ、外器面にタテハケ調整痕を残す。

(2) 口縁端部にタガをもたない円筒埴輪（③タイプおよび朝顔形円筒埴輪）は、突出度の低いⅢ式の

タガを有し、酸化焔焼成された個体が多い。また、15cm以上を測る高い基底部をもち、外器面タテハケ調整に加えて、ナデ調整、板状工具による押圧を施す。

(3) Ⅰ式およびⅡ式のタガを有する埴輪のすべてが硬質（焼成良好）なわけではなく、そのうちの一部(主に口縁部タガを有する埴輪）に限って硬質に焼成された可能性が高い。

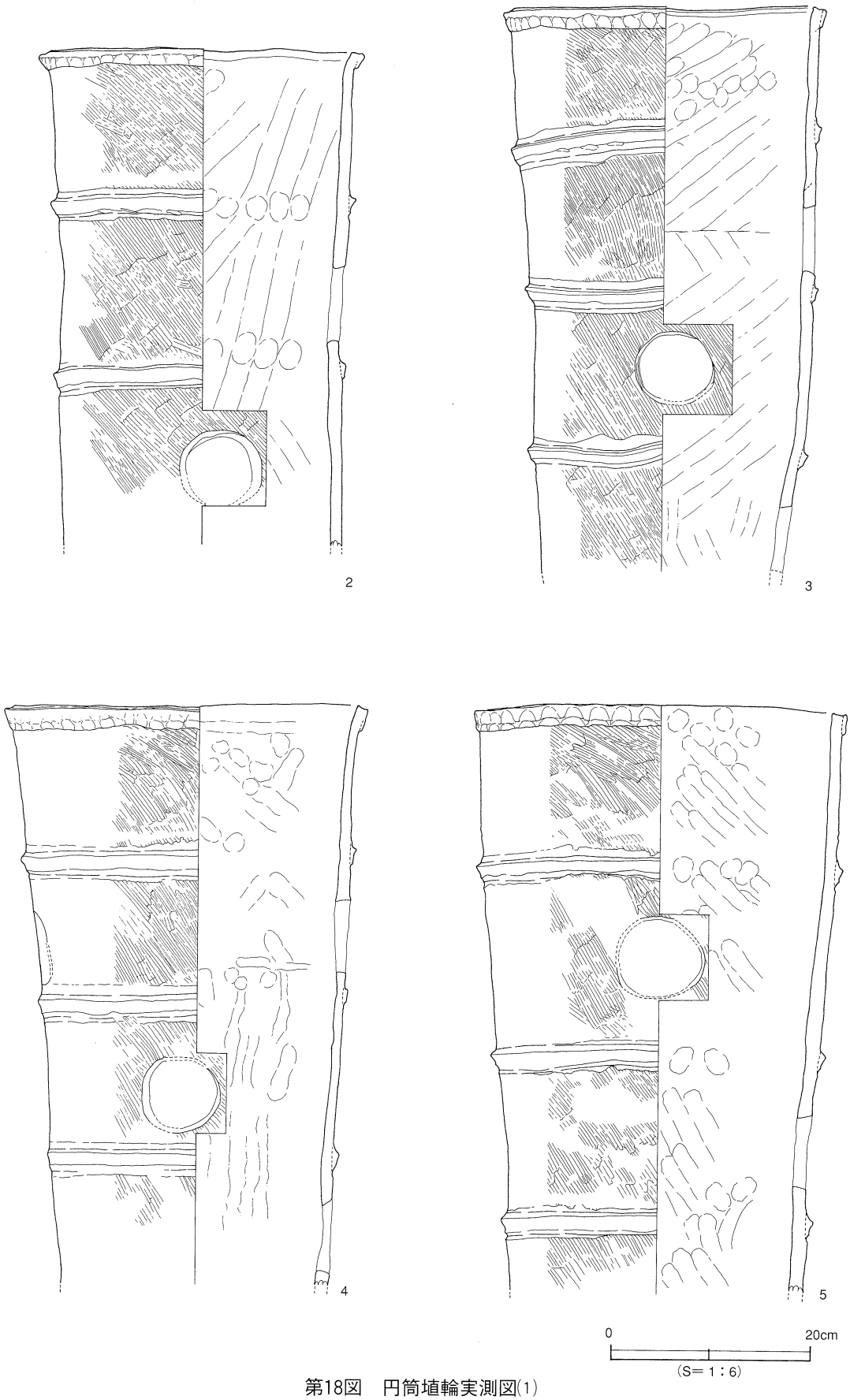
上記の見解は、出土埴輪すべてに適合するわけではなく、当然ながら若干の例外も含まれる。しかしながら、製作段階において'各タイプの埴輪が備えるべき特徴(属性)'がある程度決定していたことは確実で、すなわちそれぞれのタイプの埴輪はそれぞれの具体的イメージに基づいて製作された可能性が高い。では、それぞれのタイプの埴輪が'本来あるべき具体像'を有しているにもかかわらず、例外的に異なるタイプの属性(タガ形状、器面調整技法)が混入するのは一体どんな理由によるのであろうか。この事象は、「それぞれのタイプの円筒埴輪が完全に相異なる２つの集団で別々に製作された」と考えたのでは説明不可能で、したがって天神山古墳出土埴輪は、「同一集団あるいは親密な関係で結ばれた２つ以上の集団の中で製作された」可能性が高い。つまり、生活文化を共有する集団内で製作されたことによって、それぞれの円筒埴輪が有する属性が例外的に混同したと考えることが可能である。

以上、天神山古墳出土円筒埴輪が、同一集団内で製作された可能性が高いことを論じたが、ここで「天神山古墳出土円筒埴輪は一体どこで製作されてどこで焼成されたのか」という疑問が浮かんでくる。

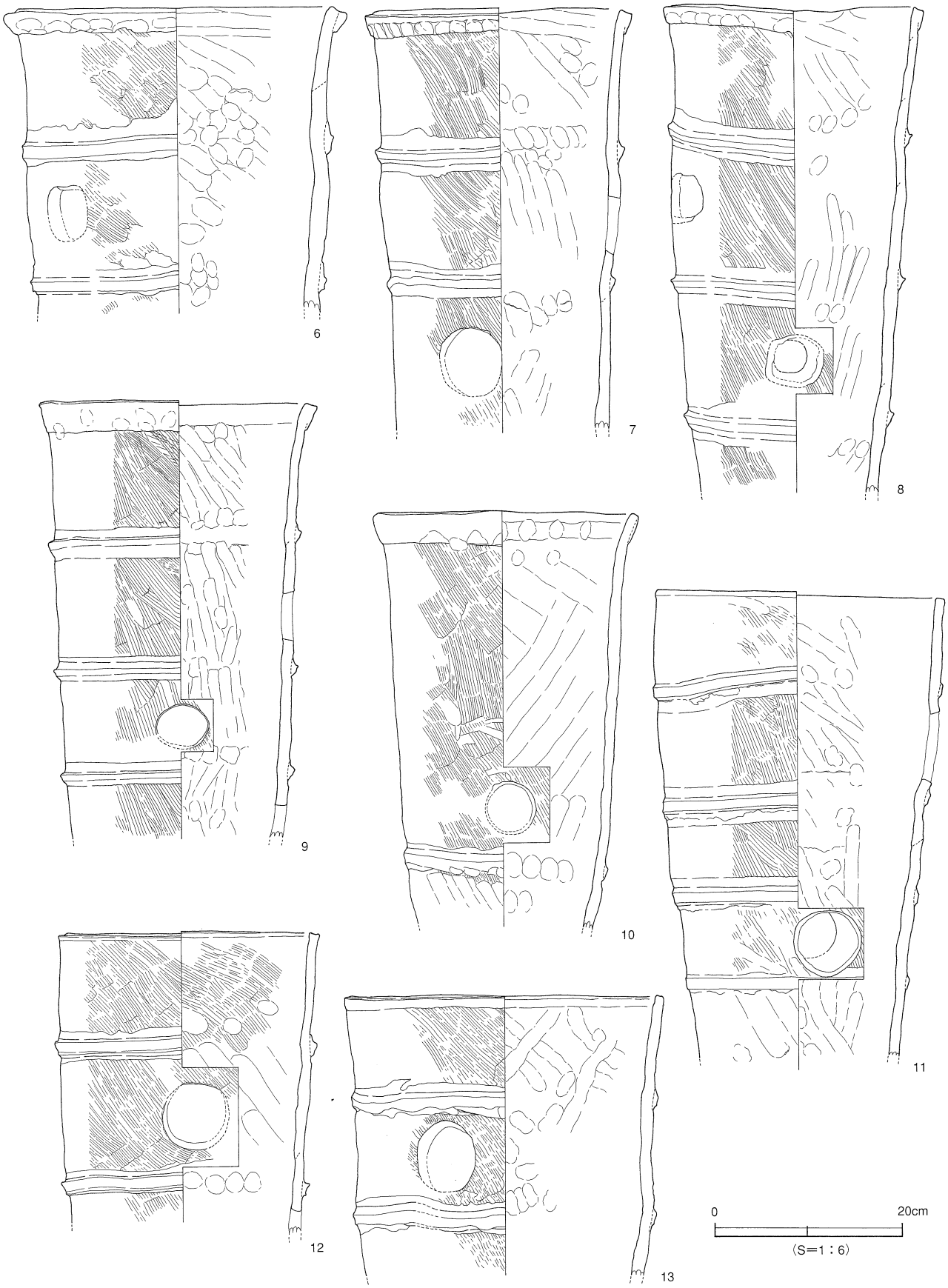
天神山古墳にやや先行する時期に築造された首長墳として三島神社古墳が知られており、調査の結果、天神山古墳同様墳丘上に円筒埴輪列をめぐらす前方後円墳であることを確認している。しかしながら、両古墳の埴輪には共通点が全く見られず、焼成・色調・胎土・大きさ・調整技法など総合的に判断して全く異なる集団によって作られたものだと考えられる。三島神社古墳の円筒埴輪は基底部最下段タガに断続ナデ技法を顕著に残し、基底部の高さが極端に短いという特徴をもつ。対して天神山古墳出土円筒埴輪の基底部最下段タガにいわゆる断続ナデ技法はみられず、その代わりに三島神社古墳の埴輪にはみられない特徴、すなわち「普通円筒埴輪のなかに口縁部にタガを貼り付ける１群が存在する」という特徴が備わっている。

現在、天神山古墳出土（普通）円筒埴輪に特徴的にみられる「口縁部タガ」を有する埴輪を出土する愛媛県内の古墳として、朝倉村に所在する樹の本古墳（５世紀中葉～末）および土壇原Ⅴ遺跡出土円筒埴輪棺が知られ、全国的にみても円筒埴輪に口縁部タガを貼り付ける古墳のほとんどが５世紀代の首長墳である。(注3)したがって、６世紀前半に築造されたと考えられる天神山古墳と比べて時期的に先行するものばかりであるといえる。しかしながら、松山平野南部に所在する土壇原Ⅴ遺跡で出土した円筒埴輪棺は年代の推定根拠に乏しく、また口縁部タガの形態およびそのプロポーションが天神山古墳とかなり共通している。さらに、出土した数基の円筒埴輪棺のなかに、口縁部タガを有する円筒埴輪と口縁部タガをもたない円筒埴輪の両方が存在するという状況は天神山古墳に酷似しており、この共通性は偶然とは言い切れない。将来、胎土分析など科学的な分析方法を用いて検証すべき課題であるが、天神山古墳出土円筒埴輪と土壇原出土円筒埴輪棺が同一集団に所属する工人によって製作されたと仮定するならば、供された円筒埴輪は松山平野南部地域、砥部川流域に広がる松山南部古窯址群およびその周辺に所在する窯業集団関連遺跡内において製作された可能性が高い。(注4)

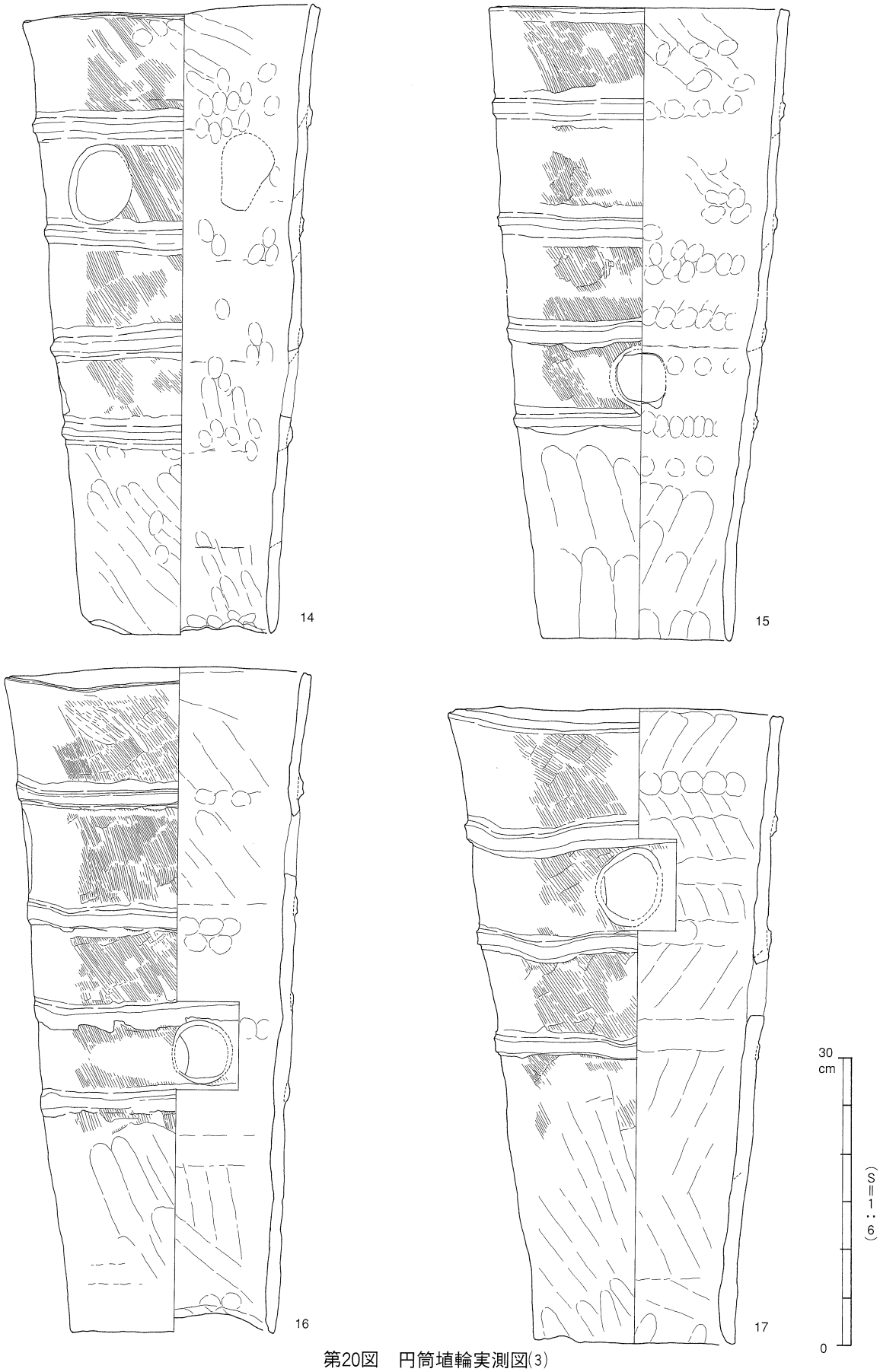
（注１） 岸本圭1996「北部九州における円筒埴輪の規格性」『九州考古学 71』、山内英樹2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(1)―谷田２号窯出土資料の再検討―」『紀要愛媛 創刊号』による。



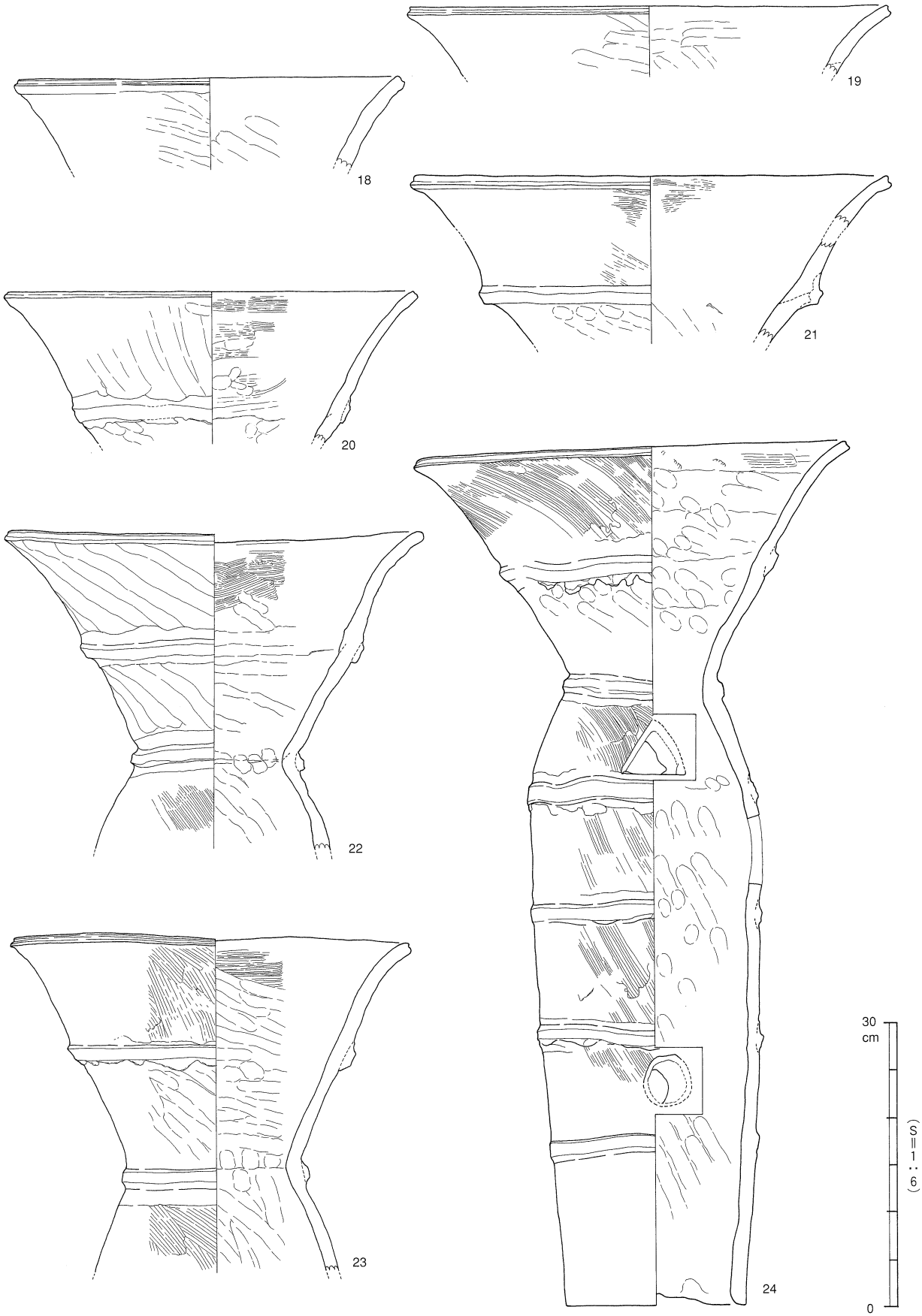
第18図　円筒埴輪実測図(1)



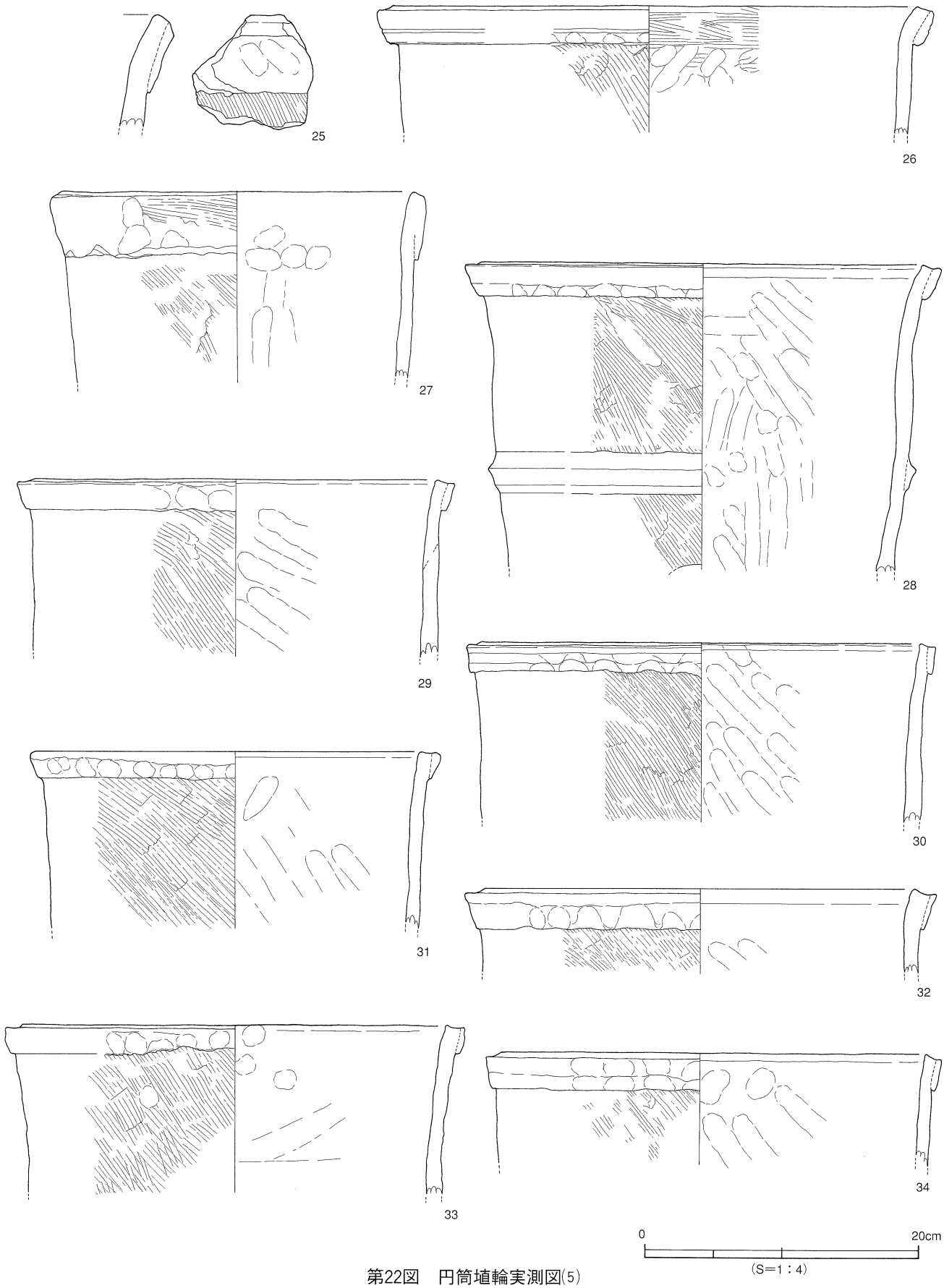
第19図　円筒埴輪実測図(2)



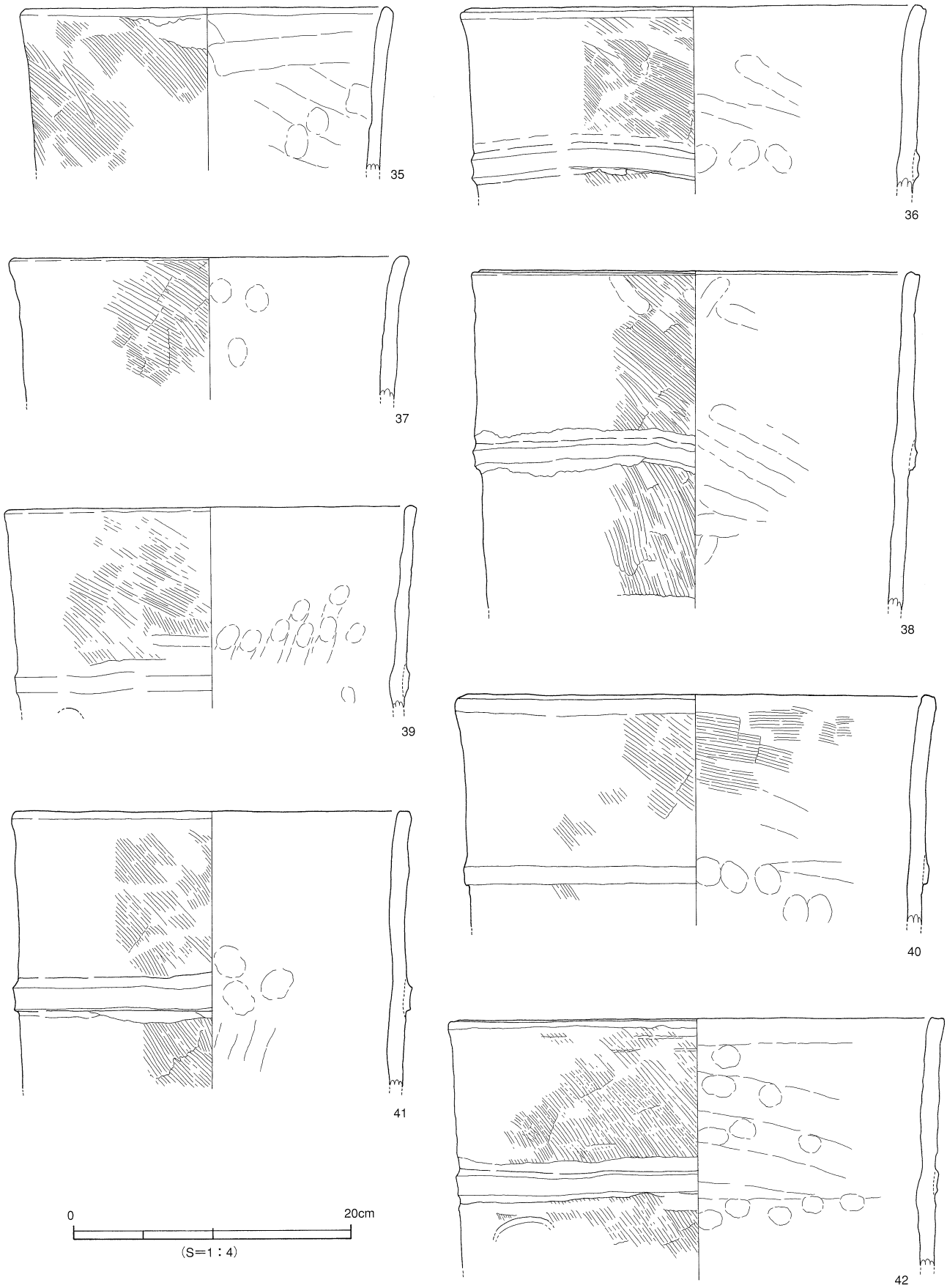
第20図　円筒埴輪実測図(3)



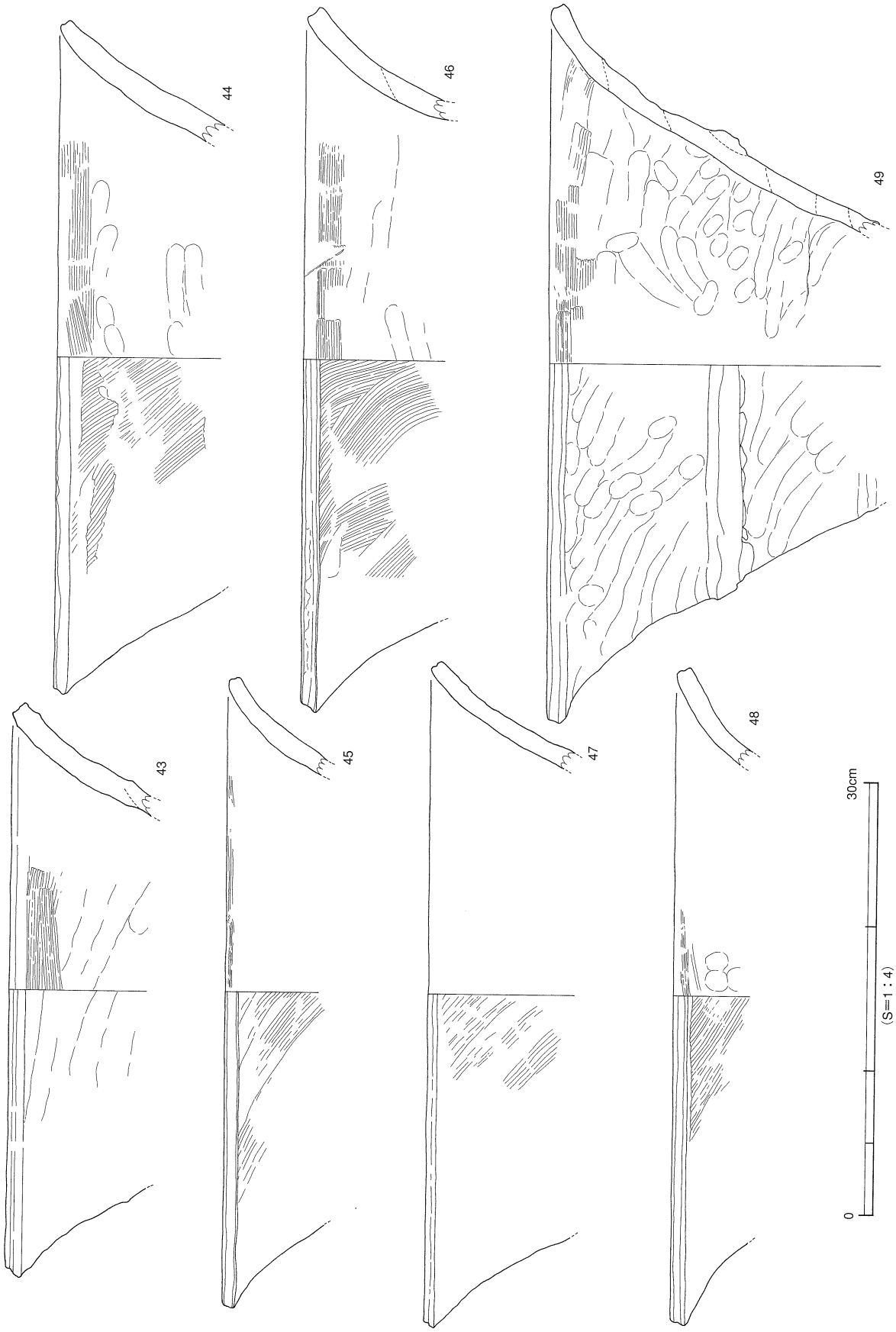
第21図　円筒埴輪実測図(4)



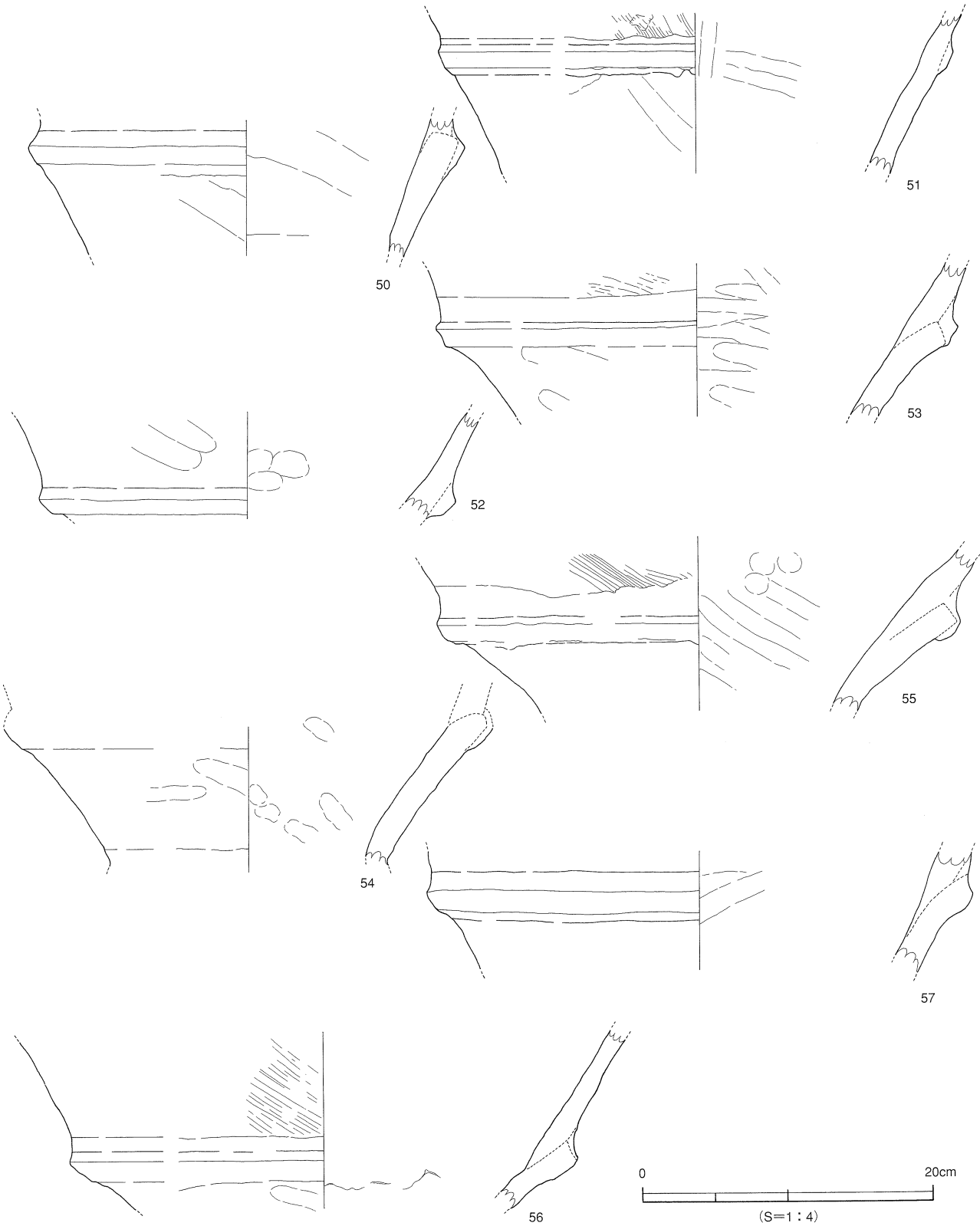
第22図　円筒埴輪実測図(5)



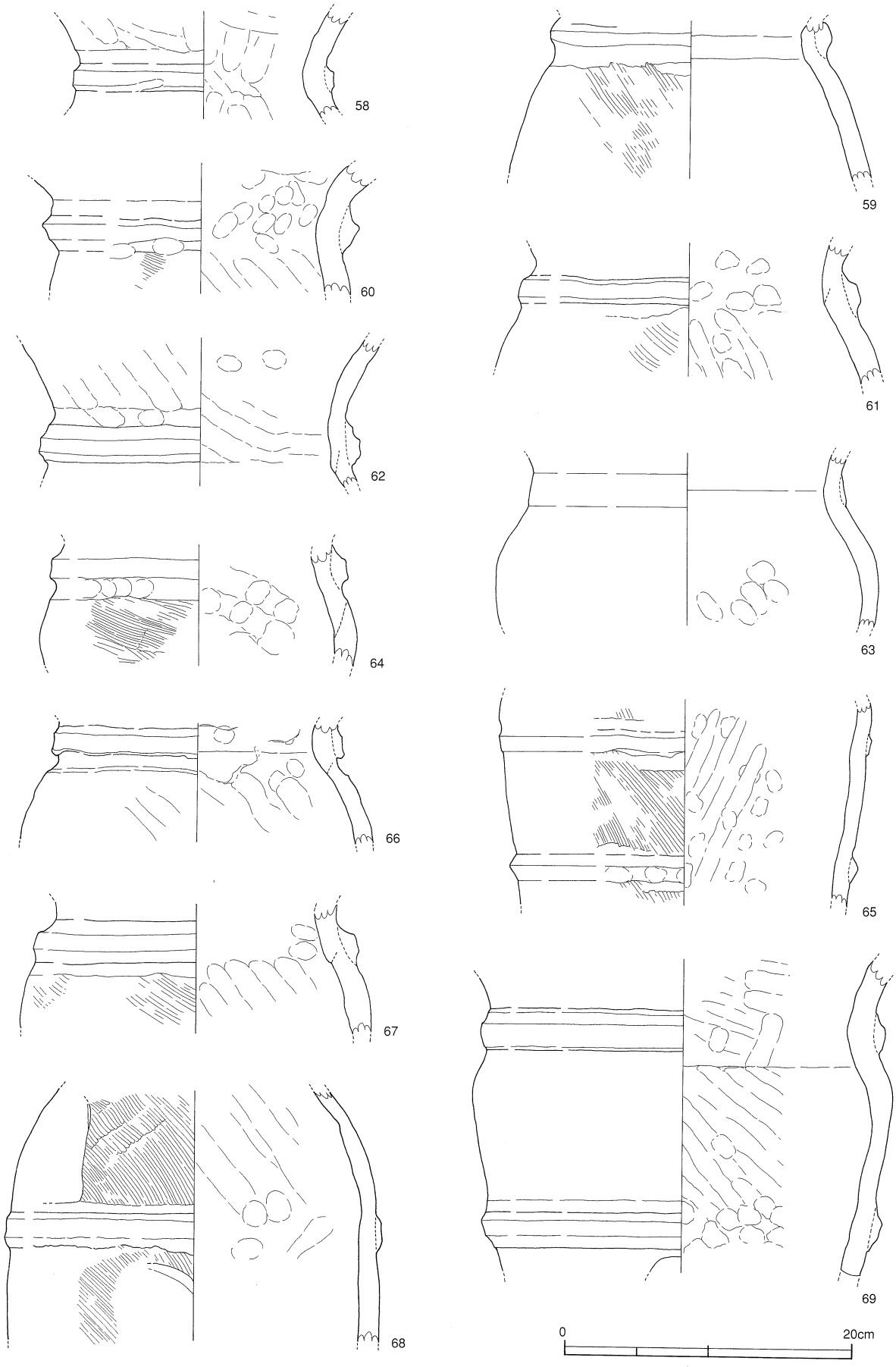
第23図　円筒埴輪実測図(6)



第24図　円筒埴輪実測図(7)



第25図　円筒埴輪実測図(8)



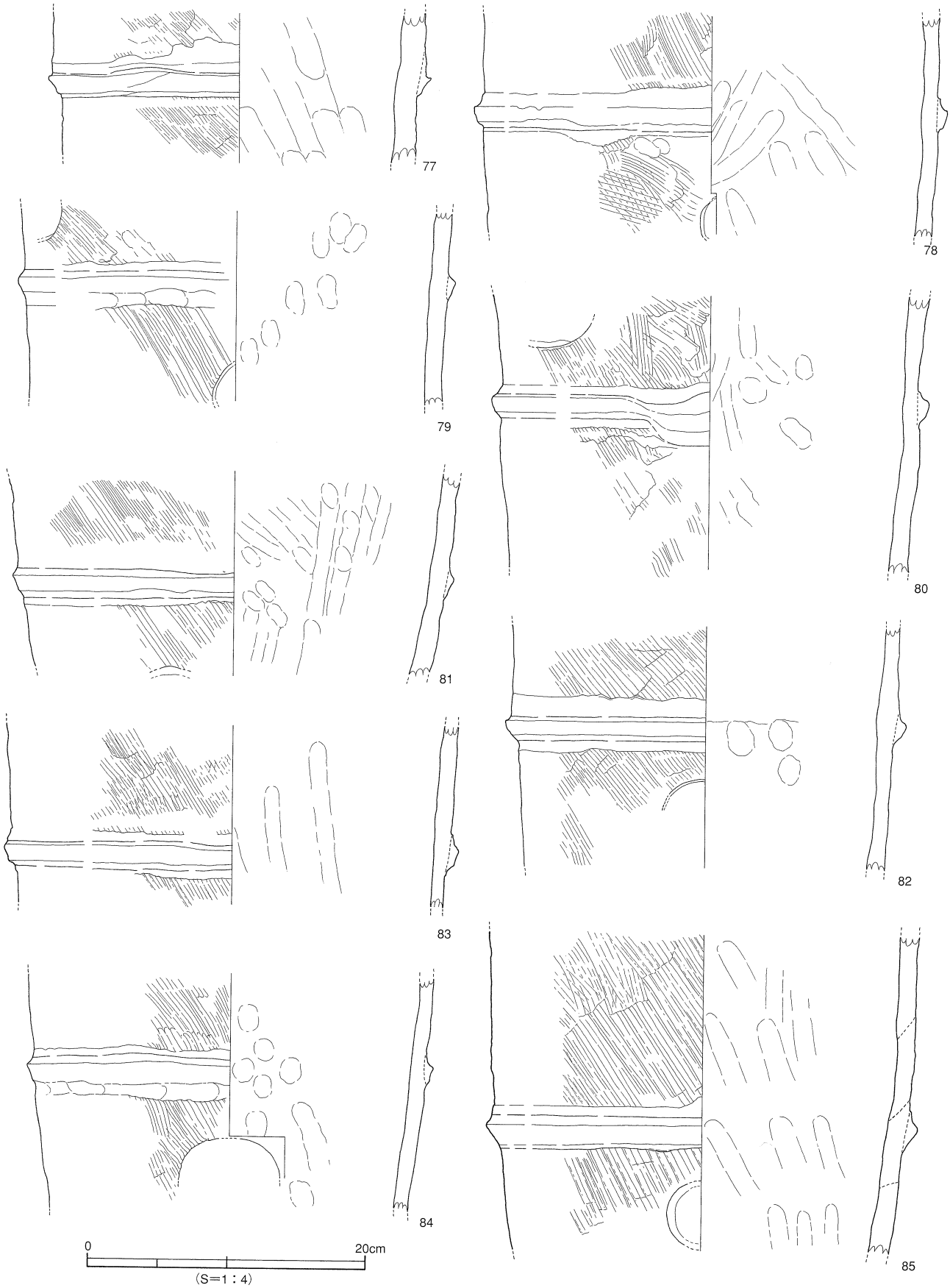
第26図　円筒埴輪実測図(9)　(S=1：4)

第27図　円筒埴輪実測図(10)

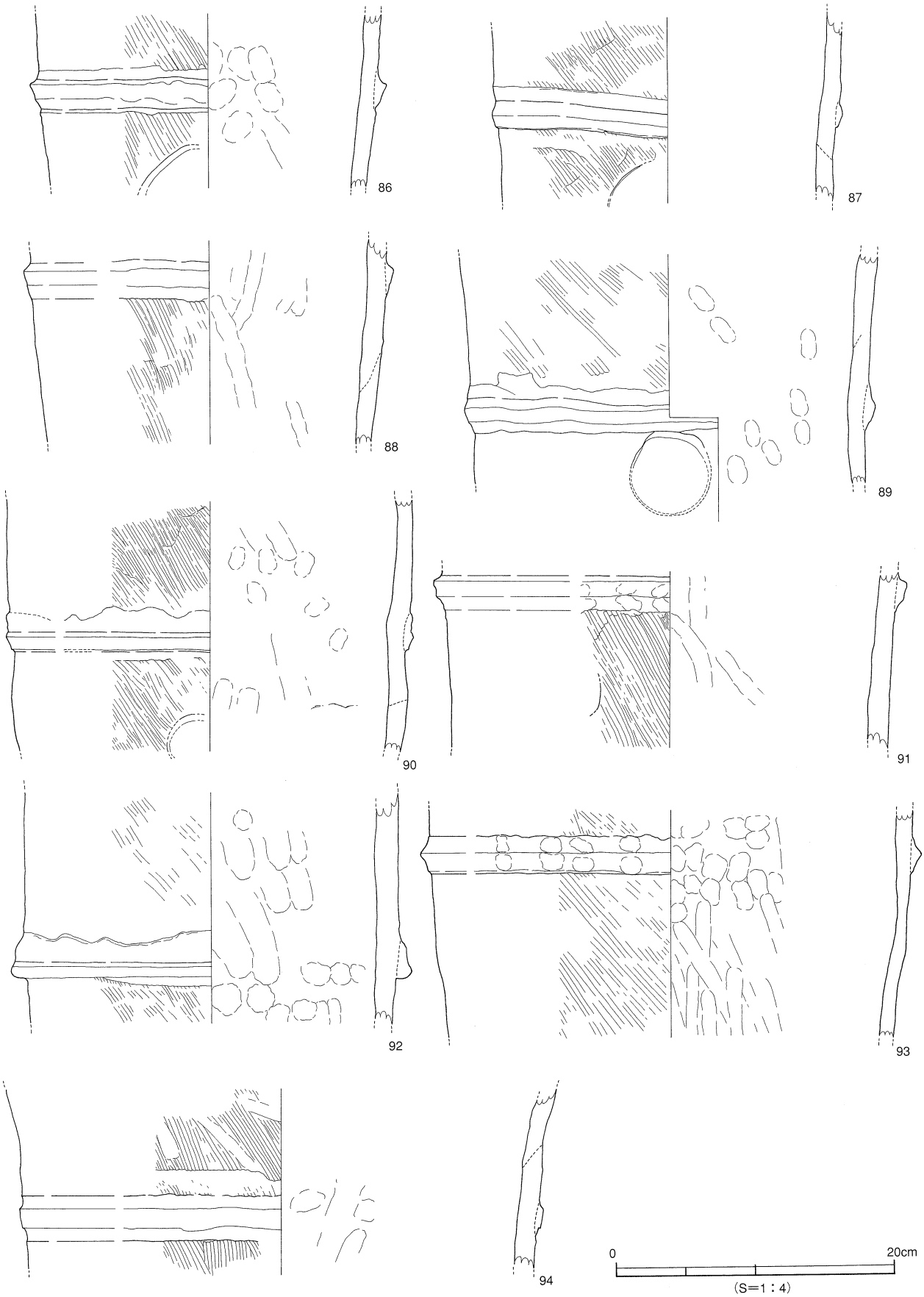
（注２）　基底部の高さによって調整方法が異なるのは、基底部を高くしたことによって生じる強度の減少によりもたらされると考えられる。

（注３）　愛媛県埋蔵文化財調査センター山内英樹氏の御教授による。

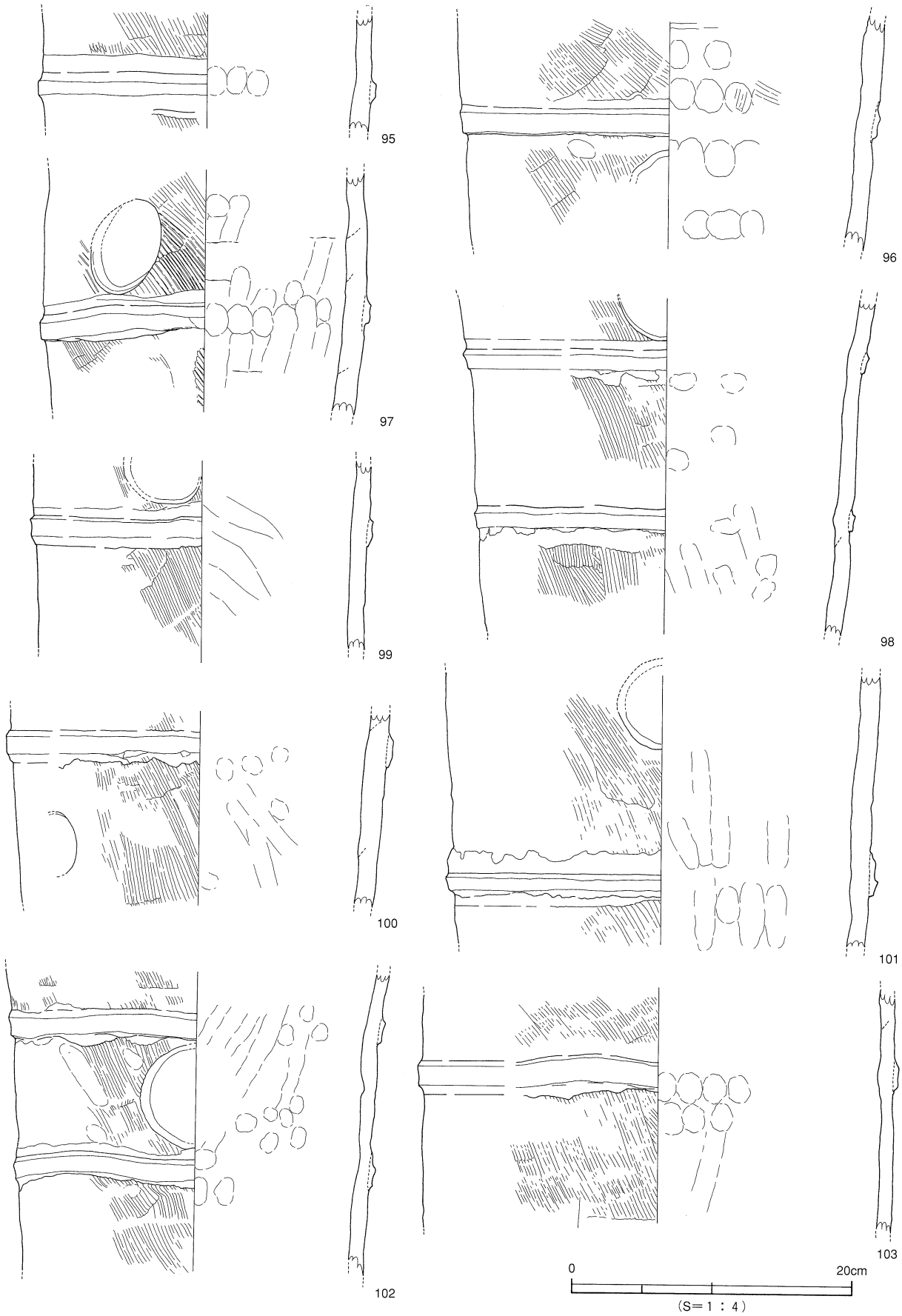
（注４）　本地域は現在、砥部川右岸地域を中心に19基の須恵器窯跡が周知され、６世紀中葉に属し須恵器・埴輪併焼窯である谷田２号窯、古鎌山１号窯、西野大池３号窯、通谷池１号窯が操業開始時期の窯跡として知られる。さらに、谷田２号窯出土須恵器の中にはＭＴ15～ＴＫ10併行期のものが多数含まれることが指摘されている。（山内英樹2000）



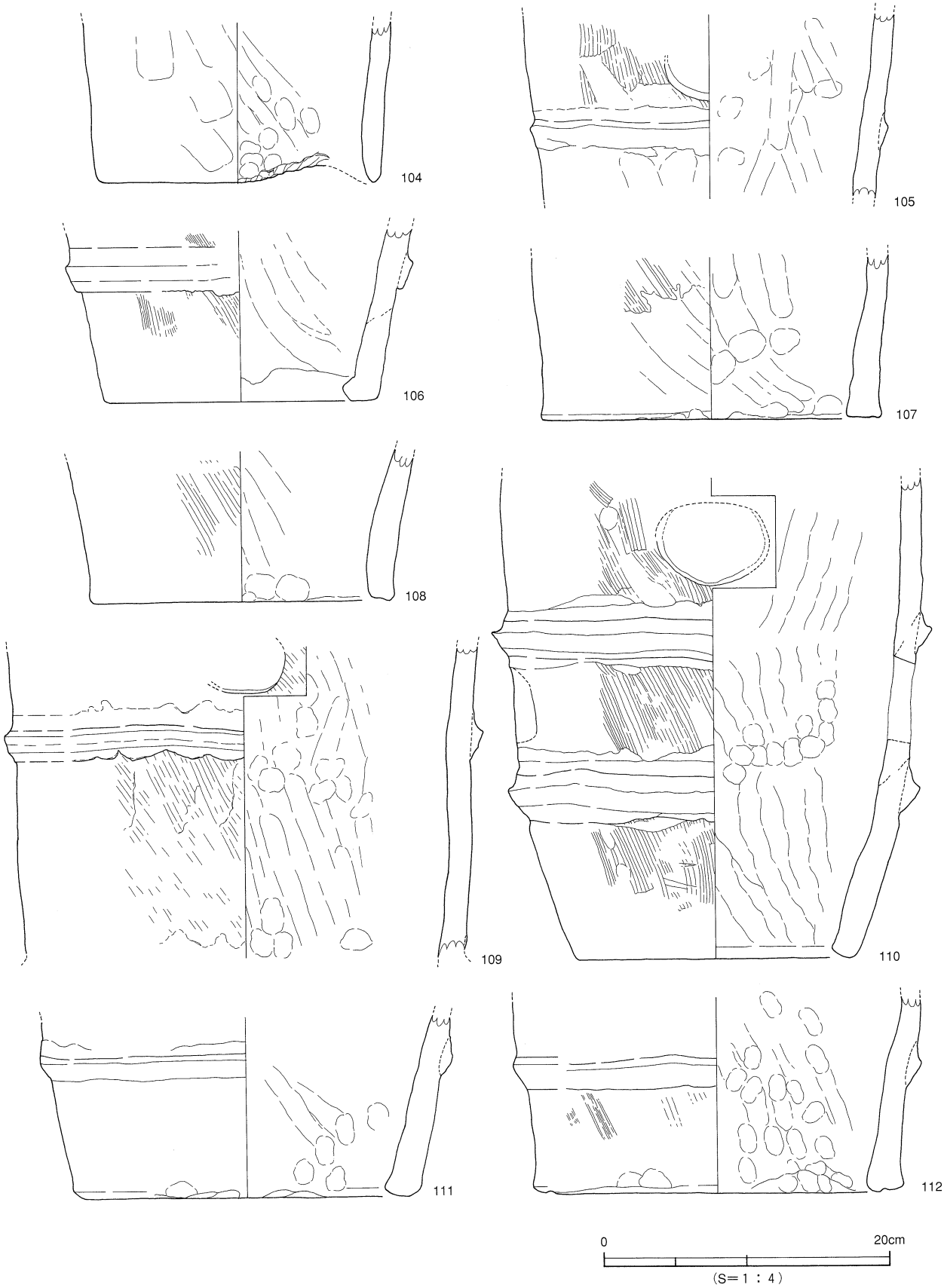
第28図　円筒埴輪実測図(11)



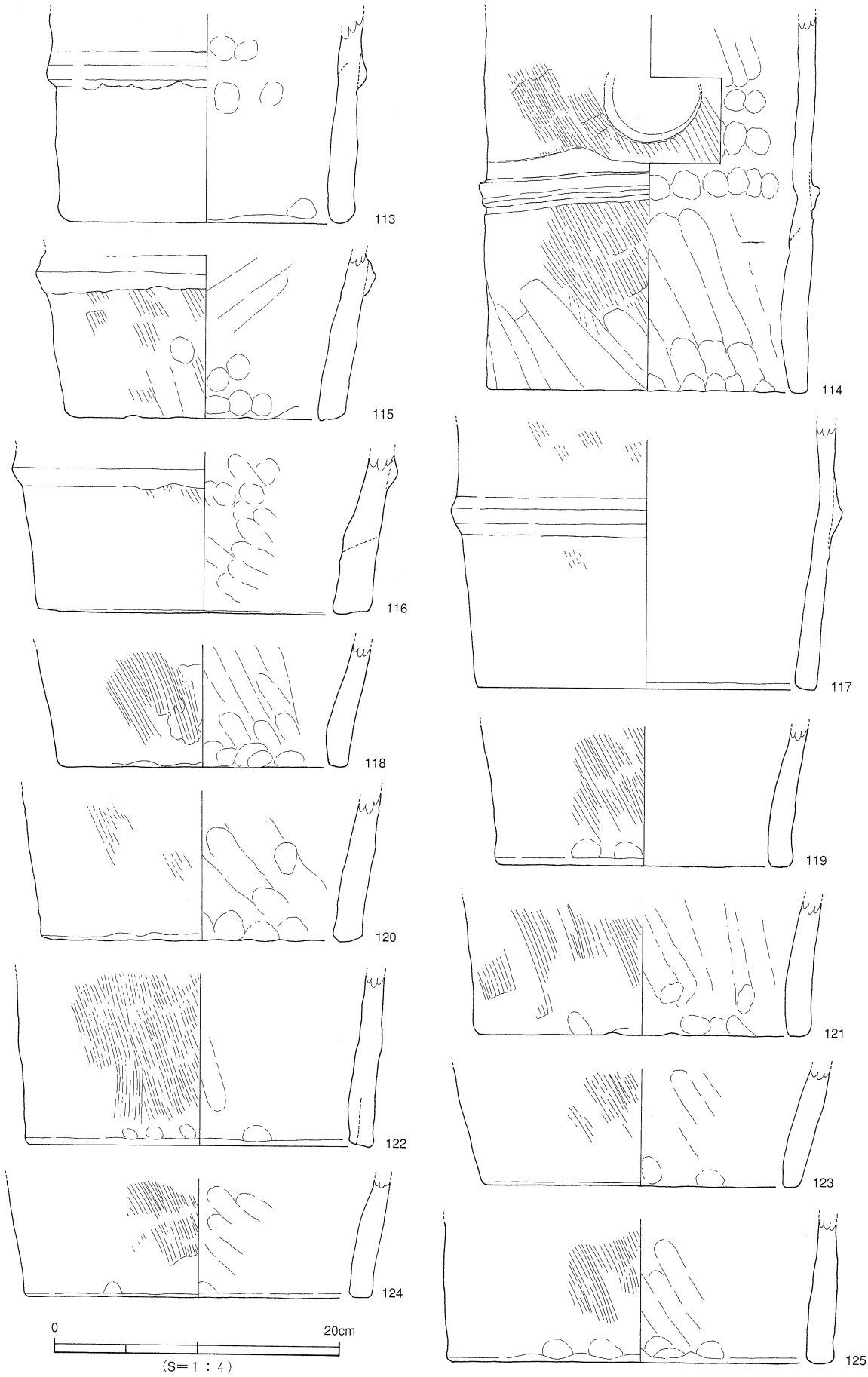
第29図　円筒埴輪実測図(12)



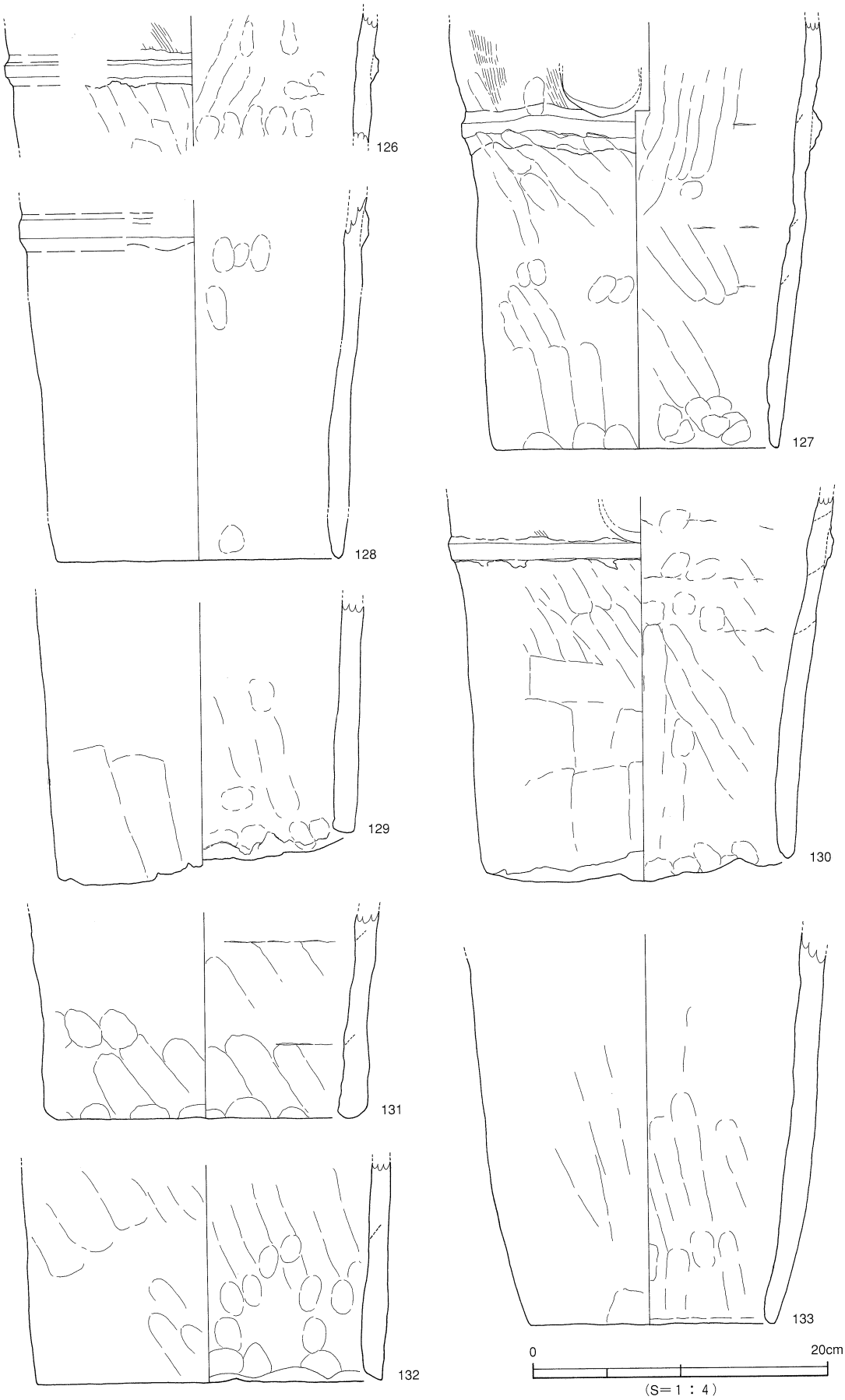
第30図　円筒埴輪実測図(13)



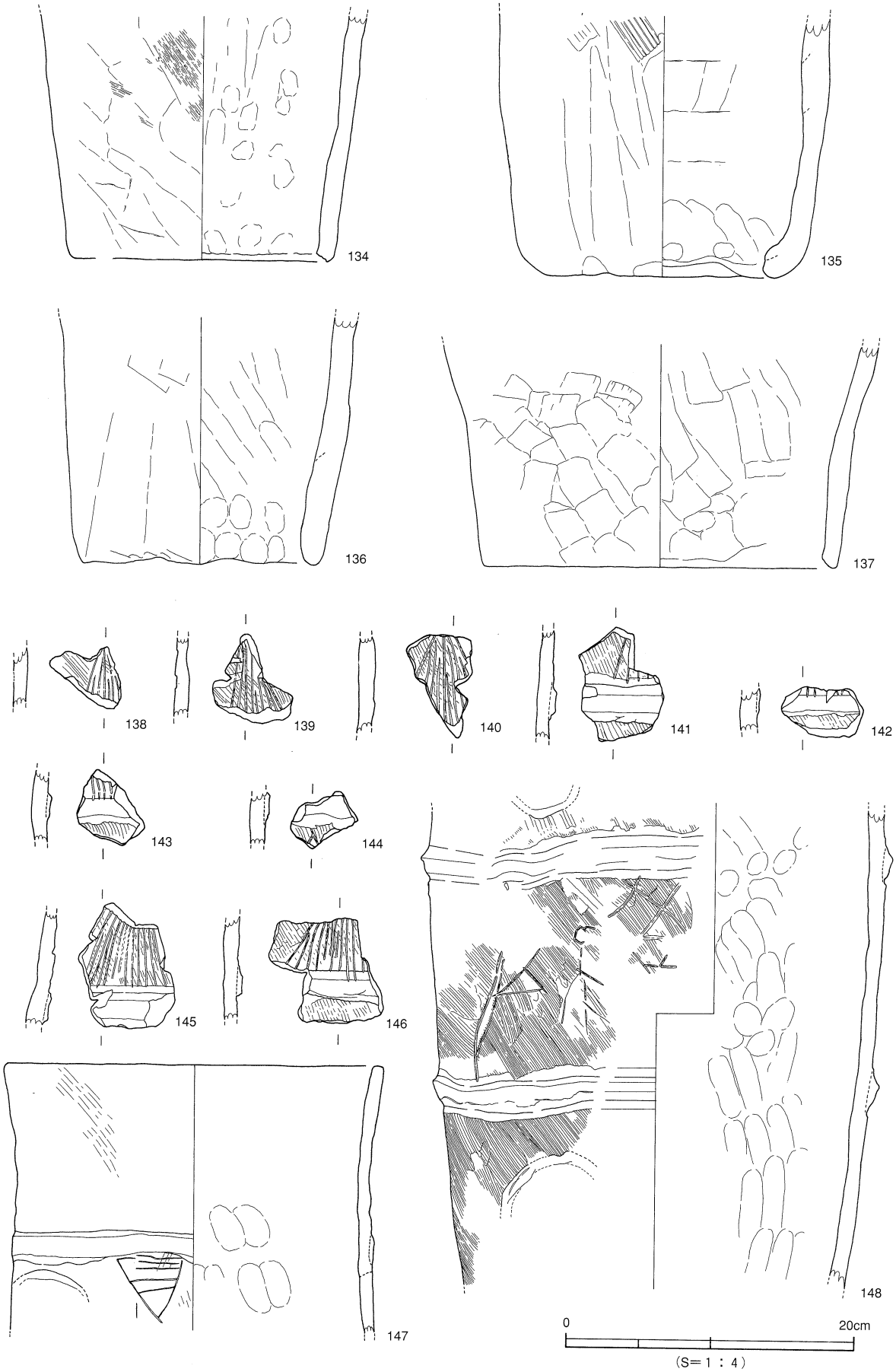
第31図　円筒埴輪実測図(14)



第32図　円筒埴輪実測図(15)



第33図　円筒埴輪実測図(16)



第34図　円筒埴輪実測図(17)・線刻埴輪実測図

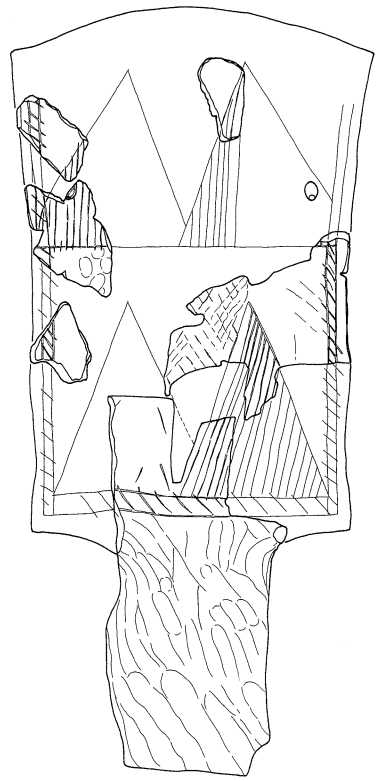
(2) 線刻埴輪・形象埴輪

線刻埴輪および形象埴輪のほとんどは、前方部西側のテラス状区画推定地より出土した。原位置を保った状態での出土はない。

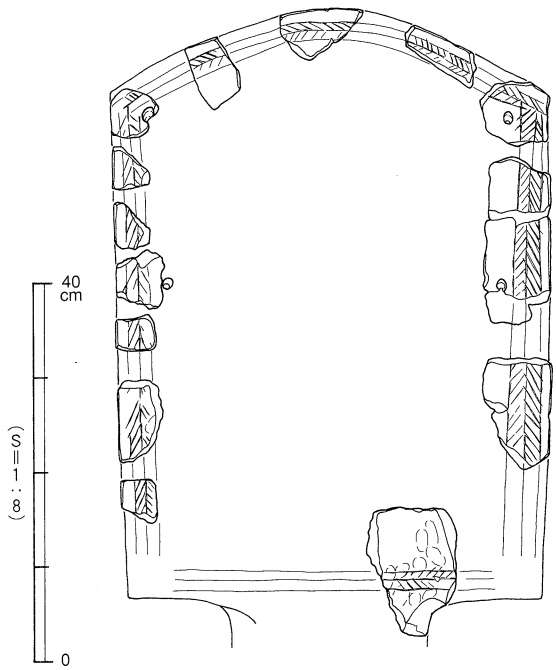
第34図138～148は線刻埴輪である。138～146は、三角形の内部に、頂点を基点とした放射状の線刻を施すタイプ、147は逆三角形に区画した図形内部に横線を数本配するもので、ヘラ記号の可能性も考えられる。また、148は人物あるいは動物の意匠を施したと考えられるものである。

第38図～第40図は盾形埴輪である。いずれの埴輪も基部製作後に、盾面の側辺部を基部の両側に貼り付ける点では共通した特長を有する。また、盾面の文様構成から判断すると、天神山古墳には少なくとも３種類の盾形埴輪が存在したものと考えられ、以下その特徴を簡単に説明する。

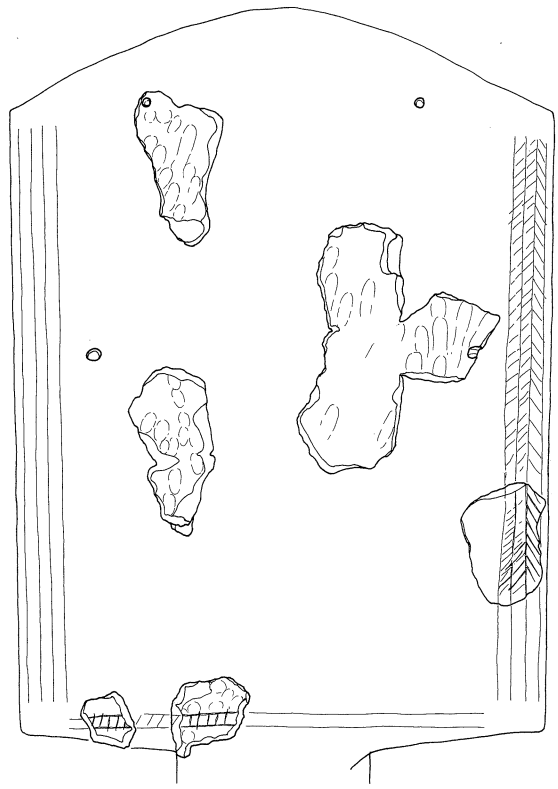
第38図に掲載した盾形埴輪は、盾面の側縁に梯子文をめぐらし、その内部を上下に区画しそれぞれ２つずつ、合計４つの巨大な鋸歯文を均等に配すると考えられる。また、下段左側の鋸歯文を一度線刻した後、明らかになで消した痕跡を残すが詳細は確認できない。頂部形態は判断材料に乏しく、盾面下端から約３分の２上方側辺に穿孔を有する。(第35図)



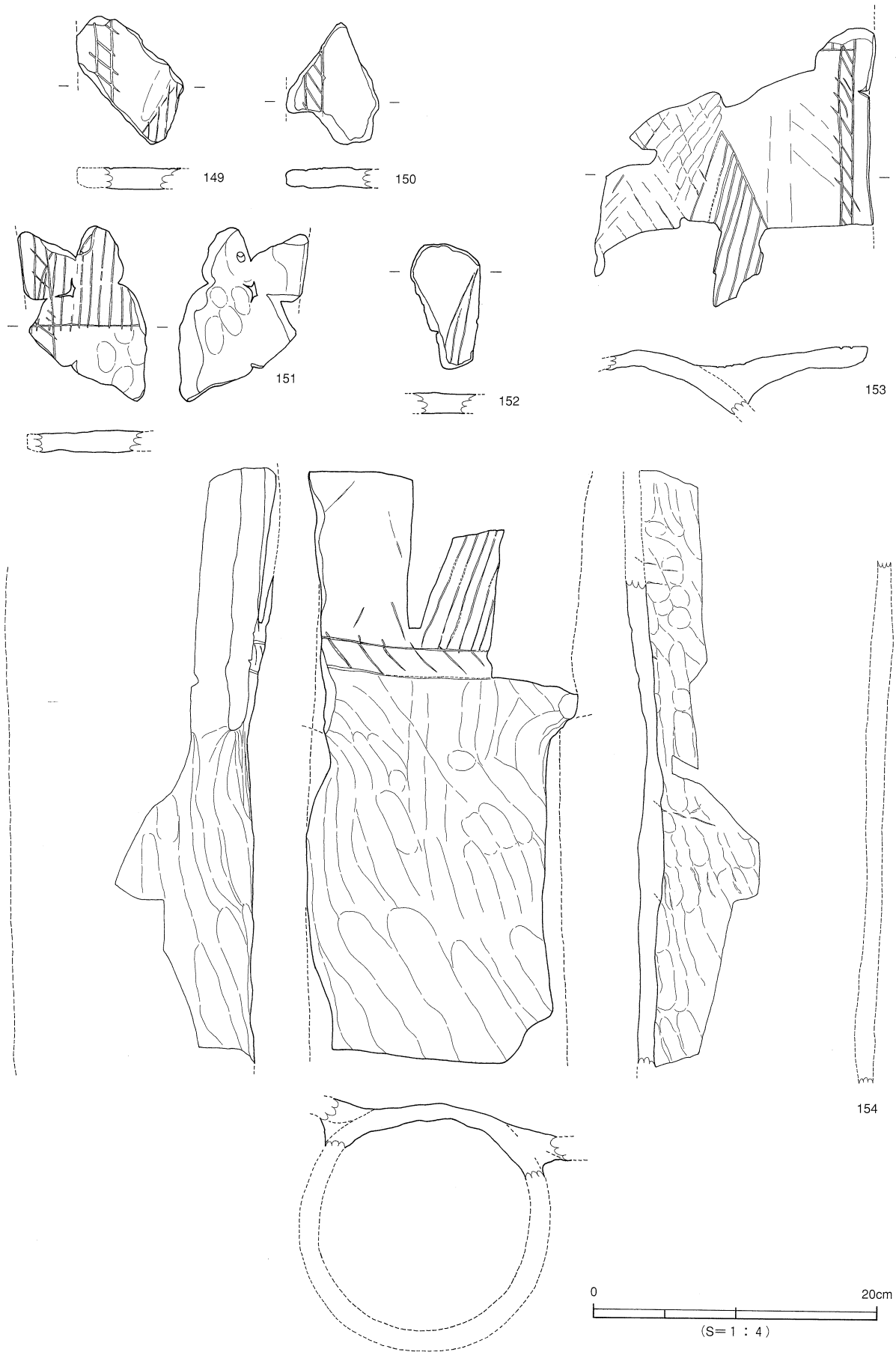
第35図　盾形埴輪推定復元図１



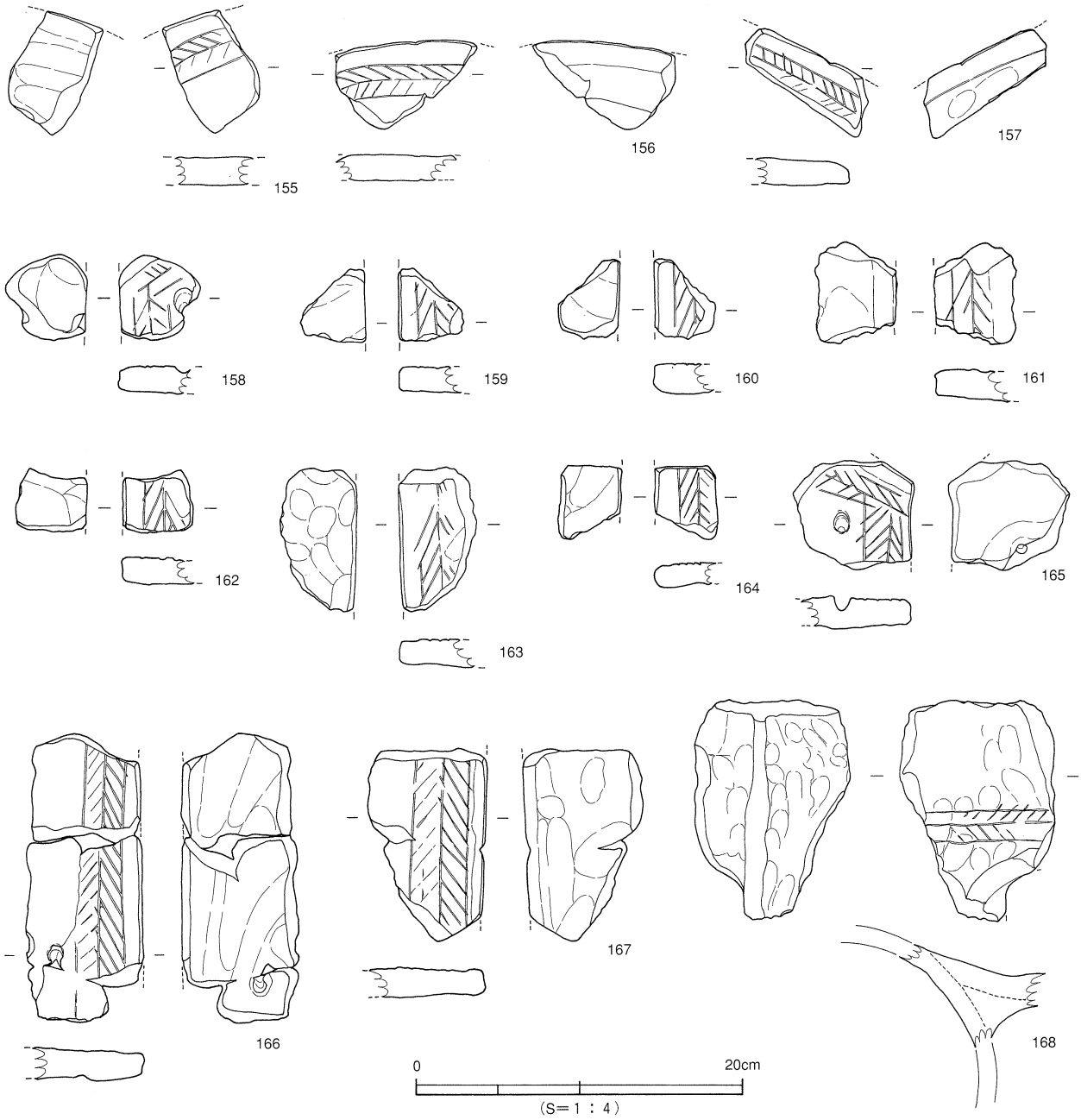
第36図　盾形埴輪推定復元図２



第37図　盾形埴輪推定復元図３



第38図　形象埴輪実測図(1)



第39図　形象埴輪実測図(2)

第39図掲載の盾形埴輪は盾面側縁に綾杉文をめぐらし、その内側に数箇所の穿孔を施すタイプのものである。頂部形態が緩やかな山状を呈する長方形の盾面として復元可能であるが、周縁部破片のみの出土であるため内部文様構成は不明である。(第36図)

第40図盾形埴輪は、出土資料が少なくその復元にやや無理があると思われるが、盾面側縁に梯子文および綾杉文を施し、その内部に全く線刻を施さないタイプのものである。頂部形態は不明で、盾面周縁部文様帯の内側に数箇所の穿孔を施すと考えられる。(第37図)

第41図176～183は蓋形埴輪である。

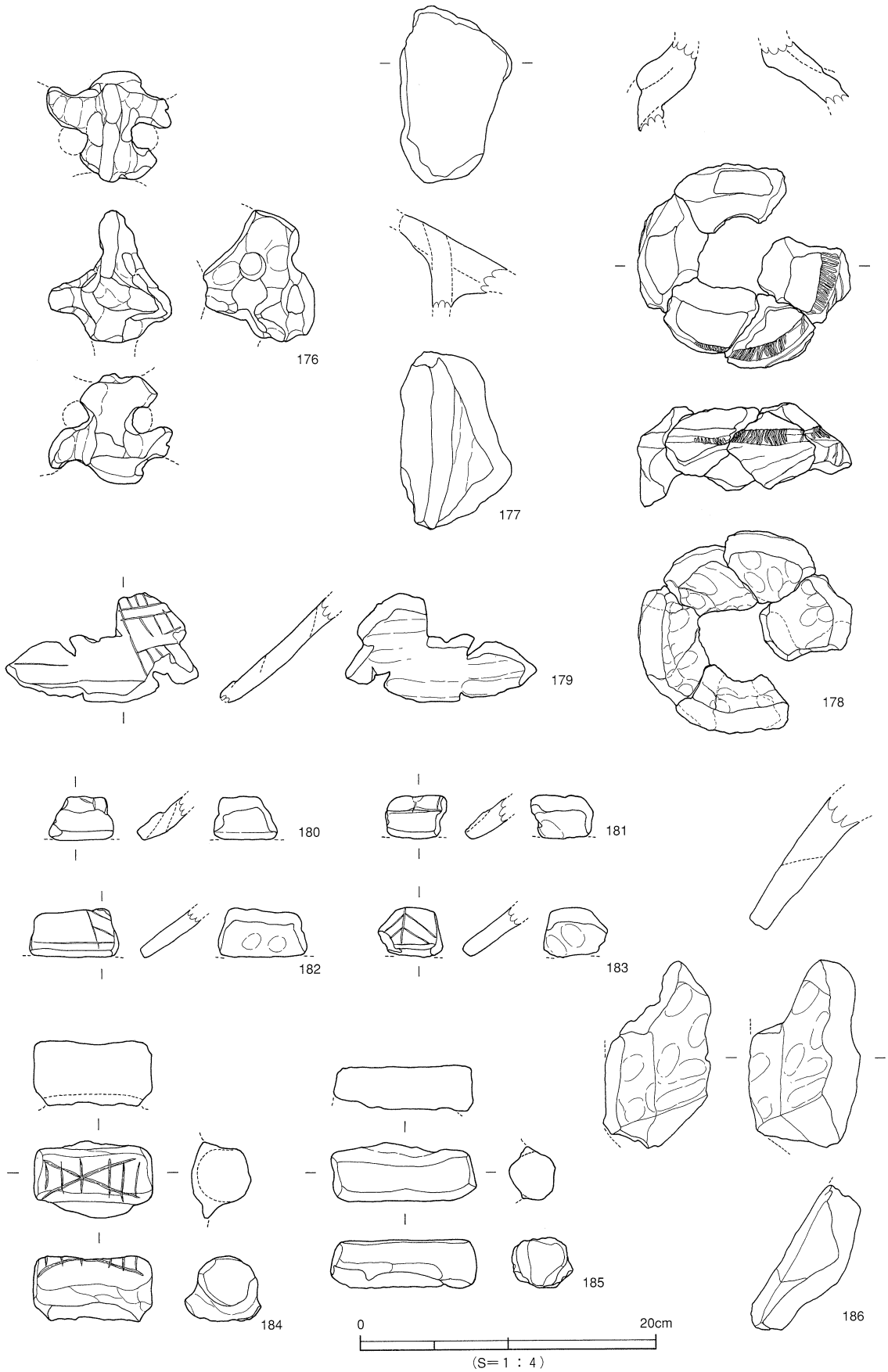
176は立ち飾り部(飾り板)で、四方に広がる飾り板の先端をほとんど欠損するが、4つの飾り板すべてに円孔を有する。177～183は笠部の破片である。178は軸受部と笠縁を欠損し、笠縁との接合部分に刻み目を施した痕跡が認められ、さらに、小さな粘土板を環状につなげて成形したことが窺える。179～183

第40図　形象埴輪実測図(3)

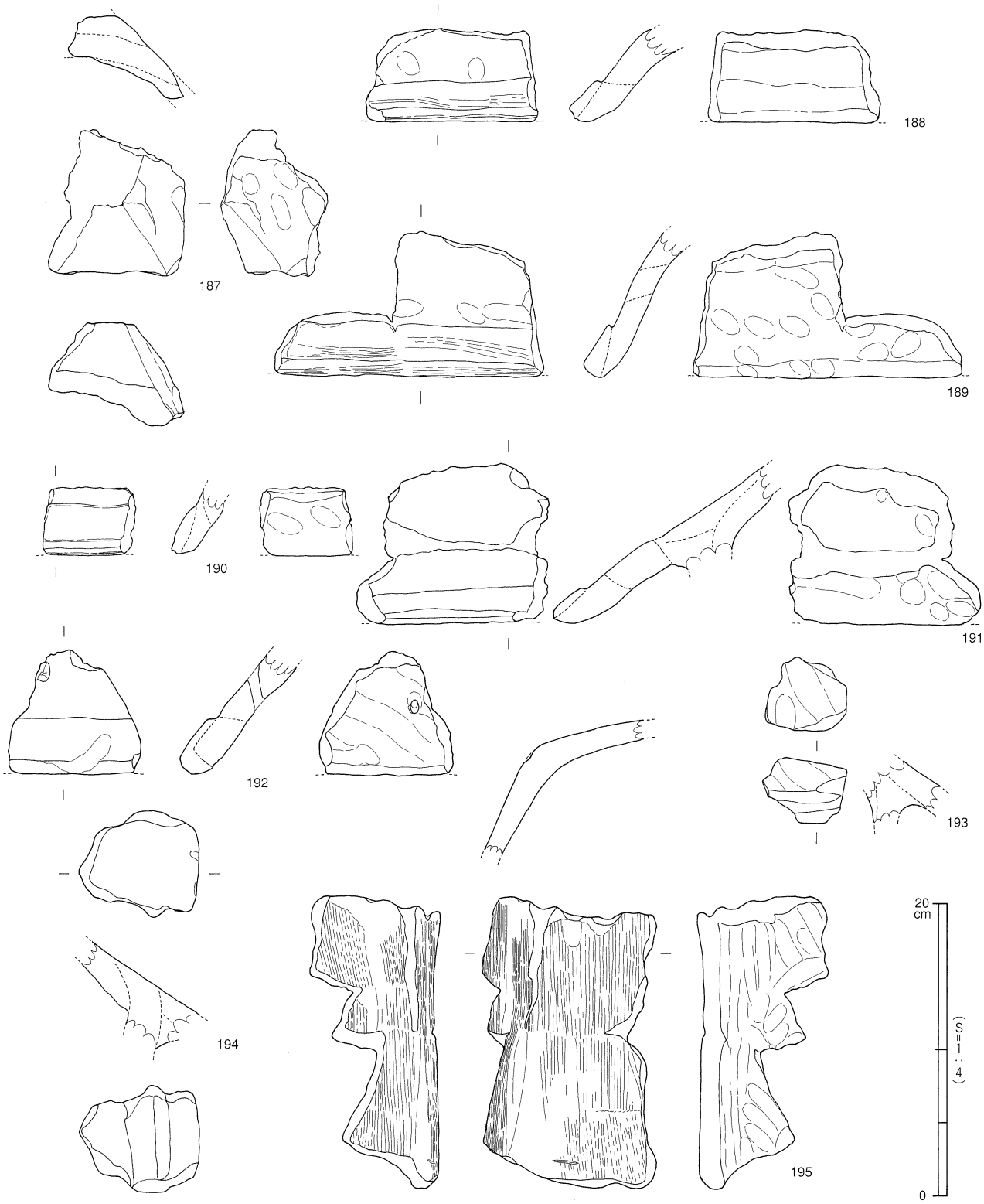
は笠縁先端部の破片で、端部に突帯を貼り付けるもの（179～181）と突帯のかわりに沈線を施文するタイプ（182・183）に分けることができる。

第41図184～第43図196は家形埴輪である。

第41図184・185は堅魚木、第41図186～第42図194は屋根部破片、第42図195・第43図196は壁体部で

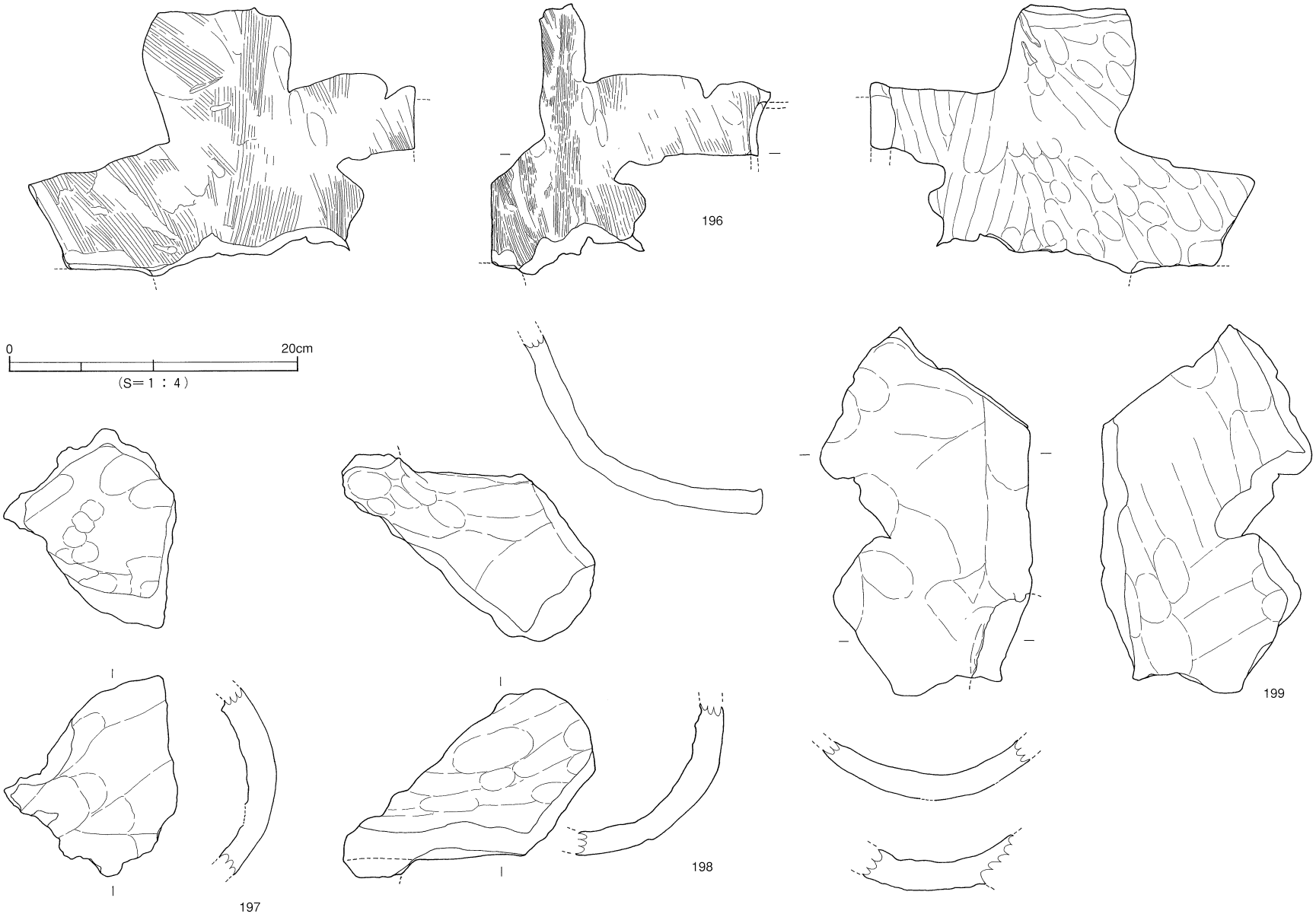


第41図　形象埴輪実測図(4)

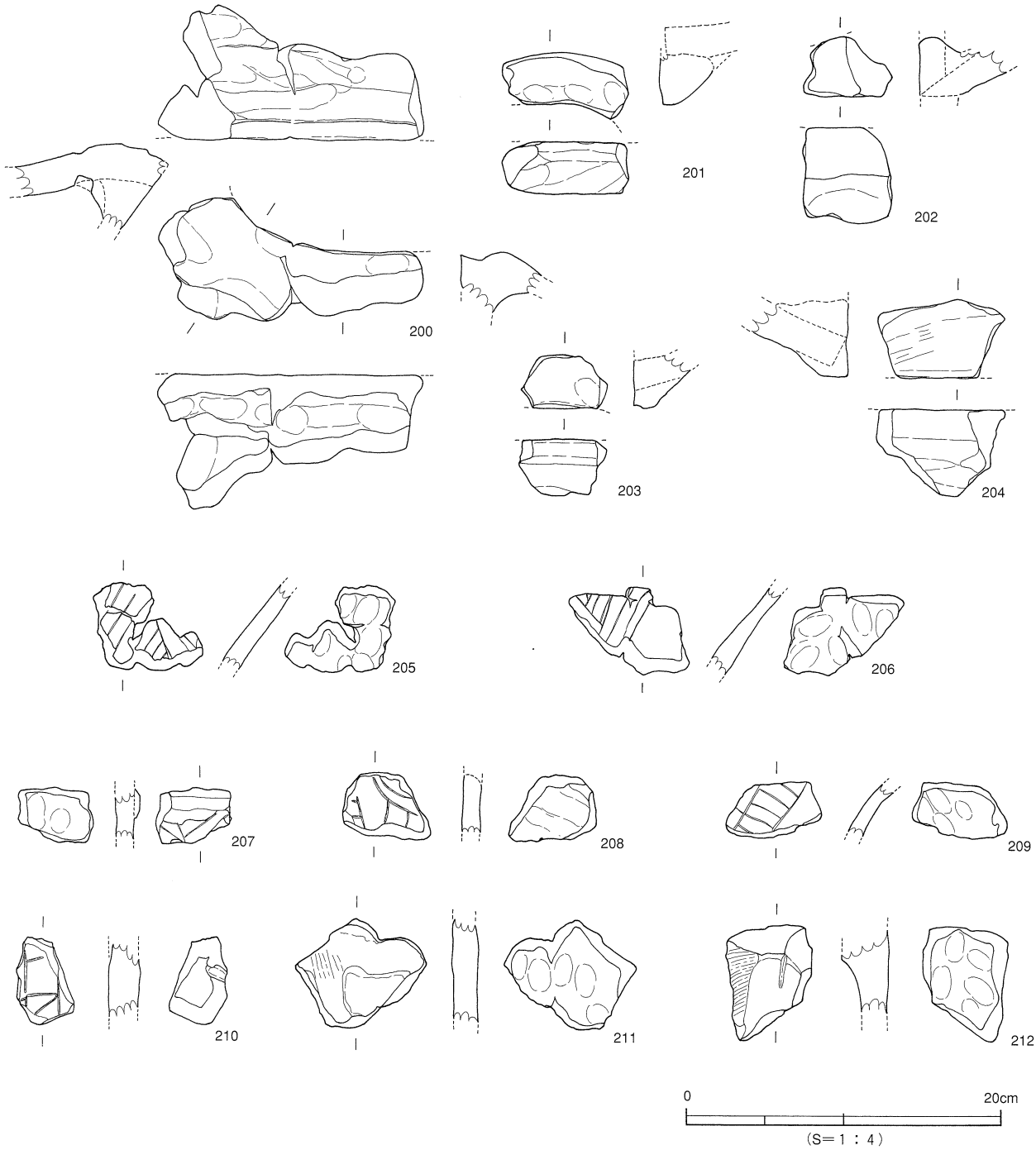


第42図　形象埴輪実測図(5)

ある。入母屋造形式に特有な上屋根部の資料が出土していないことより、基本的に寄棟造形式の家形埴輪であると考えられる。また、屋根部軒先に関しては、その調整方法および焼成などより判断して少なくとも３つのタイプが出土しており、(注1)元来３個体以上の家形埴輪を配していた可能性が高い。壁体部は隅円状を呈し、大壁形で壁面には突帯や刻線などの表現は見られない。また、196は隣り合う壁体に高さの異なる（方形あるいは長方形の）スカシを有する。



第43図　形象埴輪実測図(6)



第44図　形象埴輪実測図(7)

第43図197～199は動物埴輪である。焼成、胎土および色調より同一個体の可能性が強いが、そのモチーフは不明である。

第44図200～212は、器種不明の形象埴輪である。200～204は口縁部が隅円方形状にめぐるもので、上部から別作りの個体を填め込む‘組合せ式’の構造を採る可能性がある。

（注１）　大きく分けて以下の３タイプが確認できた。軒先端部上面に突帯を貼り付けて外面にハケ目調整痕を残すもの。軒先端部上面に突帯を貼り付けて外面にナデ調整痕を残すもの。軒先端部を包み込むように突帯を貼り付けてナデ調整を施すもの。

(3) 須恵器・土師器

出土した須恵器・土師器には、蓋坏、高坏、瓿、子持壺、台付壺、短頸壺、器台、大甕などがあり、総じて6世紀前半から6世紀末にかけての土器が混在して出土した。

第45図213～228は須恵器蓋坏である。213～220は坏蓋で、肩部および口縁端部内面に明瞭な段を有するもの、形骸化した凹線状の段を有するもの、段を持たないものなど様々である。221～228は坏身で、立上がり端部内面に段を有するもの、あるいは段をもたないものがあり、口径にややばらつきがみられる。

第45図229～235は須恵器高坏、236は土師器高坏である。須恵器高坏には、坏部外面に波状文を施すタイプと無文のものがあり、脚部に2段スカシを有するものもみられる。236は直線的に広がった筒状の脚部先端をわずかに折り曲げたような独特の形状をした高坏である。回転台成形するもので、坏部外面下半に回転ヘラ削りを施した痕跡を確認することができる。形象埴輪が集中して出土している前方部西側テラス部で出土しており、通常の土師器とは異なる性格が想定され、特別な供献土器の可能性も考えられる。

第45図237～241は須恵器瓿であり、大型の胴部を有し、広い頸部より短めの口縁部が立ち上がるタイプと、胴部が小さく窄まった頸部より長大な口縁部が立ち上がるタイプがある。

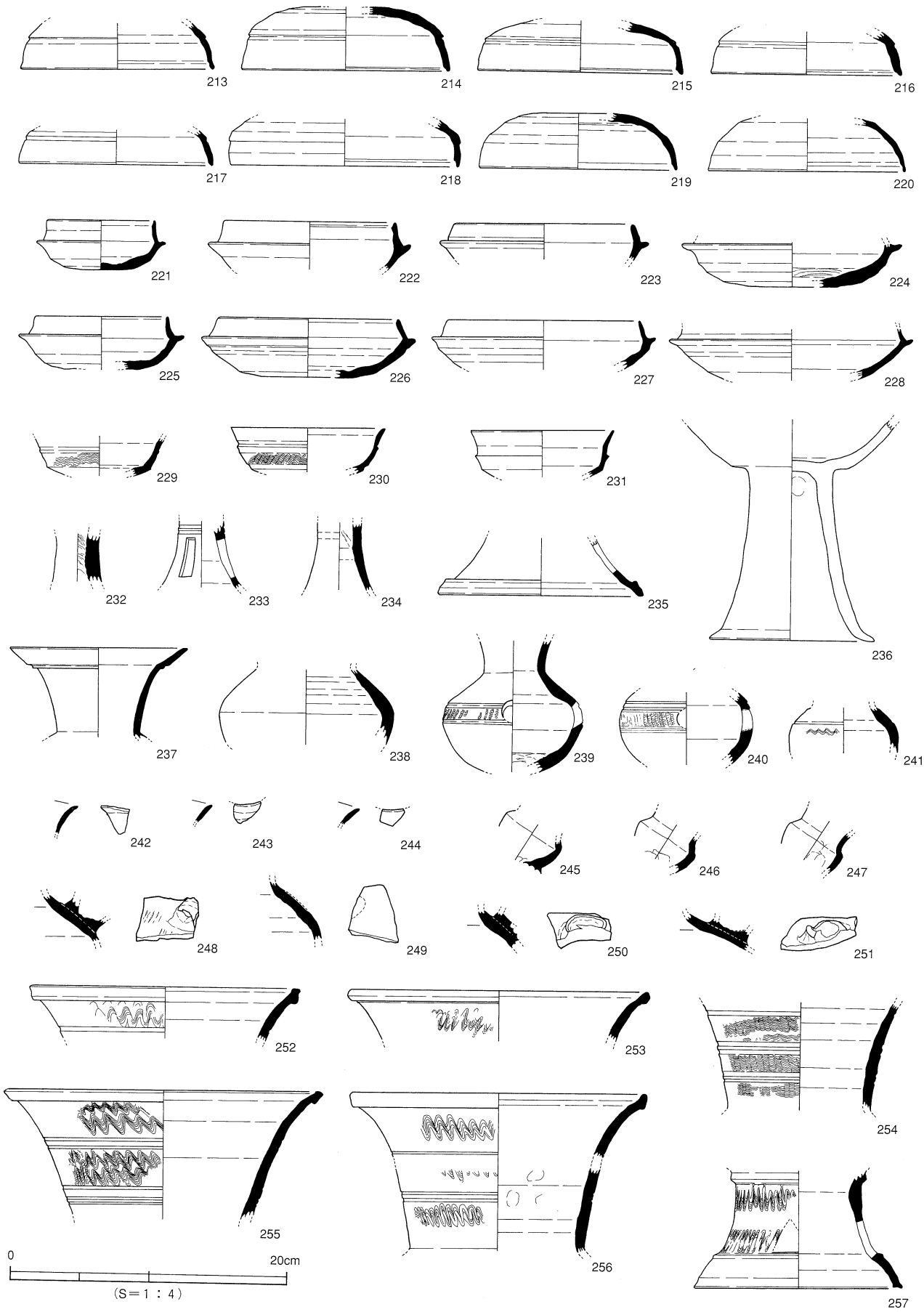
第45図242～251は須恵器子持壺である。242～247は子壺、248～251は親壺（本体）と子壺との接合部である。252～256のような口縁部を持ち、257のような脚台部を備えた台付壺の肩部に配されていたと考えられるが、いずれも小片のため詳細は不明である。

第45図252～第46図270は、須恵器壺形土器およびその蓋である。第45図252～257は台付壺、第46図259・263および260・264は無頸壺およびその蓋で、それぞれセットになると考えられる。270は口縁端部内面に直立した段を有する短頸壺である。その最大径を口縁部から撫肩状に下がる肩部に有し、底部は大きな平底を呈する。形状が百済系陶質土器の‘瓶’といわれる器種に類似するが、焼成および胎土に関する限りでは他の須恵器と特に変わらない。また、これと同系のものが松山市恵原町に所在する松ヶ谷古墳（1号墳）より出土している。

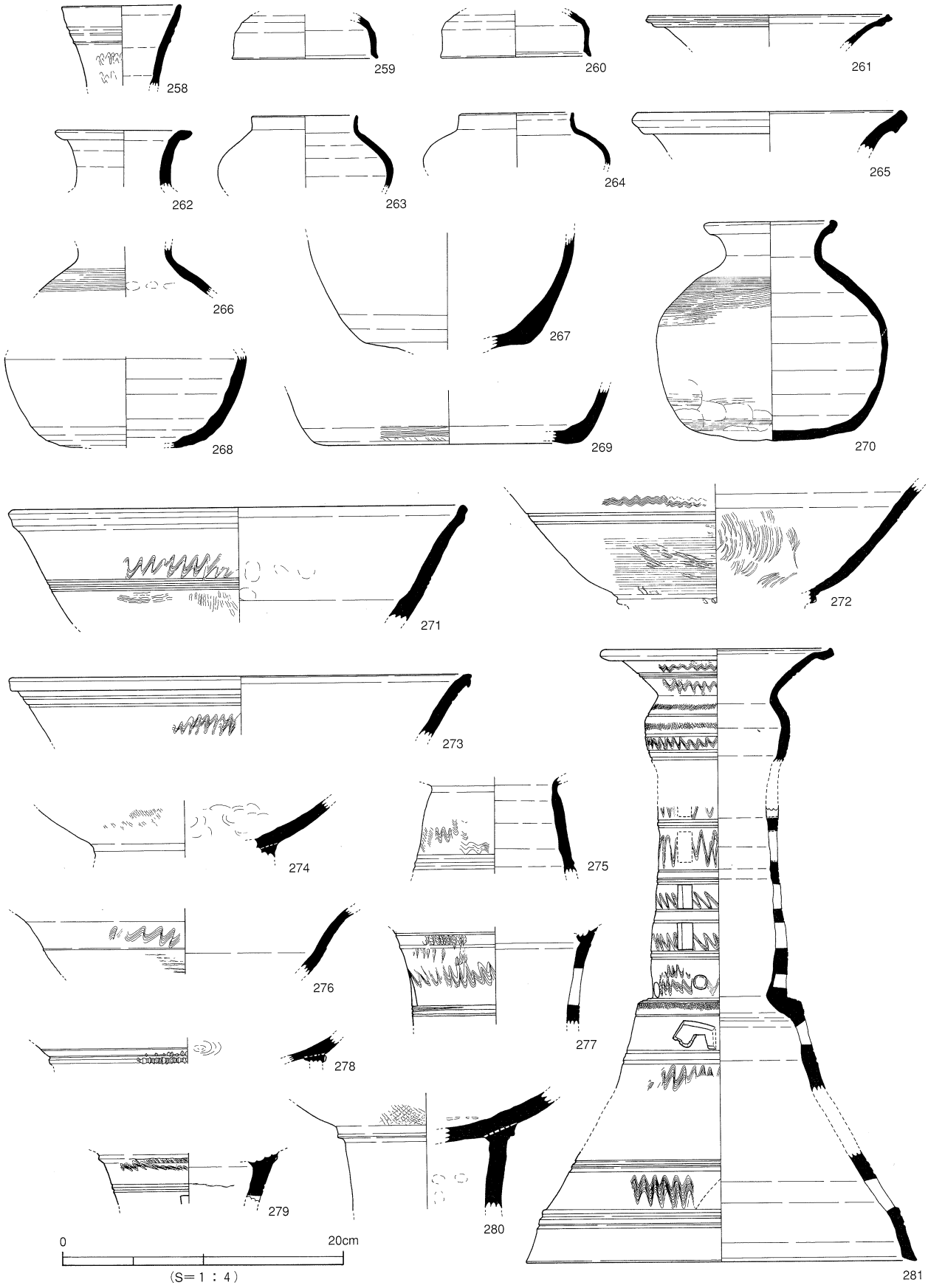
第46図271～第48図321は須恵器器台である。高坏形器台と筒形器台が出土しており、第46図271～274および276・278・280は高坏形器台、279および281は筒形器台である。高坏形器台の坏部上半部外面には凹線および波状文を施し、下半部内外面にタタキ調整の痕跡が顕著に残る。また、口縁端部の形状には直線的にのびるタイプと、緩やかに外反しながら広がるものが認められる。

第46図281は筒形器台で、図上復元資料である。壺部と筒部の接合部および脚部中央部に相当する資料を欠損するが、接合部の破片として別個体ながら279が出土しており、筒部の上に壺形土器の底部を載せて貼り付けるものと考えられる。壺部口縁が大きく外に広がり、端部に強いナデを施すもので、口縁端部がつまみ上げられたような形状を呈する。外面文様としては、壺部に波状文、凹線文、刺突文を施し、筒部および脚部に凹線文および波状文を施す。また、筒部最下段の円孔はいずれも貫通しておらず、特に脚部最上段に勾玉形のスカシを有する。

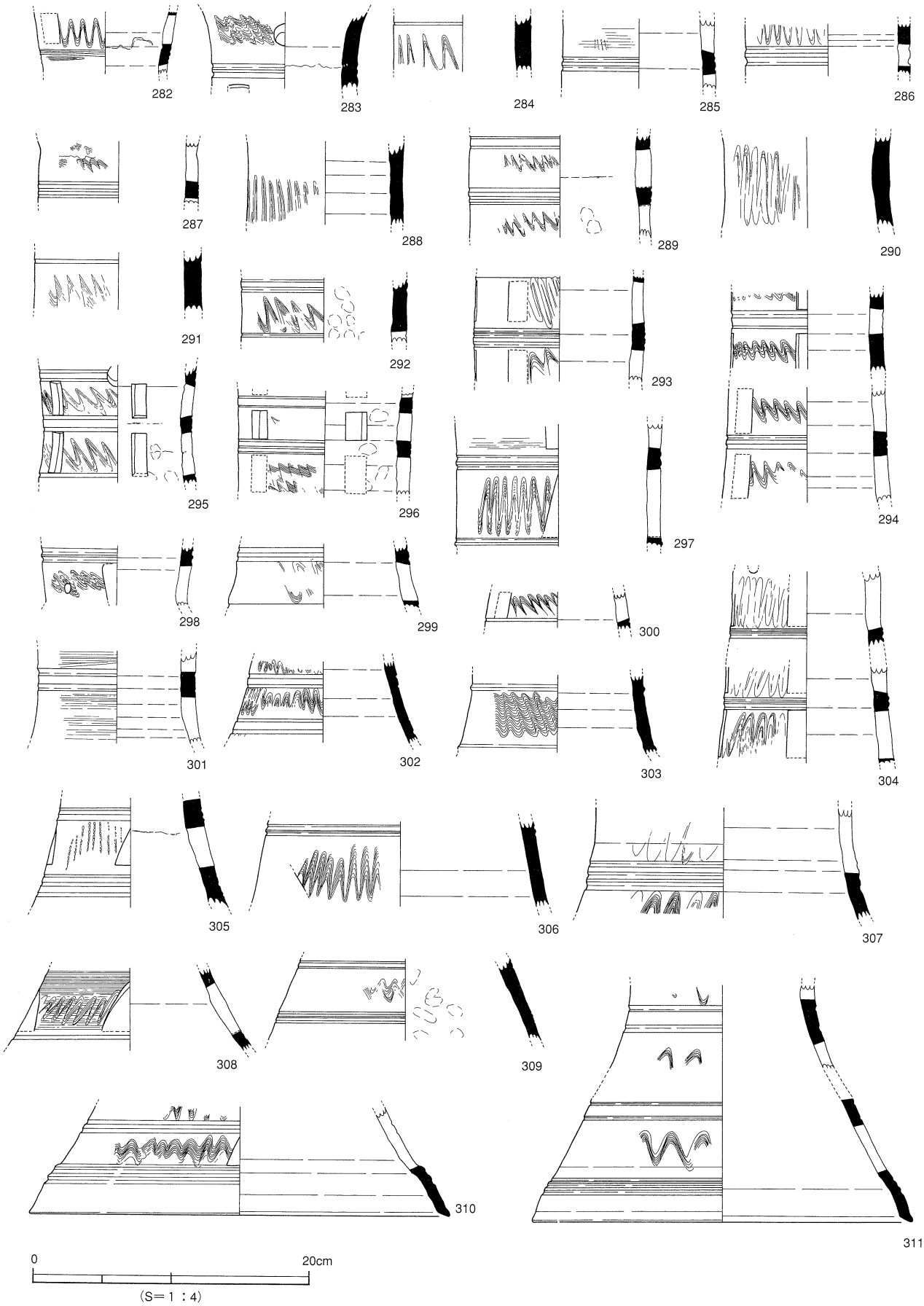
スカシの形状が部位ごとにある程度決まっていると考えられ、筒部中央部に長方形、筒部両端部に円形、脚部に三角形のスカシを穿孔する。また脚部先端の形状には、端部が幅広でしっかり地につくタイプと、爪先立ち状になるタイプがある。



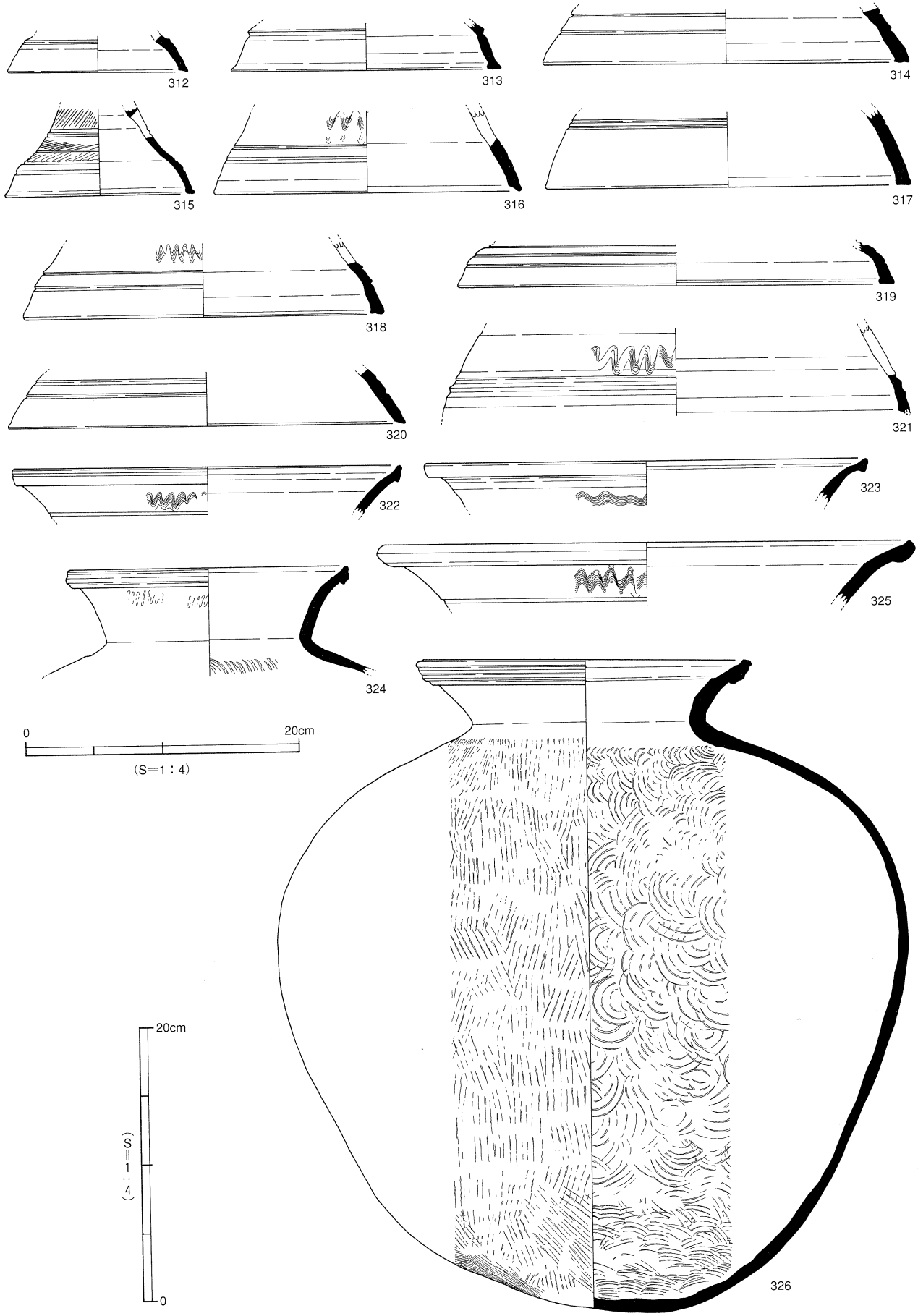
第45図　須恵器実測図(1)・土師器実測図



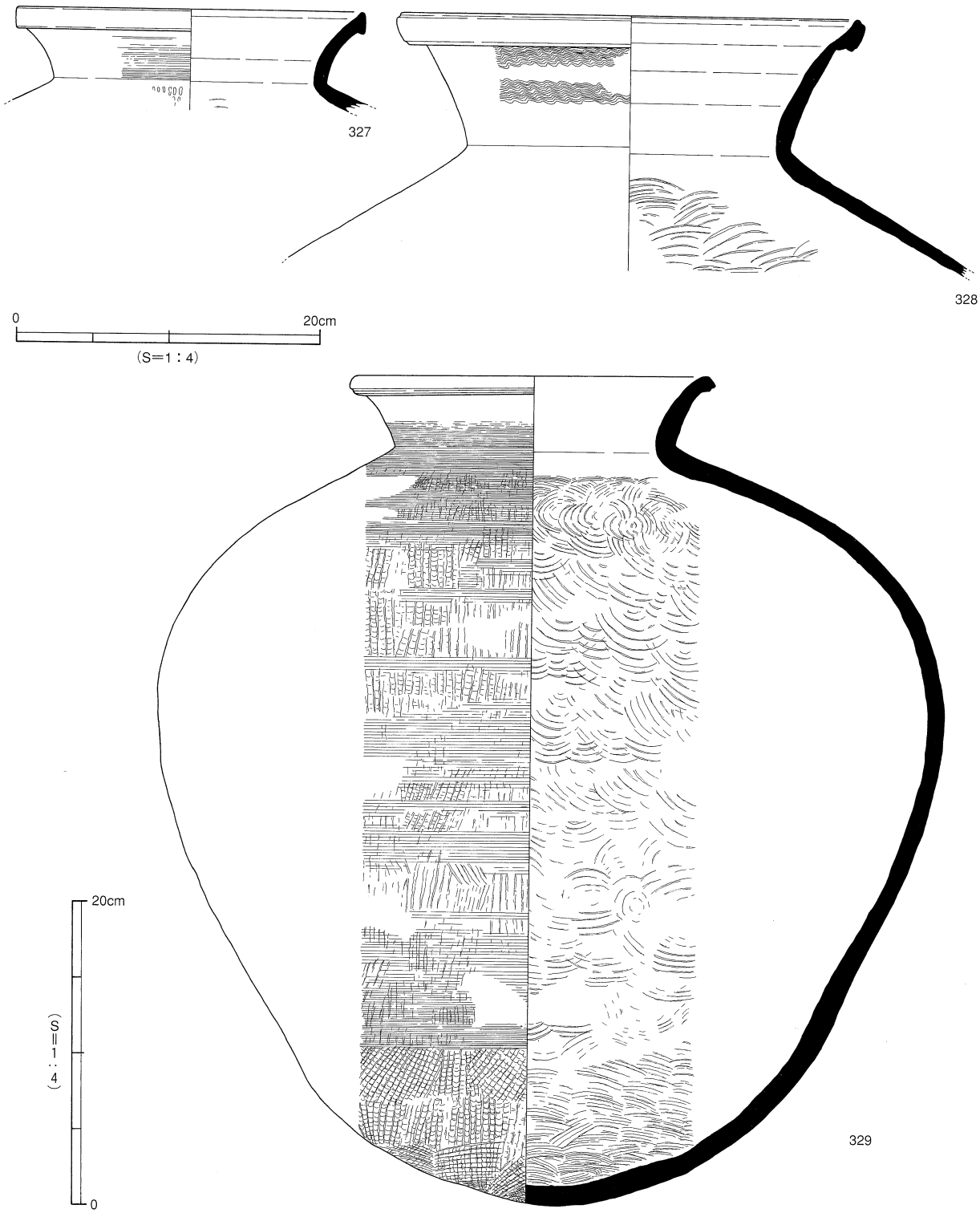
第46図　須恵器実測図(2)



第47図　須恵器実測図(3)



第48図　須恵器実測図(4)



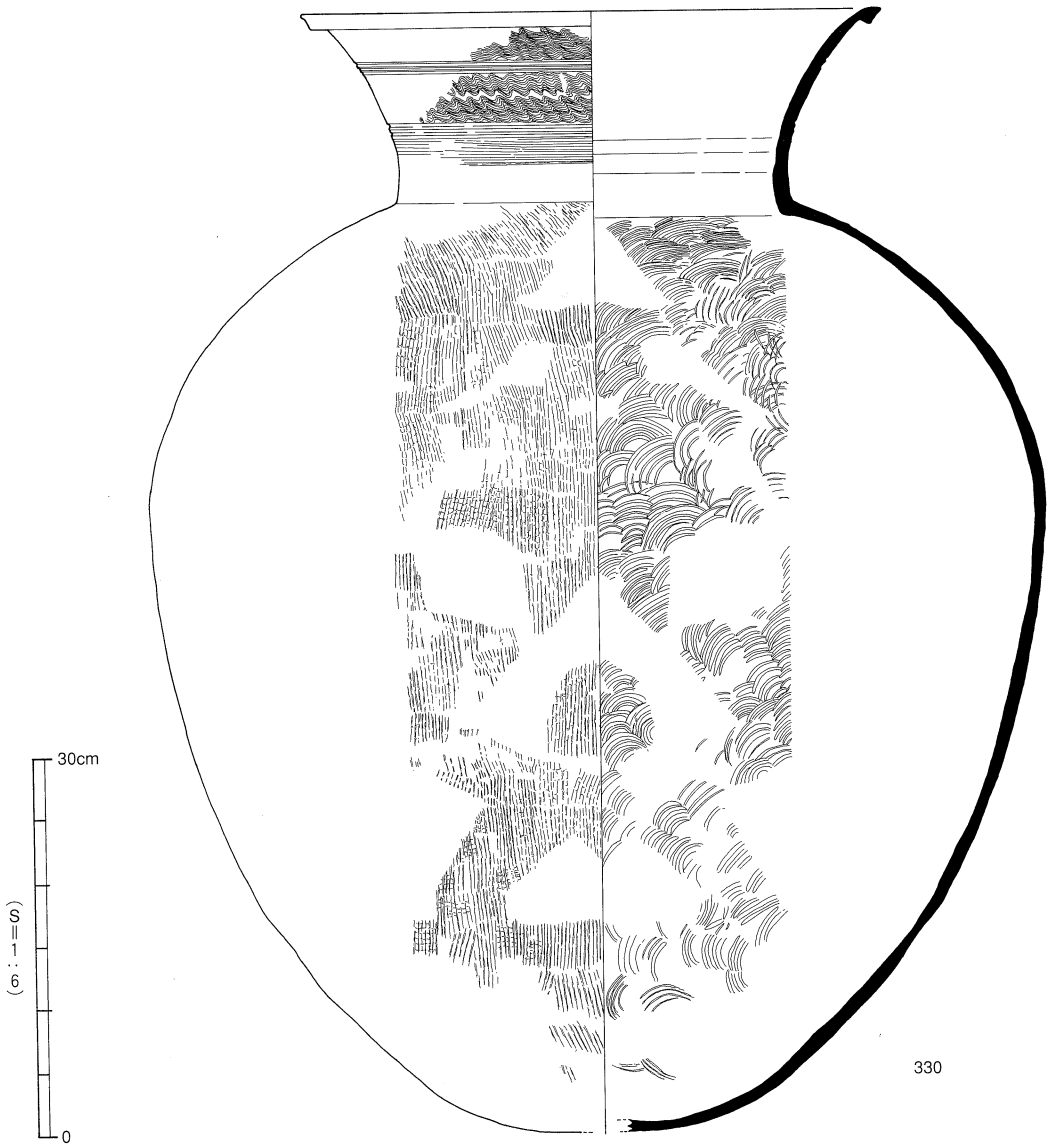
第49図　須恵器実測図(5)

第48図322～第50図330は須恵器甕形土器である。口縁部が緩やかに立ち上がるもの、直立気味に立ち上がるもの、口縁端部がつまみ上げ状を呈するもの、外反して広がるもの、口縁部外面に波状文を施すもの、カキメ調整を施すものなど様々である。

第48図326・第49図329は、東側くびれ部円筒埴輪樹立テラスの上方において、基底部をほぼ原位置

に保った状態で出土した甕形土器である。（２項参照）

第50図330は、西側くびれ部より出土した甕形土器である。高さ88.2cm、口径45.7cmを測り、丸底で卵倒形の胴部を有する。口縁部が直立的に立ち上がり、口縁部外面には丁寧な波状文および凹線文が施される。東くびれ部出土甕形土器に比べてひと回り大きな大型の甕形土器で、最大径を胴部上位に有し丸底の底部を備えている点では共通した特長を備えている。



第50図　須恵器実測図(6)

第Ⅵ章　石室の構造と出土遺物

1．中心主体（1号石室）

播磨塚天神山古墳のメインとなる埋葬施設は、前方後円墳の後円部中央より南側に開口する横穴式石室である。玄室奥壁の右（東）隅角部が後円部のほぼ中心に位置し、石室主軸を墳丘主軸より若干東側にふれた方向（N―0°30′―W）に配する。

1号石室は、盗掘および石材採取によって大きく破壊されており、比較的残りの良い玄室奥壁側ですら基底石から5段分程度しか遺存しない。また、床面への攪乱も著しく、出土した遺物の大半は原位置を離れていると考えられる。

(1) 石室の構造

1号石室は検出長6.84m、玄室長4.02m、奥壁幅2.0mを測る無袖式の横穴式石室である。奥壁に最大幅を有し、若干の孤を描きながら入口部へ向けて幅狭になる。玄室中央部幅1.95m、玄門部幅約1.6m、入口部での幅は0.7～1.2m程度になると考えられる。

玄室の平面形態は、長方形に近い羽子板形を呈し、玄門部から入口部に向かって急激に幅を減じる。また、玄門部床面には横長の石材を抜取った痕跡が確認でき、この位置に梱石を設置した可能性が強い。梱石の南側両サイドには、何らかの礎石として使用されてその重みで著しく破損した石材がほぼ原位置を保って遺存するが、壁体には組み込まれない。つまり、石室のプランとしては無袖式で、壁体から遊離した立柱を立てることによって両袖式様にしていたものと考えられる。

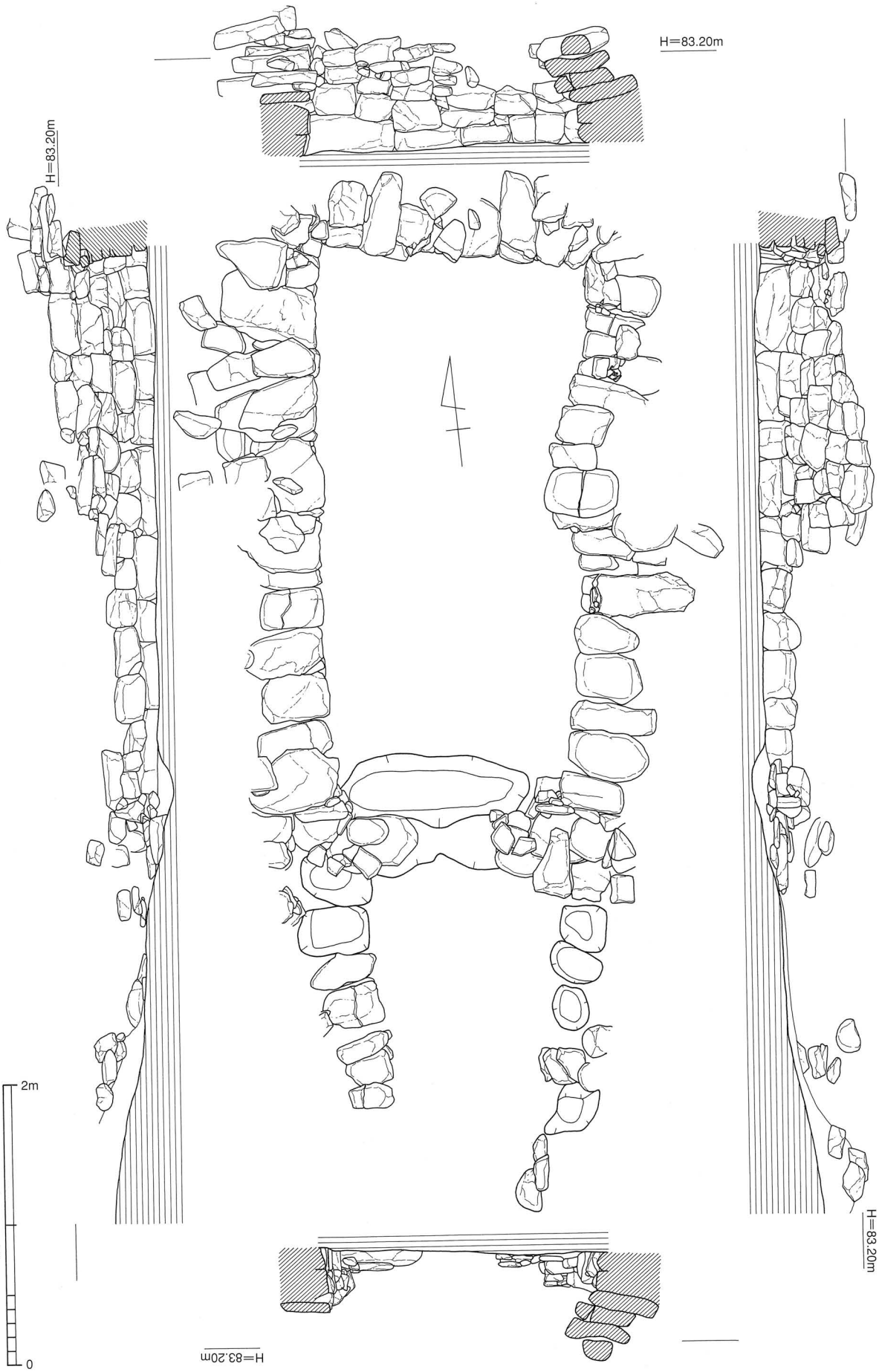
羨道から玄室にかけての構造は、入口より緩やかなスロープ状の羨道を降って玄室に進入するようになっている。さらに、羨道部（玄門部に接する一辺約1mほどの方形範囲）には、追葬時に玉砂利を敷き詰めて埋葬面として利用した痕跡が認められ、このことよりすくなくとも本地点までは天井部が架けられていたことは確実で、閉塞施設はこれより南側に設けられていた可能性が強い。

古墳の築造にあたり最初に周囲の地山を削り出すと考えられるが、その段階より石室の構築作業を開始したと考えられ、そのことは墳丘築造時に削り出した地山面と石室入口が同一面で、さらに墓壙もこの地山面より直接掘り込まれることより理解できる。また、墓壙は石室よりひと回り大きな長方形状を呈すると考えられ、特に側壁部分だけを2段掘りすることから判断すると、側壁上部を持ち送ることを意識した特別な工法なのかも知れない。

玄室床面は二重構造で、墓壙床面の地山面直上に人頭大の扁平な自然石を敷き詰め、さらにその上面に3～15cmほどの厚さで小礫（玉砂利）を敷き詰める。つまり、初葬時に下位の敷石面を埋葬面として使用し、追葬時に埋葬面を小礫面に改修したと考えることが可能である。また特に、玉砂利を敷き詰める直前に初葬時埋葬面として使用していた敷石の大半を不規則的に抜取る行為がおこなわれるが、それがいかなる理由で行われたのかに関しては不明な部分が多い。また、さきに述べたとおり追葬時には羨道部の一部にまで玉砂利を敷き詰めて埋葬面として利用したことが確認されており、最終的に羨道の一部を複室的な用途として利用したと考えることが可能である。

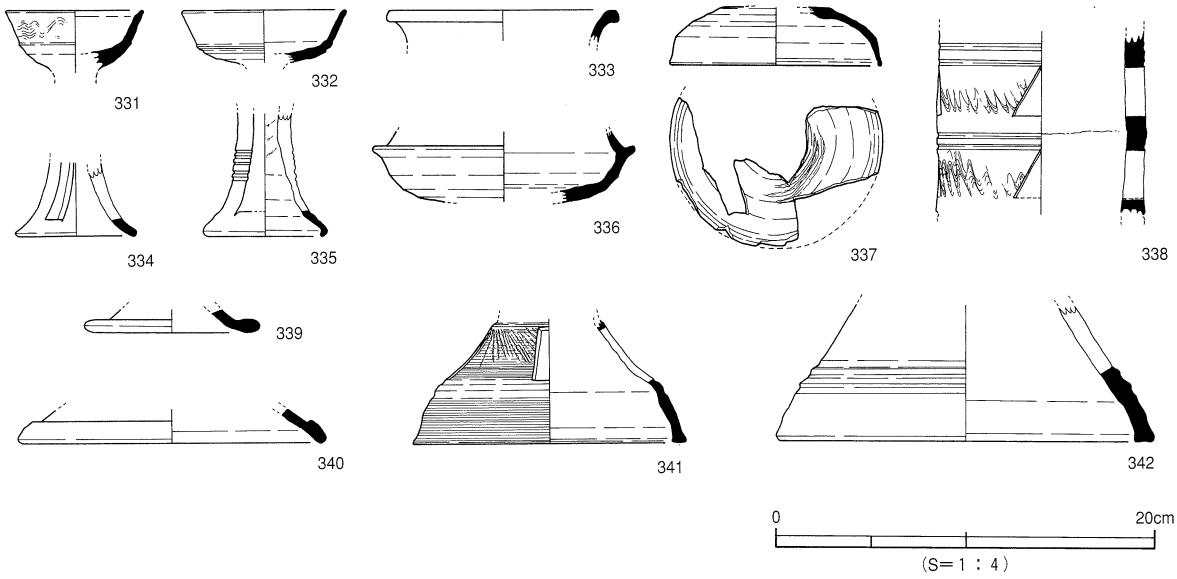
(2) 遺物出土状況

1号石室は盗掘および石材採取の際に壊滅的なダメージを受け、目に付く遺物のほとんどが持ち去られている。したがって、今回出土した遺物のほとんどは小破片あるいは小型品に限られる。また、



第51図　1号石室測量図(1)

第52図　1号石室測量図(2)



第53図　1号石室出土遺物実測図(1)

古代以降の人為的な攪乱（盗掘行為）を受ける以前の段階、追葬時に初葬時の埋葬面を改修して全く新しい埋葬面に造り直すという性格上、初葬時に供えられた副葬品および追葬時の副葬品が玉砂利の隙間あるいは内部に混在する状態で出土した。しかしながら、そのような経緯を辿ってきたにも関わらず、一部の遺物は原位置（追葬時）からあまり動いていないと推され、またその出土傾向より本来置かれていた位置をある程度想定することが可能な遺物が若干存在する。

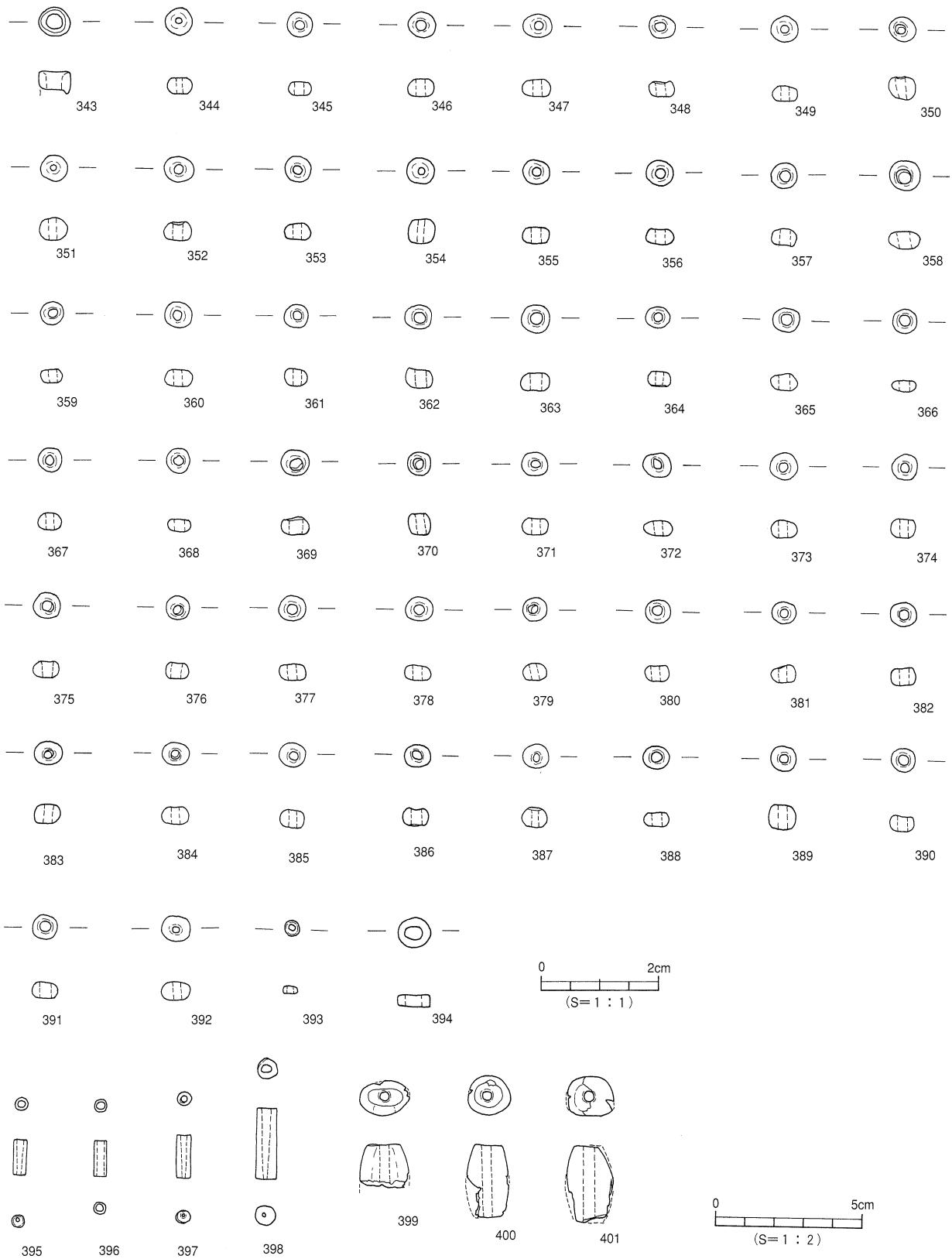
本来置かれていた位置からほとんど動いていないと考えられる遺物には、銀製空玉、耳環がある。銀製空玉は出土総数35点を測り、本来30点以上の個体が存在したと考えられる。(第55図402～432) ほとんどが石室中央部南東側の一定範囲(一辺約40cmの方形範囲)内に集中して出土しており、また、その近辺玉砂利上に朱の散布が認められた。出土した耳環には一連のものと二連のものがあるが、そのうち二連のものが銀製空玉の集中出土範囲および床面の朱散布範囲より出土した。(第58図559・560) 耳環は対で出土し、その間隔は約15cmを測る。さらにその中間部分には朱の散布が認められており、この位置に被葬者の頭部が置かれていた可能性が強い。

出土傾向より本来置かれていた範囲をある程度推定することが可能な遺物には、玉類、鉄鏃および馬具がある。比較的小さな玉類および破片として散在する鉄鏃は、そのほとんどが土ふるい作業によって検出されたものである。これらはその多くが玄室中央より奥壁側において出土しており、本来奥壁寄りの位置に副葬されていた可能性がある。それに反して出土馬具の大半は玄室中央より南側の範囲、袖部付近からの出土傾向が高く、したがって馬具は玄室内袖部に副葬されていた可能性が高いと考えられる。

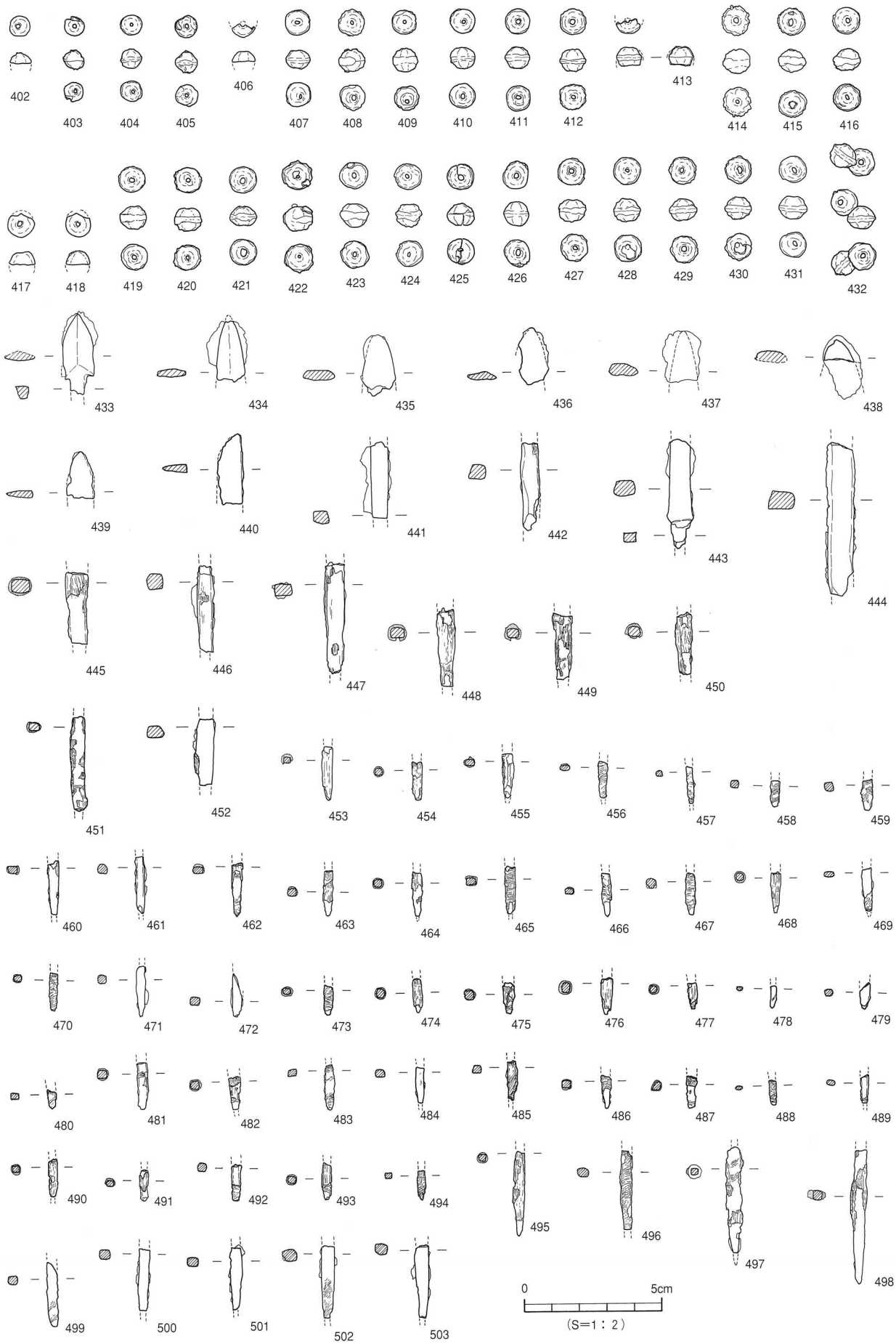
(3) 出土遺物

出土した遺物には、須恵器、玉類、鉄鏃、馬具、耳環、刀子飾り金具、不明金属製品などがある。

第53図331～342は須恵器である。331・332・334・335・339・340は高坏で331および332は坏部、他は脚部である。また331と334、332と335はそれぞれセットになると考えられ、やや長くのびる脚部に1段のスカシを有するタイプである。331および334は坏部外面に波状文を施し、脚部スカシは3方向



第54図　1号石室出土遺物実測図(2)



第55図　1号石室出土遺物実測図(3)

に穿孔される。また内外面に朱の付着が認められることより、本来は朱を盛る器であった可能性が高い。332は坏部の外面下半に２条の凹線を施すタイプで波状文は確認できない。335は外面に５条の凹線を施し、その後に３方向のスカシを穿つもので脚部先端が鉤状に折れ曲がる。

第53図333は広口壺の口縁部小破片で、自然釉の付着が著しい。

第53図336・337は蓋坏である。それぞれ天井部および底部の約３分の２の範囲に回転ヘラ削りを施すものである。337は口縁部と天井部の境界に明瞭な段をもたないタイプであるが、口縁部の内外面に強い横ナデを施すことによってその境界は明瞭である。また、口縁端部内面に緩やかな凹線状の段を施し、結果として口縁端部の形状が非常にシャープになっている。

第53図338・341・342は器台筒部および脚部である。338は凹線で区画した内部に波状文を施し、三角形のスカシを穿孔する筒部破片資料である。341・342は脚部片で、脚部先端面が安定した形状を呈する。341は外面にカキメ調整を施した後に刺突文を配し、長方形と三角形のスカシを４方向から交互に穿孔する。342は三角形のスカシを配すると考えられるが、小片のため詳細不詳である。

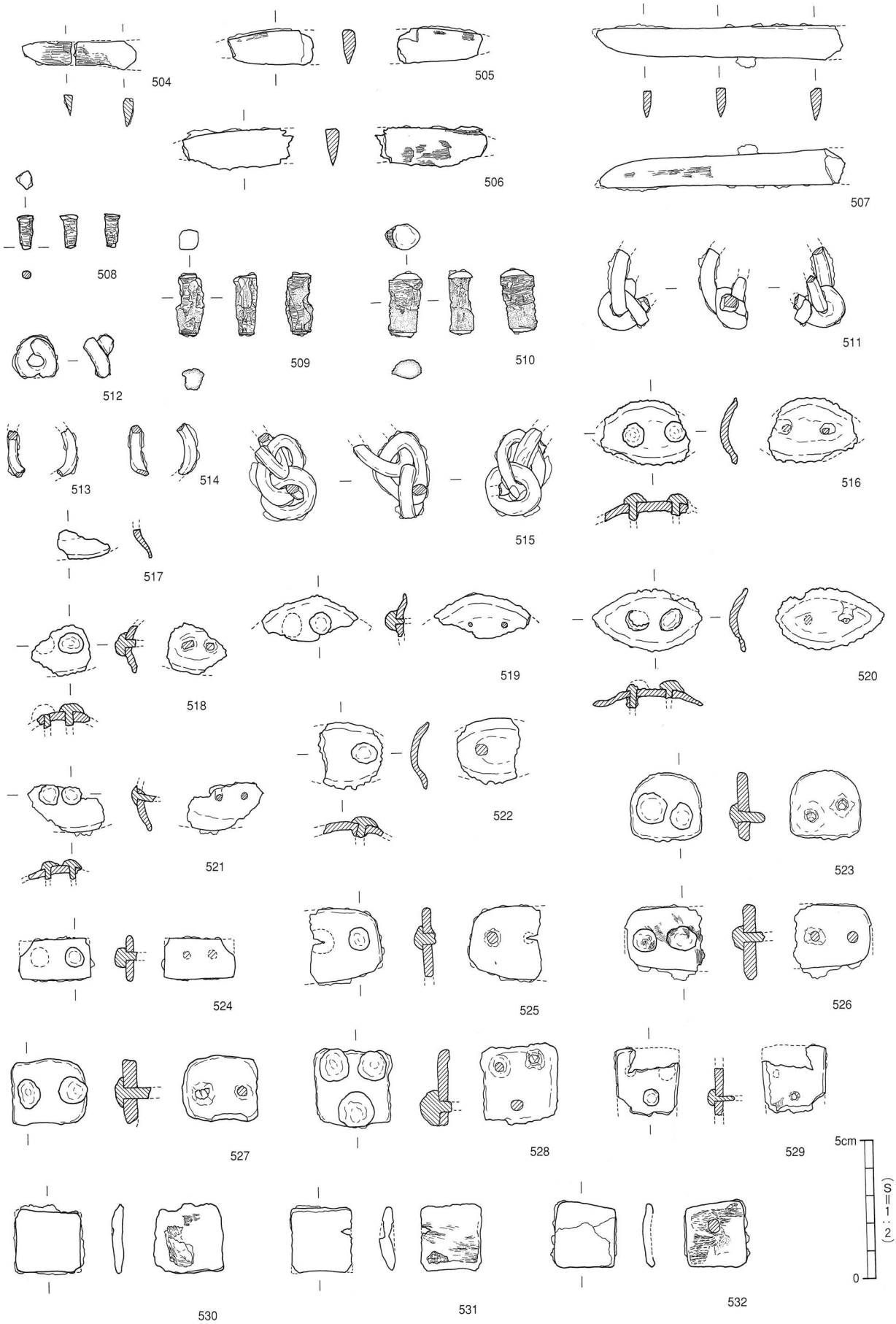
第54図343～第55図432は玉類である。343～394はガラス小玉でほとんど緑青色を呈するなか、最も小さな個体（393）だけは藍色を呈する。また、343および394はやや白色がかった緑青色を呈することよりアルカリ石灰ガラスであると考えられる。395～398は碧玉製の管玉である。395・397・398が片側穿孔なのに対して396は両側より穿孔する。399～401は琥珀製棗玉である。玄室中央より東奥壁側部分において近接した位置より出土した。第55図402～432は銀製空玉である。空玉は大きさを基準に２種類に分類することが可能で、すなわち直径７～８㎜を志向するもの（402～405）と直径10㎜を志向して作られたものとに分けられる。したがって空玉はある程度規格をもつ製品である可能性が高く、同一規格で作られた空玉を有する古墳が他に存在するのかも知れない。また空玉の製作方法として、あらかじめ中央部に内面から穿孔を施した半球形状の部位を準備し、その後に規格が同じ２つの部品を貼り合わせて球状にしていると考えられる。成分については次章を参考されたい。

第55図433～503は鉄鏃である。先に述べた通り鉄鏃は奥壁側に副葬されていた可能性が高く、小破片の資料に限られる。433～440は鏃身刃部で433～438は長三角形あるいは柳葉形、439および440は片刃形を呈する。441～444は頸部で断面が長方形状を呈する。443は特に頸部より茎部にかけての資料で、直線状にのびる茎部から関部がやや台形状に広がるものである。445～503は茎部の資料で、いずれの個体も断面（長）方形を呈する。また断面観察の結果、茎部を取り巻く木質が二重構造になることが確認され、したがって先ず鉄鏃茎部の本体に薄い木皮を巻きつけ、その後矢柄に装着したことが窺える。

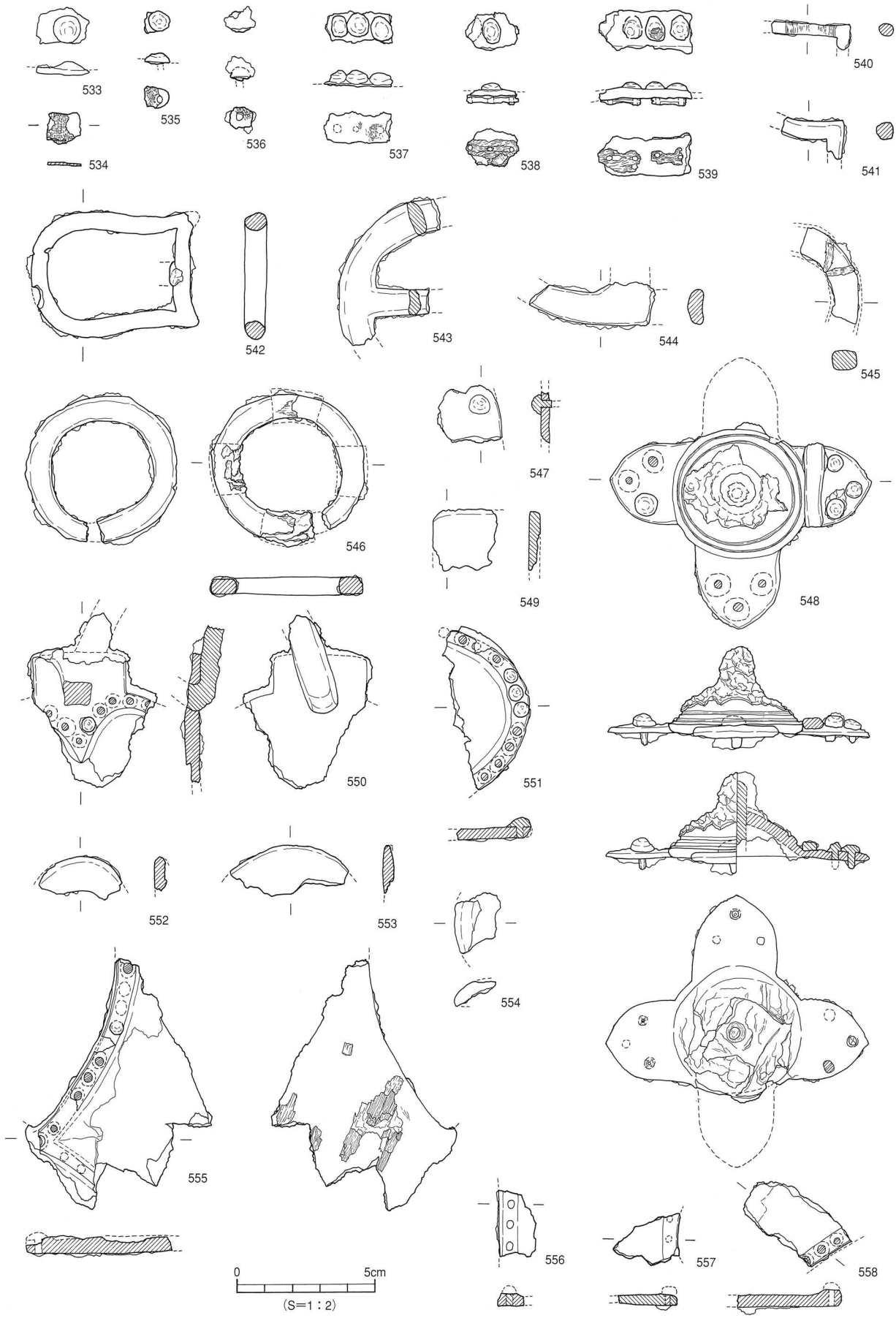
第56図504～507は鉄製の刀子である。４個体ともに刃部に対して平行するように木目の残存が認められる。特に507は刀子飾り金具（第58図568・573）に非常に近い地点より出土したもので、それらの本体になる可能性がある。

第56図508～510は俵鋲である。それぞれ板状の木製品を繋ぎ止めたと考えられ、直交する方向に木目が残存する。

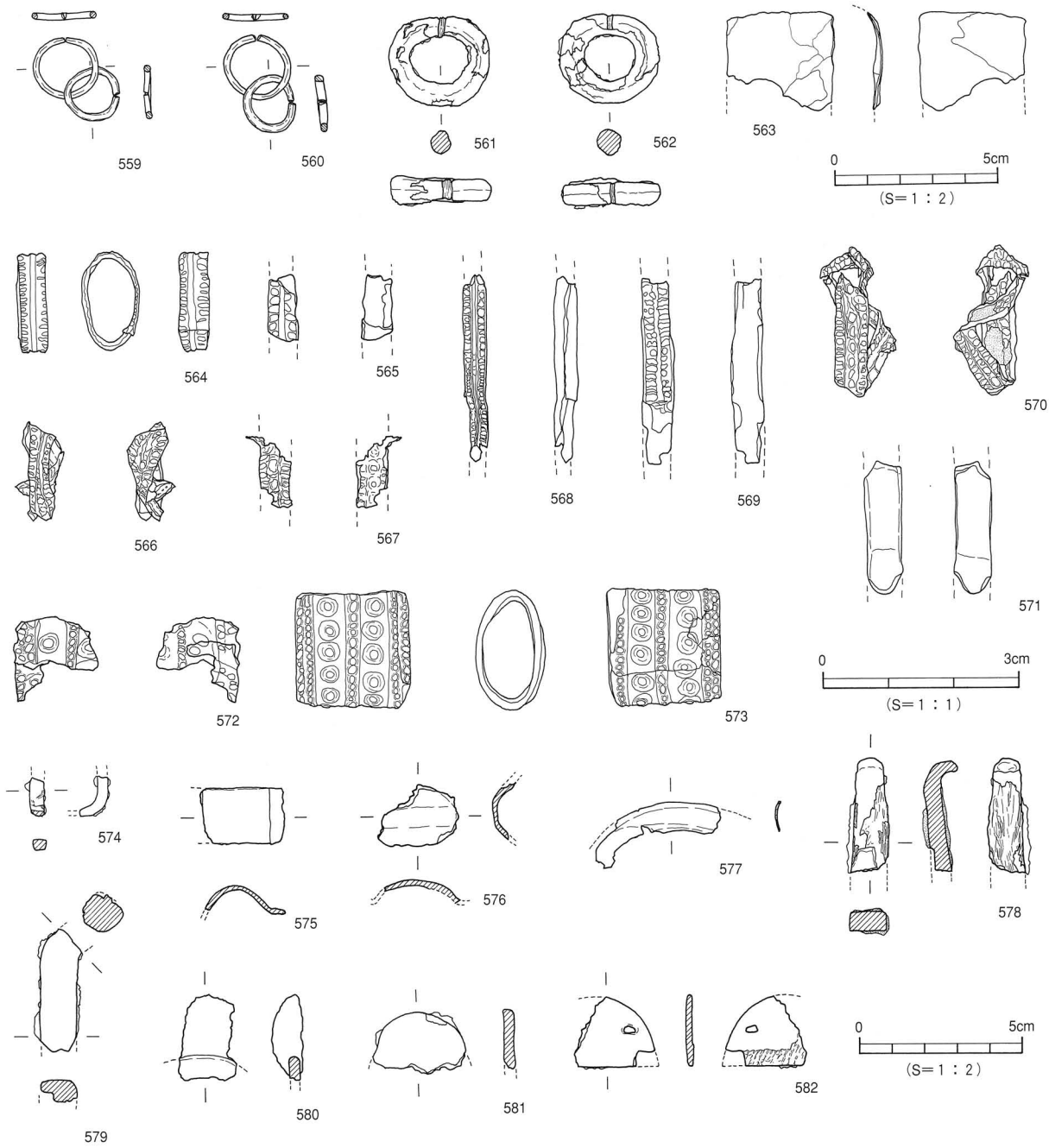
第56図511～515は鉄製の鎖、第56図516～第57図539は飾り金具である。516～522は中央部の盛り上がる木葉形の飾り金具で、中央に並ぶ２つの鋲によって固定すると考えられるが詳細は不明である。523～527は隅丸方形あるいは方形状の板を２つの鋲で固定するタイプ、528および529は３つの鋲で固定するタイプの飾り金具である。特に、526の外面には木質の付着が認められるがその原因は不明で



第56図　1号石室出土遺物実測図(4)



第57図　1号石室出土遺物実測図(5)



第58図　1号石室出土遺物実測図(6)

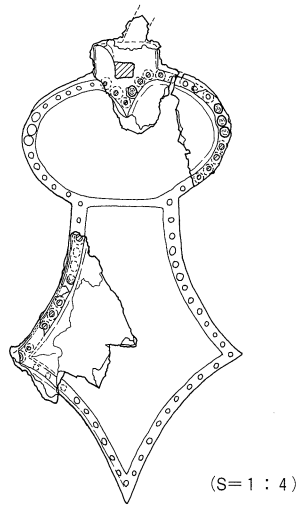
ある。さらに、529は裏面に革の付着が認められ、表面の一部に銅錆および金箔が確認できることより鉄地金銅張りの革金具であったと考えられる。530～532は表面に緩やかな膨らみを持つ方形の革金具である。比較的に滑らかな表面をもつが、金銅製品の面影を全く残さない。第57図533～539は細長い形状をした飾り金具で、裏面には繊維質(534～537)および木質（538・539）が付着している。等間隔に鋲を打ち込むことによって装飾するもので、本来は鞍の飾り金具(鞍橋)であった可能性が強い。

第57図540～542は鉸具である。540は木質が付着することより鋲状製品の可能性を残すが、541および542は同一形態の鉸具であると思われる。

第57図543および544は不明馬具である。おそらく同一個体で、楕円形をした環状製品の内部を十字に区画したような形態を呈し、中央部に進むにしたがいアーチ状に盛り上がるものと考えられる。

第57図545～548は辻金具である。545および546は環状辻金具で、環状部を４分割した位置に革製品の巻きついた痕跡を確認することが可能である。547および548は金銅製辻金具である。特に、伏鉢部の中心に一本の軸が貫通するタイプで、本来は飾鋲であったと考えられるが錆ぶくれのため詳細は不明である。（次章参照）

第57図549～558は剣菱形杏葉である。449および550は立聞部、551～554は身の上部（楕円部）、555～558は身の下部（剣菱部）で、すべて鉄地金銅張りの製品である。立聞部（550）の形態は立聞孔をもつ方形で、立聞部には吊手式の鉤金具が残存している。剣菱部（555）のコーナーの形状はやや異様で、あたかも外側に付属する部品があるかのような形態を示しており、またその裏面には木質の付着が認められる。復元すると立聞部を含めた全長が約24cmを測り（第59図）、さらに外周および楕円部と剣菱部との境に位置する部位の資料は出土していないものの、楕円部の上部に逆三角形の突出が垂下されることより境には縁金が渡されるものと考えられる。したがってこれらの特徴より、本資料は坂本編年のｃ形態に属し６世紀の第１四半世紀より第２四半世紀にかけての時期に属するものである。



第59図　剣菱形杏葉推定復元図

第58図559～562は耳環である。559および560は相対的に大きな銀環と金環とをつなぎ合わせた形態を示し、本来は垂飾付耳飾であったと考えられるがこれに連なる兵庫鎖および垂飾の出土は見られない。561および562は銅製の芯に銀製の板を巻いたものである。銅芯を折り曲げることによって成形するが、折り曲げた両端部の間には隙間が見られず比較的しっかりと密着している。

第58図563～573は刀の飾り金具である。563はその大きさより金銅装（銀装）大刀の鞘に取り付けられていた飾り金具の一部、564～570、572および573は刀子の飾り金具であると考えられる。これらの飾り金具は、玄室中央部南西よりの範囲にやや集中して出土する状況を示す。しかしながら奥壁側からの出土も若干みられ、また全て追葬時に敷かれた玉砂利面内部および敷石抜き跡の底部から出土していることより、初葬時に埋葬されていた遺物が追葬時に分散したものと解される。

564は銅板に金製の板を被せた飾り金具の完形品である。長径1.5cm、短径0.89cm、帯の幅0.45cm、外周の長さ3.9cmを測る。文様構成は中央に２条の凹線をめぐらせその両縁に連珠文を配するもので、これとほとんど同一の文様構成が565および568、569に認められる。565および569は同一個体と考えられるもので、幅0.4cmを測り564にほぼ等しい大きさであると推定される。564同様、銅板に金製の板を被せたものと考えられるが、やや銀色に近い輝きを発する。568は残存長2.8cm、幅0.35cmを測るもので、他と比べると幅がやや狭い印象を受ける。566および567は本来同一個体だと考えられるもので、中央に１列に並ぶ魚々子文とそれを挟む両縁の連珠文で構成される。また、その文様構成および形状より判断するに570と同一規格を有すると考えられる。570は完形品であるが変形が著しい。推定外周長約5.8cm、幅0.5cmを測る。572・573は連珠文と魚々子文を交互に配するもので、中央部に連珠文を１列、その両側に魚々子文を１列ずつ配し、両縁に連珠文を２列ずつ施している。573は一部欠損するがほぼ完形品で、外周長4.5cm、長径1.7～1.8cm、短径1.0～1.1cmを測り、平面形態は台形状を呈する。

571は銅板に金製の板を重ねたものと考えられるが、外面無地で装飾は全く確認できない。一部鈍

角的に折れ曲がり稜線を有するもので、金銅装大刀の責金具であると考えられる。

第58図574～582は不明金属製品で575および577は銀製、576はおそらく鉄地金銅張り、他は鉄製品である。574および578は鉤状に曲がる棒状のもので、内面には木質の付着が認められる。575～577は優品の飾り金具であると考えられるが小片のため詳細不明である。

2．小型竪穴式石室（2号石室）

天神山古墳築造後（1号石室構築後）、墳丘を造成して新たに設けられた石室である。後円部と前方部の接合部、墳丘の主軸上に構築されており、また石室主軸が墳丘主軸と直交していることよりある程度計画的に設けられた石室である可能性が高い。銀環をその副葬品として持つことより被葬者はある程度の実力者であると考えられ、また1号石室被葬者の近親者である可能性が高いがその真偽は不明である。石室の構築方法としては、補足的に盛土を行ったのち墳丘に直接墓壙を掘り込み、扁平で丸みを帯びた石材を積み上げると考えられるが、盗掘のため詳細は不明である。

(1) 石室の構造

1号石室同様、盗掘および石材採取の爪痕が著しく、床面に敷き詰めた玉砂利は攪乱を受け石材の大部分は抜取られている。しかしながら石室構築の際に石材の周囲に詰められた硬質土（裏込め）が明瞭に残存し、それより石室の構造をある程度推定することができる。

すなわち2号石室は長軸2.54m、短軸が0.81～0.98mを測る竪穴式石室で平面形態は羽子板形に近い長方形を呈していたものと考えられる。

また、2号石室の構築に用いられた石材の大部分が抜き取られていたのにも関わらず、石材が集中して遺存する範囲が認められる。それは石室の北東（鬼門）にあたる部分で、しかもその内部より近世小壺が埋納された状態で出土していることより、盗掘者が石室の破壊行為に対してなんらかの儀式を行った可能性がある。

(2) 遺物出土状況

上述のように床面に敷かれた玉砂利の遺存状況は良好とは言えず、出土した遺物も小破片あるいは小さな玉類に限られる。しかも、いずれの製品も散在した状態で出土していることより原位置を保っている遺物は皆無に等しいといえる。

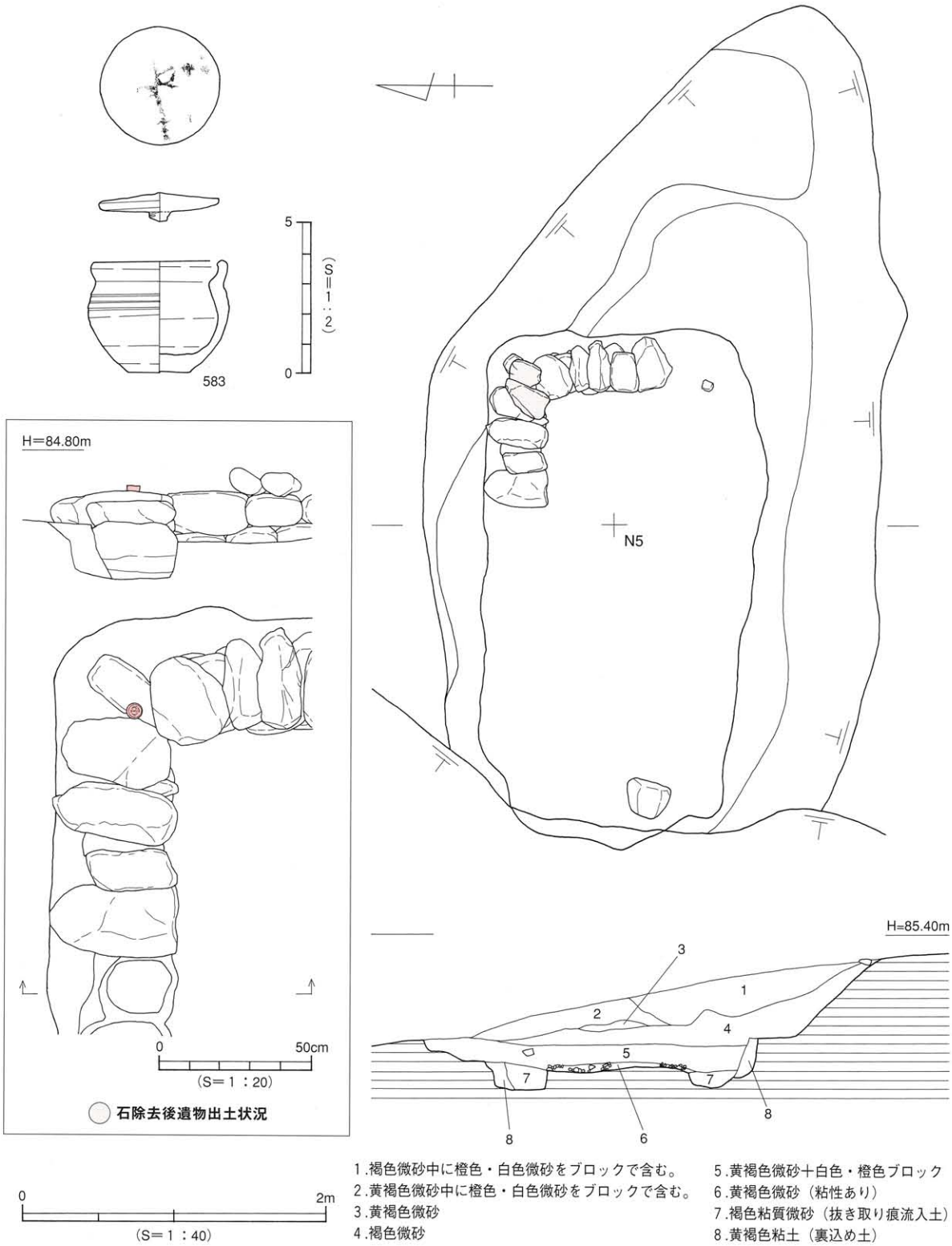
(3) 出土遺物

出土した遺物には、須恵器、土師器、耳環、鉄製品、人骨、玉類および近世小壺がある。

第62図584～586は須恵器でそれぞれ、坏身立上がり部、壺形土器の肩部、高坏形器台口縁端部の破片資料である。584は4㎝×1.5㎝程度の破片資料で復元径13.0㎝を測る。口縁端部に丸みを帯びた面を有し、端部内面には何ら段を持たない。585は外面にカキメ調整を施し、内面に指頭痕および横ナデ調整痕を残すもので、外面に自然釉の付着が顕著に見られる。器台（586）は端部が大きく外方に広がるタイプで復元口径が37.0㎝を測る。内面に丁寧な横ナデ調整が施され、外面に凹線文および波状文を交互にめぐらせると考えられる。

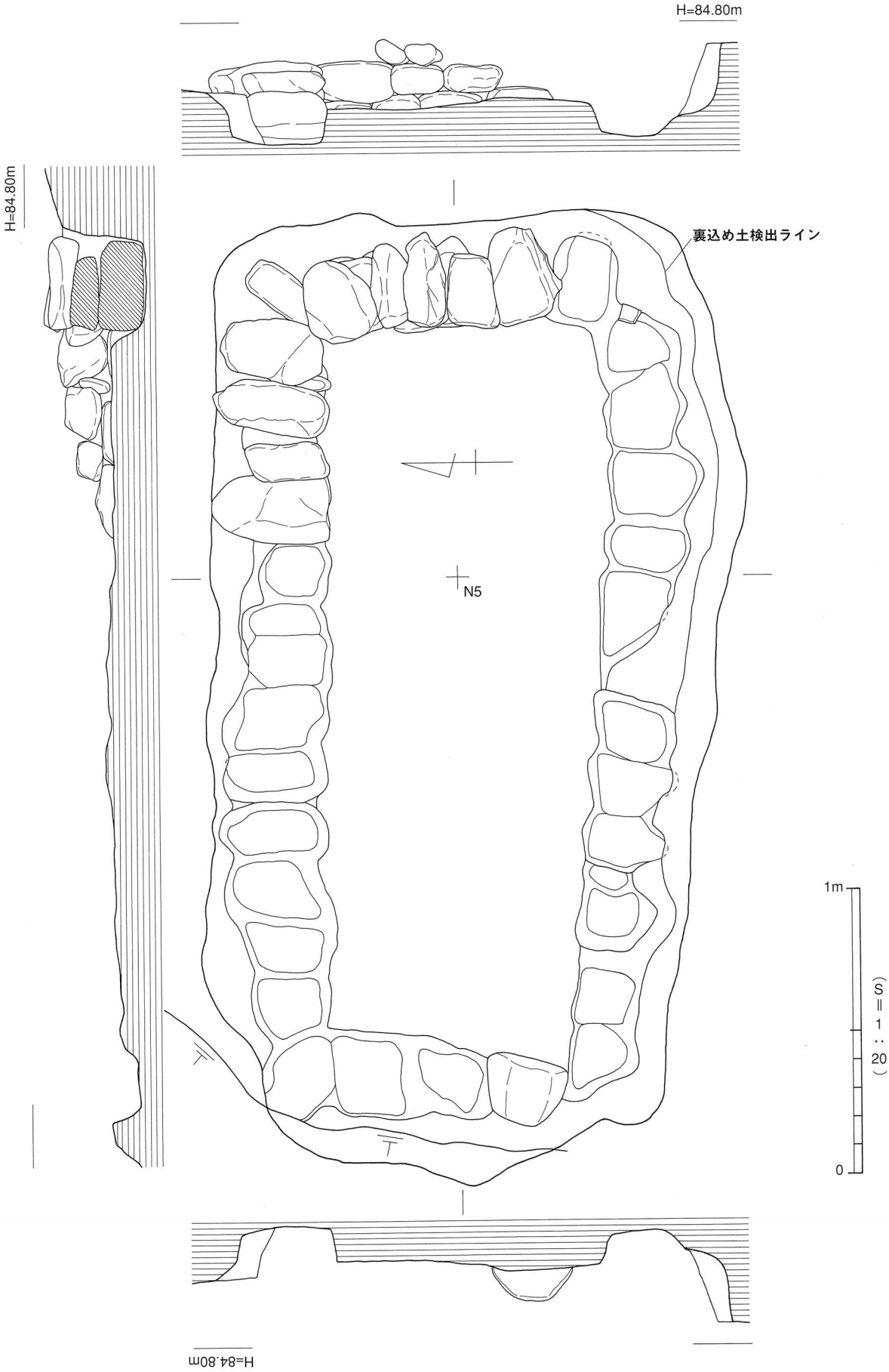
第62図587は銀製の耳環で石室東側攪乱土内より出土した。

第62図589・590は刀子小片、588は不明鉄製品である。589および590は本来同一個体であると考えられるが、腐食のため接合不能である。外面には多量の錆が付着し、内部には空洞化が認められる。588は本来両面を木質で挟む構造を採っていたと考えられるもので、外面に木質の付着痕が認められる。



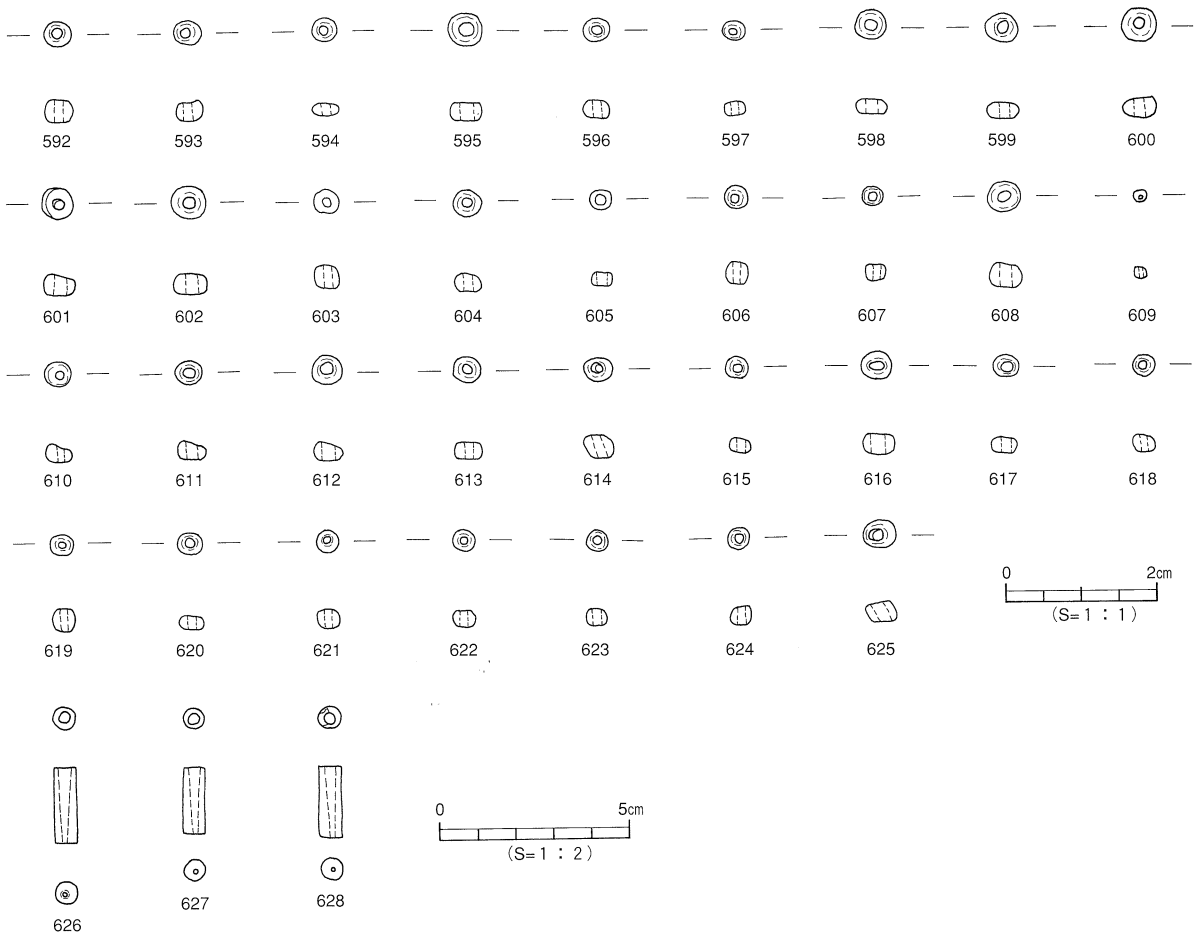
1.褐色微砂中に橙色・白色微砂をブロックで含む。
2.黄褐色微砂中に橙色・白色微砂をブロックで含む。
3.黄褐色微砂
4.褐色微砂
5.黄褐色微砂＋白色・橙色ブロック
6.黄褐色微砂（粘性あり）
7.褐色粘質微砂（抜き取り痕流入土）
8.黄褐色粘土（裏込め土）

第60図　2号石室測量図(1)・近世小壺出土状況



第61図　2号石室測量図(2)

第62図　2号石室測量図(3)・出土遺物実測図(1)



第63図　2号石室出土遺物実測図(2)

第62図591は上顎右側第二大臼歯で、頬舌径1.15cm、近遠心径1.0cmを測る。歯冠部のみの残存で近心歯頸部より舌側歯部にかけて欠損が見られる。頬側近・遠心咬頭にやや咬耗がみられ、特に遠心咬頭から中心溝に向かう隆線は咬耗により平坦になっており、さらに舌側咬頭内斜面にも咬耗がみられる。以上の所見より、第二大臼歯はある程度消耗していると思われ、現代の人にあてはめるなら20代後半から30代前半の人物のものであると考えられる。(小笠原善治)

第63図592～625はガラス小玉、626～628は碧玉製管玉である。ガラス小玉は石室中央部に散らばった状態で出土した。赤・青・黄・緑と色彩が豊かで、大きさも様々である。また特に609は径2㎜程度の非常に小さなものである。碧玉製管玉は全て片側穿孔されるもので石室東側に偏って出土した。銀環の出土地点もそれとほぼ重なることより、頭部を東側に向けて埋葬していた可能性がある。

第60図583は近世小壺でその形態より18世紀後半に属すると考えられる。石室の3段目の石材を1度取り外し、そこに詰め込んだ土の内部に直立した状態で埋納しており、埋納後取り外した石材を再度元通りに積み直している。小壺の内部には有機質が遺存し（現在分析中である）、さらに小壺に付属する蓋の内面には墨書（凡字か？）が記される。つまみを壺部内面に向けた状態、すなわち墨書を上面に向けた状態で出土した。

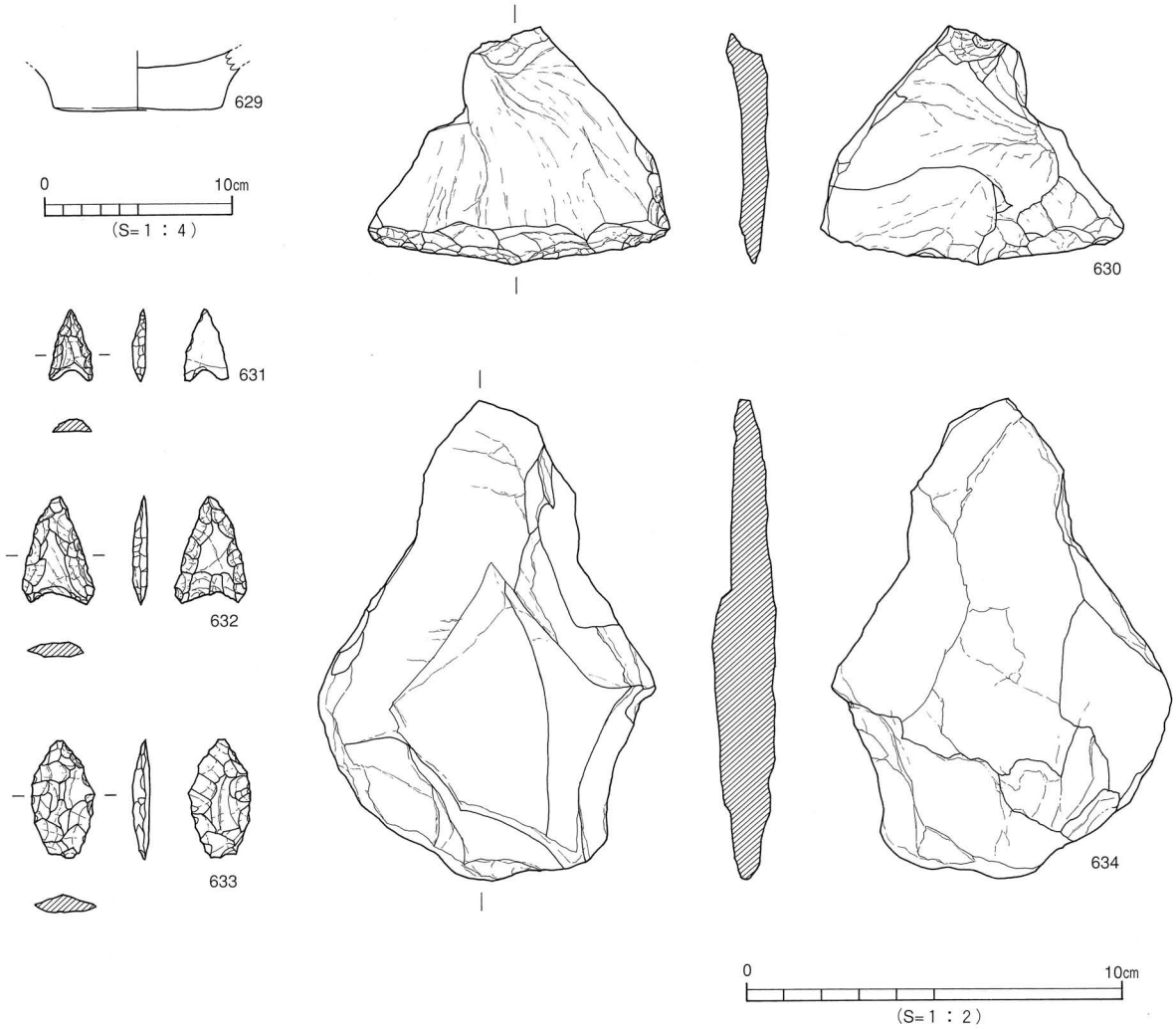
第Ⅶ章　古墳に直接伴わない遺物

1．弥生時代以前の遺物

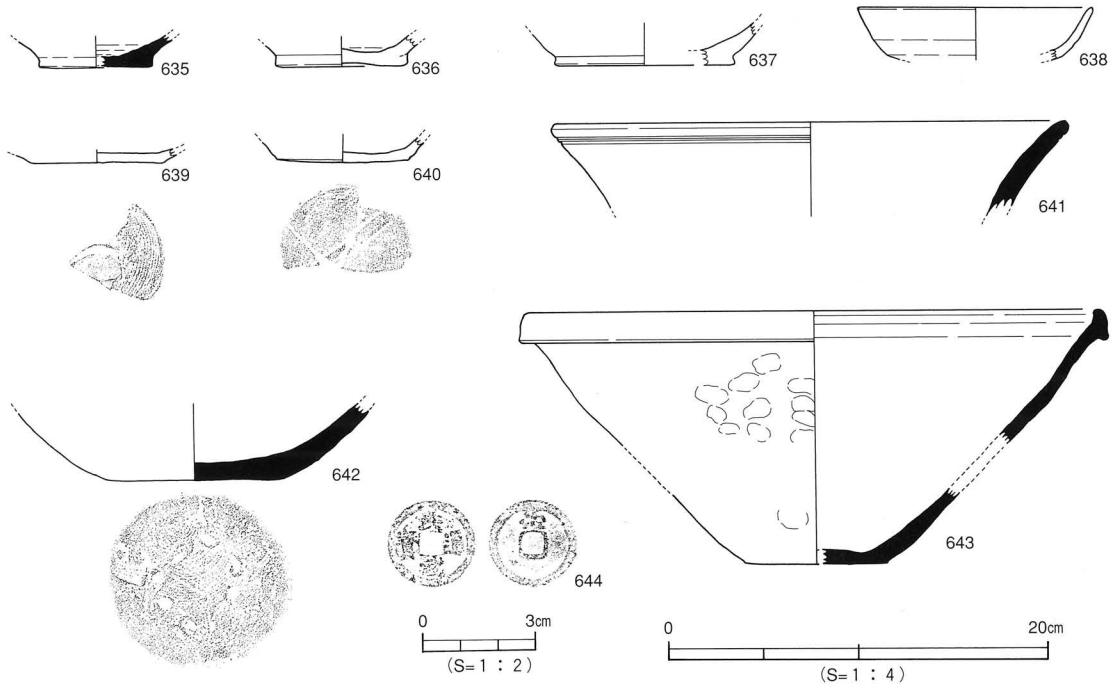
出土した遺物には弥生土器の底部および石器がある。第64図630～634はサヌカイト質の打製石器で、特に630および634は風化が著しい。631・632は長三角形の凹基打製石鏃で633は柳葉形を呈する。632および633は両面に打裂を加えるが、631は片面のみ打裂を加えて整形するものである。630はスクレイパー、634は打製石斧である。

2．古代以降の遺物

天神山古墳周辺は古代以降、人々の生活の場として機能していたらしく、墳丘流土上面より掘り込まれた掘立柱建物の痕跡と共に若干の遺物が確認された。掘立柱建物と思われる柱列は調査区の南東側、後円部東側に広がる平坦部分に認められ、出土遺物の大半もその近辺より出土した。古墳の調査が最優先と考えたため、調査期間の制限上遺構の調査は実施しておらず詳細は不明だが、出土遺物よ



第64図　弥生時代以前出土遺物



第65図　古代以降出土遺物

り10世紀代および13世紀後半～14世紀前半頃の遺構が存在すると考えられる。

第65図635～637は円盤高台を有する椀で10世紀代に属するものである。635は須恵質、他は土師質で底部に回転ヘラ切り痕を残す。

638は外面下半を回転ヘラ削りによって整形する杯、639および640は底部を回転糸切りによって切り離す杯である。13世紀代に属すると考えられ、特に640の底部には板状圧痕が残る。

641は須恵器甕形土器の口縁部で、口縁端部外面には２条の沈線がめぐる。

642・643は東播系須恵器の片口鉢である。底部に回転糸切り痕を残し、特に642の底部には７ないしは８本の角状突起を環状にめぐらせた置き台の痕跡が残る。底径が比較的に小さく口縁部が上下に大きく拡張されていることより13世紀後半～14世紀前半に属すると考えられる。

644は本邦模鋳銭である。明朝銭洪武通寶を対読に配し、背に治を置く「背治」の洪武通寶で、16世紀末から17世紀にかけて島津氏によって鋳造された加治木銭である。

第Ⅷ章　科学分析

㈶元興寺文化財研究所

1．分析内容

以下の遺物についてケイ光X線分析（XRF）により、表面からの非破壊分析を行い、必要に応じて顕微鏡写真撮影を行った。

99143—No.1 耳環（第58図561）
No.2 耳環（第58図562）
No.3 飾金具（第58図573）
No.4 耳環（第62図587）

99155—No.1 辻金具（第57図548）
No.5 耳環（第58図560）
No.6 空玉（第55図431）
No.7 不明金属製品（第58図563）
No.8 耳環（第58図559）

2．使用機器及び測定条件

・エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8㎜、管電圧45kV

・実体顕微鏡（オリンパス光学工業㈱　SZH—ILLD）

3．分析結果及び製作技法の推測

各遺物の調査箇所と顕微鏡写真は写真1、2に示した。XRFスペクトルはP96～99、検出元素は

No.	遺物名	分析箇所	検出元素
99143-　1	耳環	①表面銀色部分	Cu、Ag、Fe、Au、Hg
		②表層板の破断面	Cu、Ag、Fe、Au、Hg
		③芯の茶色部分	Cu、Ag、Fe、Pb
99143-　2	耳環	①表面銀色部分	Cu、Ag、Au、Hg
		②表層板の破断面	Cu、Ag、Fe
		③芯の淡緑色部分	Cu、Fe、Pb、Ag
99143-　3	飾金具	①表面金色部分	Au、Ag、Cu
		②表層板の端部	Au、Ag、Cu
		③縁の表層板端部	Cu、Au、Pb、Fe、Ag、(Hg)
		④地金内側	Cu、Fe、Pb、(Hg)
99143-　4	耳環	①表面灰色	Ag、Br、Fe、(Hg)
99155-　1	辻金具	①黒色膜状部分	Fe、Ag、Br、Cu、Cl、I、(Hg)
99155-　5	耳環	①金色環表面	Au、Ag
		②灰色環表面	Ag、Br、Fe、Cu、Mn、(Hg)
99155-　6	空玉	①表面黒灰色部分	Ag、Br、Fe、Cu、Mn
		②接合部とみられる部分	Ag、Br、Fe、Cu、Mn
99155-　7	不明金属製品	①凸面灰色部分	Ag、Br、Fe、Au、(Cu、Hg)
		②凹面銀色部分	Ag、Br、Au、Fe、(Hg、Cu)
99155-　8	耳環	①金色環表面	Au、Ag
		②灰色環表面	Ag、Br、Fe、Cu、Mn、(Hg)

表1　XRFによる検出元素

No.	重さ(g)		a	b	a'	b'	c	d	c'	d'
99143- 1	14.2		27.1	30.8	14.4	17.3	5.8	5.9	7.2	7.1
99143- 2	14.6		27.6	30.5	14.6	16.4	6.9	6.8	7.5	7.6
99143- 4	1.8		18.3	18.1	13.5	13.3	2.0	2.5	2.3	2.6
99155- 5	3.7	金	19.9	20.8	12.2	13.1	2.0	2.1	1.8	1.7
		灰	16.3	17.0	16.7	17.1	1.8	2.0	2.2	2.3
99155- 8	3.5	金	18.9	20.5	13.2	12.3	1.5	1.7	2.0	1.9
		灰	16.9	16.3	15.6	16.6	1.8	2.0	2.2	2.2

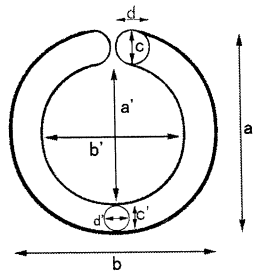


表２　耳環の法量（単位はmm）

表１、耳環の法量は表２のとおりである。各遺物についての記述文中の番号（①～④）は、写真と表１の番号に対応する。

99143—No.１、２耳環　（第58図561・562）

いずれの耳環も、付着した土と混在した形で銀色光沢のある箇所がところどころに観察され(①)、検出元素は主に銅（Cu)、銀（Ag）であった。金（Au)、水銀（Hg）の微小なピークも検出した。黒色板状のものの破断面（②）の分析結果も①と同様である。芯とみられる部位（③）は主に銅、他に鉛（Pb)、銀をわずかに検出した。

芯をとりまくような板状のものが存在することと検出元素とから、これらの耳環はいずれも銅製の芯に銀製の板を巻いたものとみられる。しかし、現状以上の土の除去が困難なため、遺物表面の状態が不明である。分析で得られた水銀と金のピークも大変弱く、板の上に鍍金（銀）などを施していた等の判断はできなかった。

またどの箇所からも鉄（Fe）を検出しているが、土壌成分の影響が大きいと考える。

99143—No.３飾金具　（第58図573）

表面の金色板（箔）の部分（①、②）からは金、銀、銅を検出した。地金の内側（④）は主に銅、他に鉛の微小なピークと、鉄を検出した。またピークの重なり等により判断が困難であるが、わずかに水銀が含まれている可能性もある。銅製の地金に金板（銀も含む）を巻き、表面の文様を刻んだものと推測する。④からはわずかながら水銀と鉛を検出しているが、縁の地金が見えている箇所（③）においても同様である。鉛は地金の銅に含まれていると考えられる。水銀の由来は不明である。

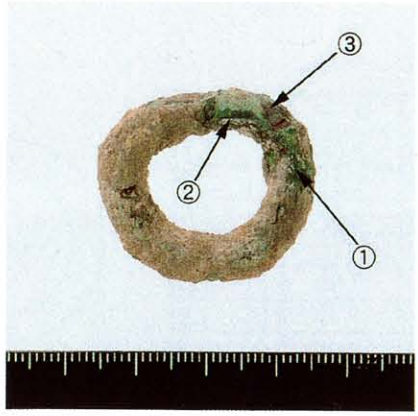
99143—No.４耳環　（第62図587）

主に銀と臭素（Br)、他に鉄を検出した。またピークの重なりにより判断できないが、わずかに水銀が含まれる可能性もある。銀製の耳環であり、埋納中に土中の臭素と結びついたとみられる。鉄は土壌の影響と考えられる。水銀の由来は不明である。

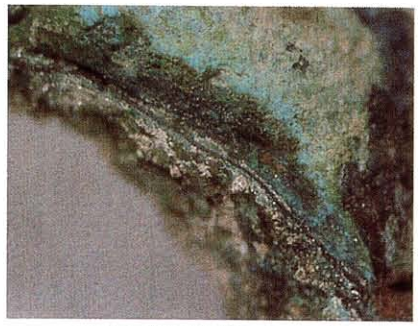
99155—No.１　辻金具　（第57図548）

黒色膜状部分（①）から主に銀、鉄を検出した。わずかに水銀のピークも得られた。塩素、臭素、ヨウ素（Ｉ）は銀と化合しているものと見られる。鍍銀が施されていた可能性がある。他にも水銀がわずかに検出される遺物が多く、この辻金具の水銀が当初からのものなのか、埋納後のものなのか、断定することはできない。

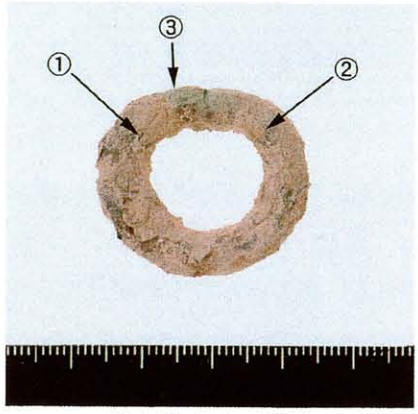
また②の部位に、太さ500μm前後の縒りのかかった糸状のものが確認された。直交しているので布



99143-No.1　耳環

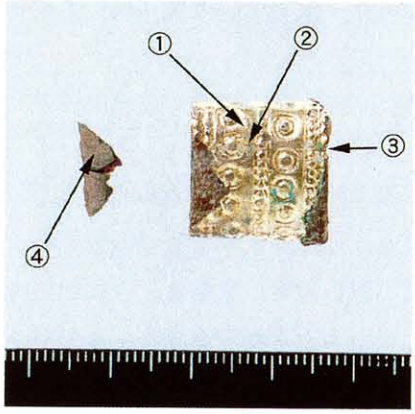


②表層板破断面　　(×8)



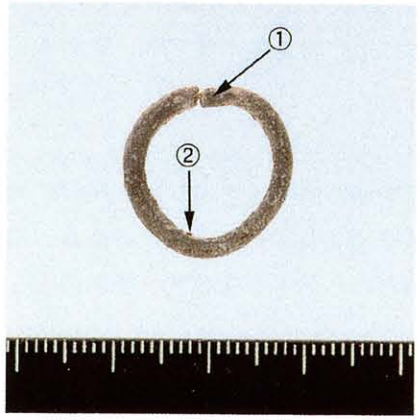
99143-No.2　耳環

①表面銀色部分　　(×8)

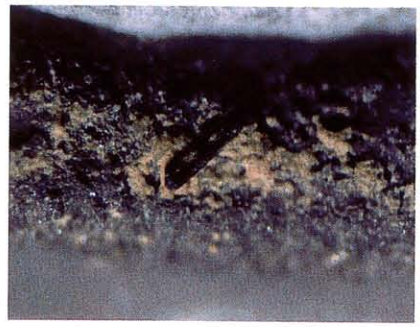


99143-No.3　飾金具

表面　板の接ぎ目　　(×4)



99143-No.4　耳環

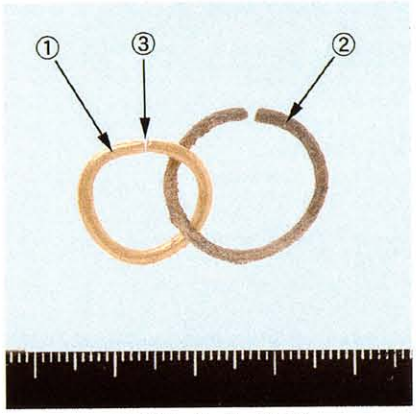


②付着物　　(×16)

分析箇所と顕微鏡写真 1

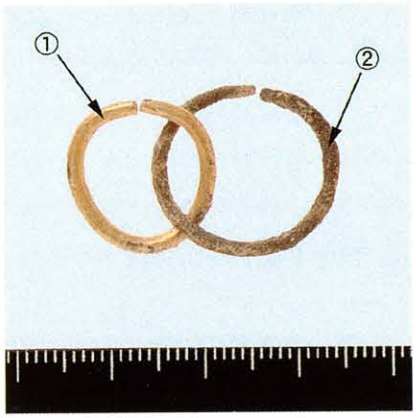
99155-No.1　辻金具

②の繊維　　(×12)

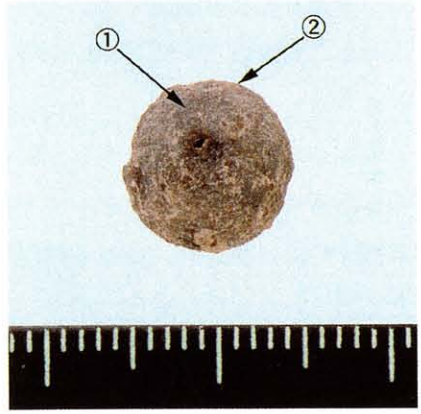


99155-No.5　耳環

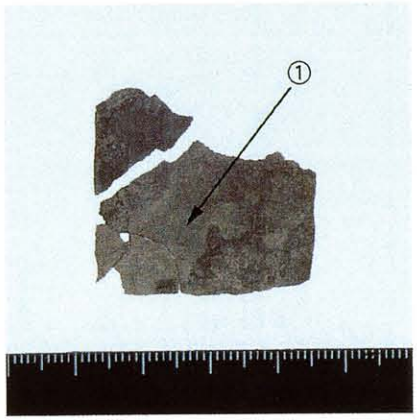
③接面　　(×8)

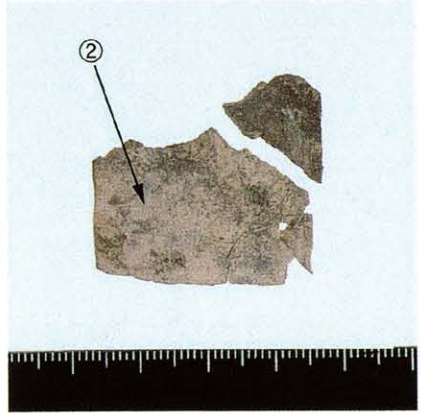


99155-No.8　耳環



99155-No.6　空玉





99155-No.7　不明金属製品

分析箇所と顕微鏡写真 2

であった可能性が考えられるが、長さ３㎜程度しか残存していないので、布であったと断定することはできない。

99155—№５、８耳環　（第58図660・559）

いずれも金色環と灰色環とが連結している。

金色環（①）は主に金（Au）を含み、他に銀（Ag）も検出している。銀を含む金で作られており、単一の素材で構成されているとみられる。№５の金色環の接面（③）の状態は写真１—２に示した。

灰色環（②）は主に銀（Ag）と臭素（Br）を検出し、銀製の環とみられる。臭素は土中で銀と化合したものと考える。

他に鉄（Fe）、銅（Cu）、マンガン（Mn）を検出した。水銀（Hg）が含まれている可能性があるが、他のピークとの重なりにより判断できない。鉄、マンガンは土壌成分に由来すると考える。銅と水銀は微小なピークであり、素材に含まれるものか、製作時に用いたものか、埋納中に腐食生成物にとりこまれたのか、不明である。

№５と８はおそらく対になるものとして作られたと考えられる。

99155—№６空玉　（第55図431）

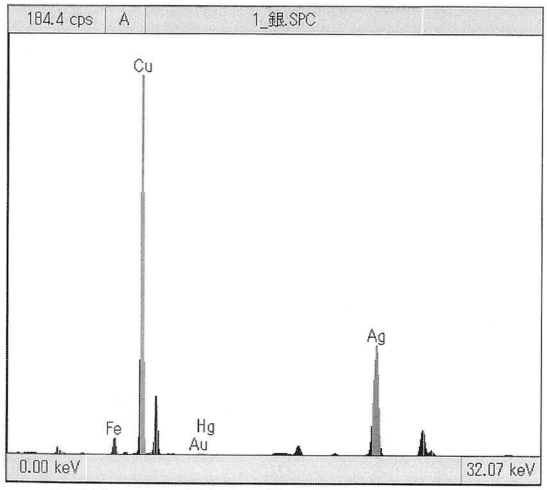
主に銀、臭素を検出しており、銀製の空玉である。№５、８の銀製環と同様、鉄、マンガン、銅を検出している。

接合部と見られる箇所（②）も特に検出元素に差異はみられず銀を融着した可能性が考えられる。

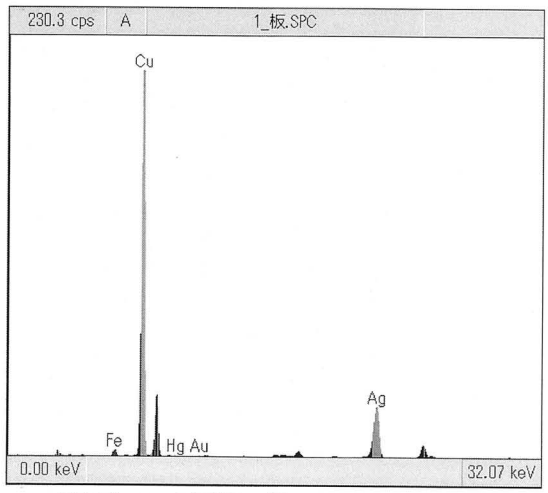
99155—№７不明金属製品　（第58図563）

主に銀、臭素、他に鉄、金（Au）を検出している。銅、水銀がわずかに含まれている可能性があるが、ピークの重なりにより判断することができない。銀製の板であると見られる。金が銀に含まれているものなのか、鍍金などを施していたことによるものなのかは、不明である。

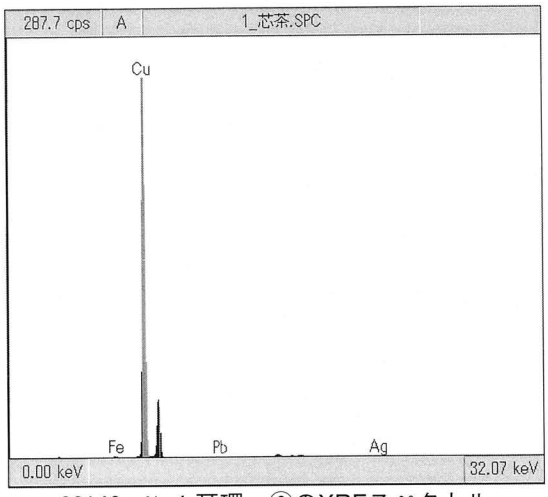
顕著に水銀を検出した9914—№１、２以外の遺物からも、水銀を検出した（99155—№６除く）。表面観察では水銀朱の付着は認められない。銀や銅の部材が腐食生成物に覆われていた部位に含まれており、いずれも非常に微小なピークとしてとらえられている。これらの由来は不明であるが、遺物に当初から含まれていた（製作時に使用された等）以外に、水銀を含むほかの遺物が腐食し、埋納中にそれらの影響を受けた可能性も考えられる。



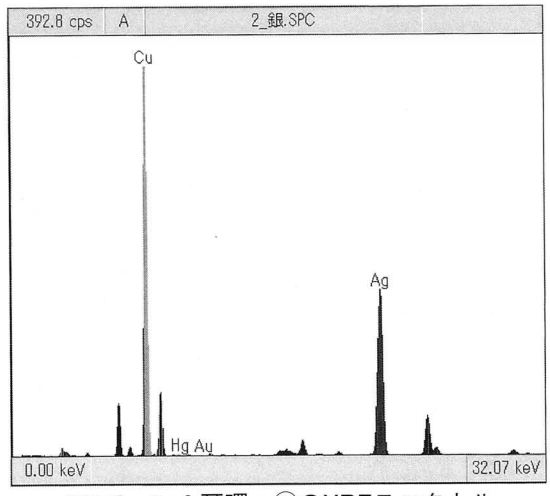
99143—№１耳環　①のXRFスペクトル



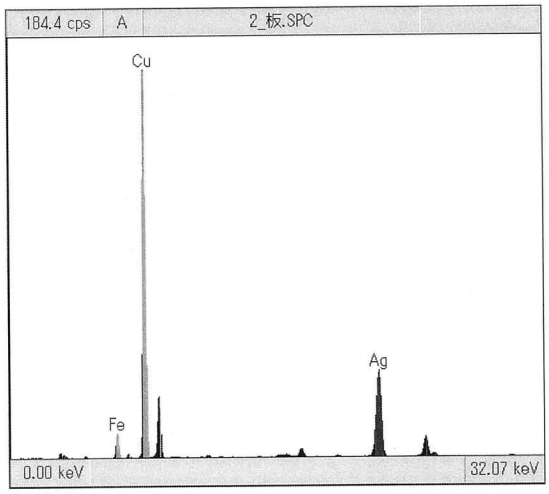
99143—№１耳環　②のXRFスペクトル



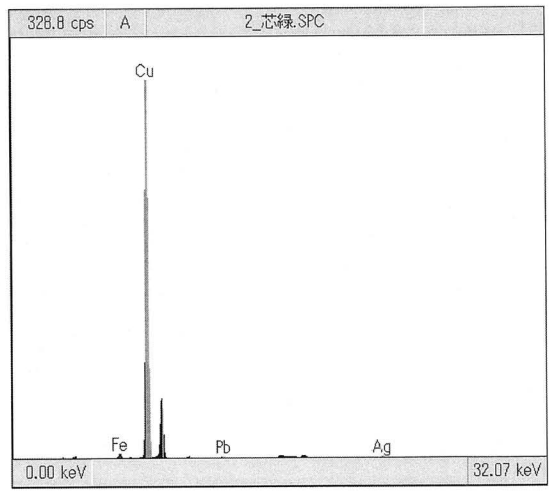
99143—No. 1 耳環　③のXRFスペクトル



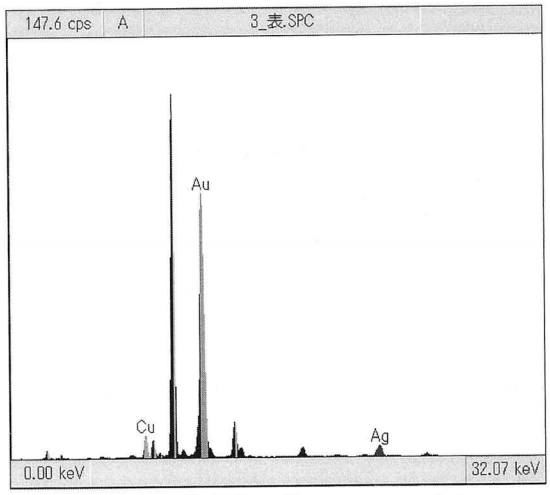
99143—No. 2 耳環　①のXRFスペクトル



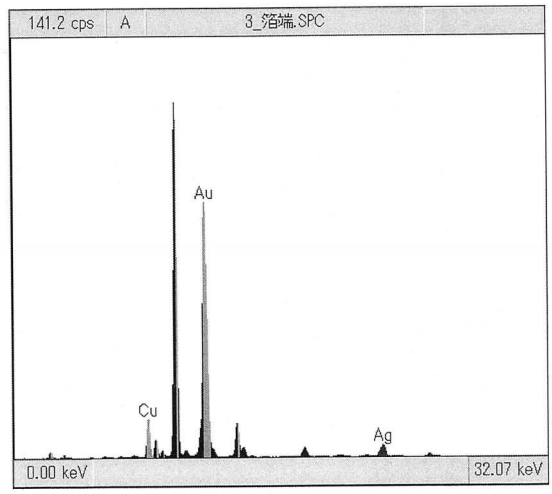
99143—No. 2 耳環　②のXRFスペクトル



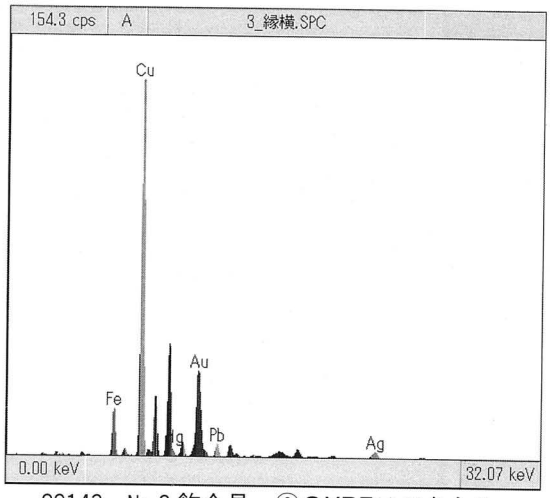
99143—No. 2 耳環　③のXRFスペクトル



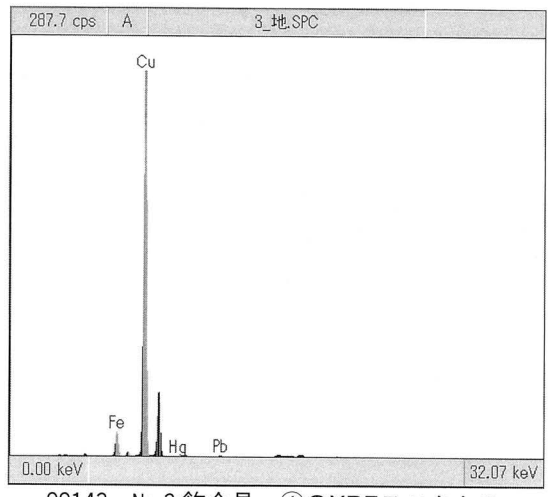
99143—No. 3 飾金具　①のXRFスペクトル



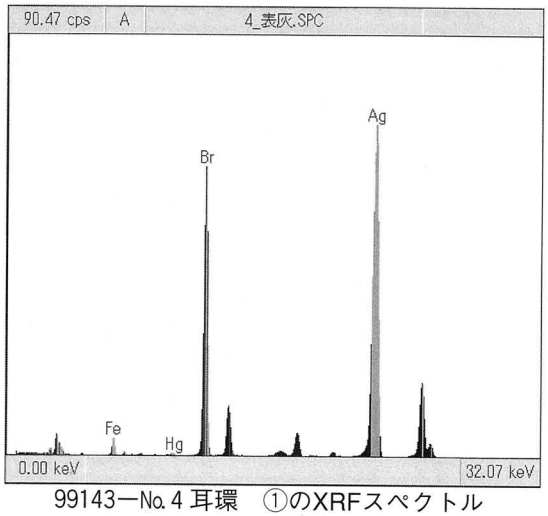
99143—No. 3 飾金具　②のXRFスペクトル



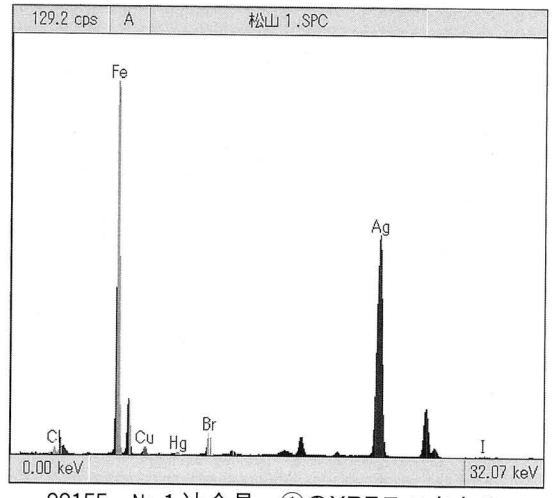
99143—No. 3 飾金具　③のXRFスペクトル



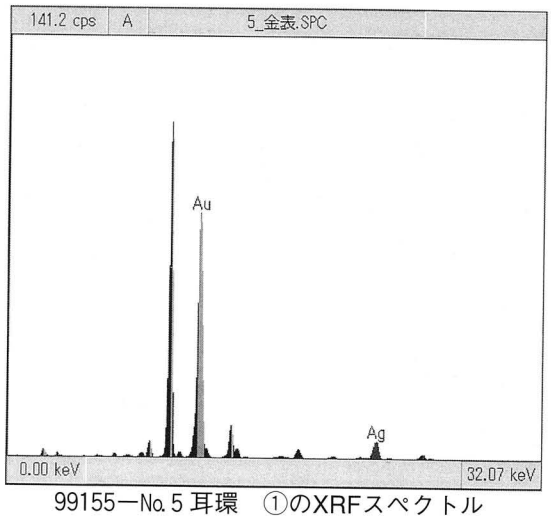
99143—No. 3 飾金具　④のXRFスペクトル



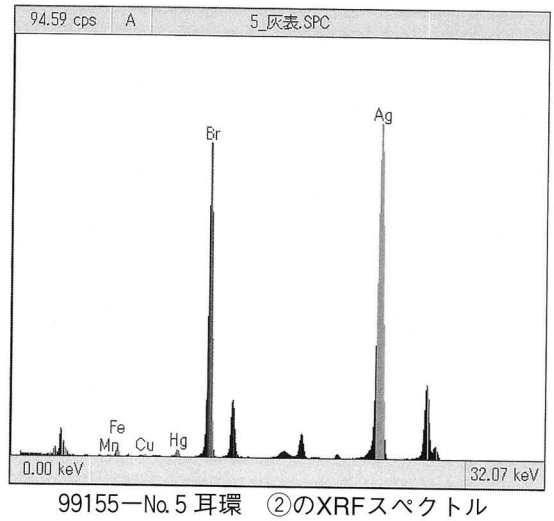
99143—No. 4 耳環　①のXRFスペクトル



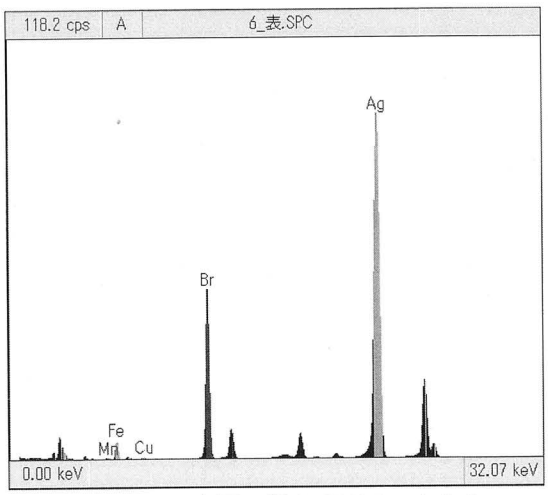
99155—No. 1 辻金具　①のXRFスペクトル



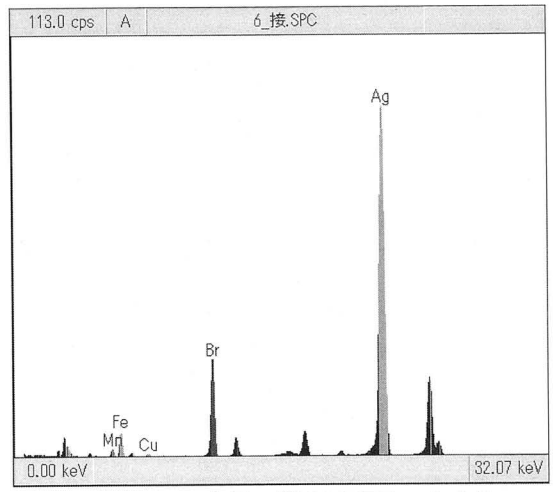
99155—No. 5 耳環　①のXRFスペクトル



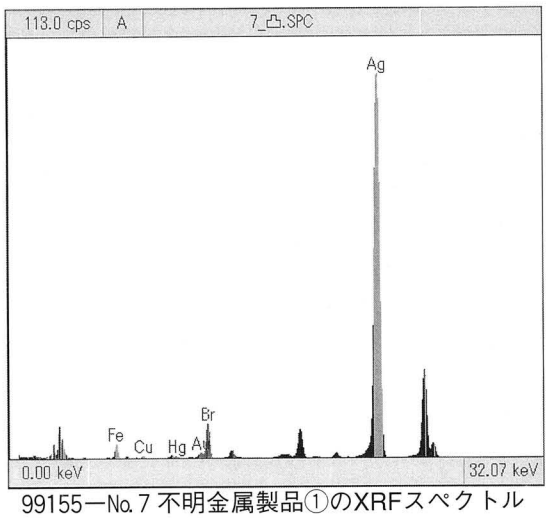
99155—No. 5 耳環　②のXRFスペクトル



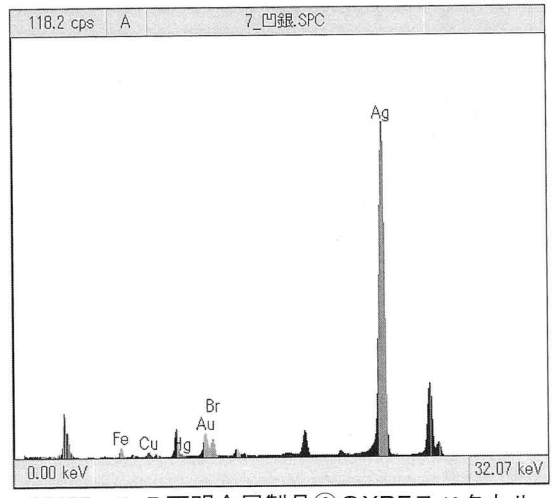
99155—No. 6 空玉　①のXRFスペクトル



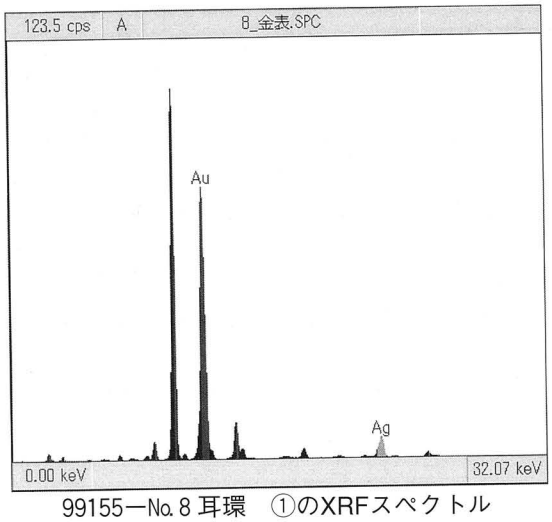
99155—No. 6 空玉　②のXRFスペクトル



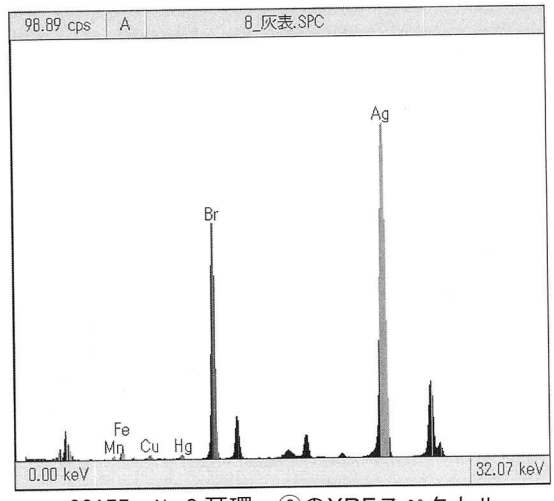
99155—No. 7 不明金属製品①のXRFスペクトル



99155—No. 7 不明金属製品②のXRFスペクトル



99155—No. 8 耳環　①のXRFスペクトル



99155—No. 8 耳環　②のXRFスペクトル

第Ⅸ章　総　　括

1．墳丘

天神山古墳は久米部小楯伝承の地、播磨塚古墳群内に発見された前方後円墳である。

調査の結果、全長32.5m、後円部直径23m、前方部長11m、同幅21m、くびれ部幅13mを測ることが判明した。また、前方部西側に形象埴輪を樹立させたテラス状方形区画を有し、段築テラス部分に円筒埴輪列を配する２段築成の前方後円墳であると考えられる。

墳丘の築造は先ず最初に地山整形をおこない、その後に石室および後円部の築造、続いて前方部を築造する。また特に、後円部築造開始後、前方部盛土開始以前の段階に後円部北側にて土師器壺形土器を用いた祭祀行為の痕跡を確認しており、今後同様な事例の増加に期待したい。

2．墳丘出土遺物

天神山古墳の墳丘上および墳裾流土内からは多量の埴輪、須恵器が出土した。

埴輪には普通円筒埴輪に加え朝顔形埴輪および形象埴輪が出土しており、特に出土した普通円筒埴輪の中には口縁部にタガを有するタイプの出土をみた。また、口縁部に細いタガを有するタイプとタガをもたないタイプは同一集団内で製作された可能性が高く、それぞれが規格的に作られている。

口縁部に太いタガをもつタイプも同様に同一集団内で製作された可能性が高いといえるが、絶対的に出土量が少なく、口縁部タガと基底部最下段タガしか有さない個体（第19図10）を含むなど、その特殊性から判断して特別な意味のある埴輪であったのかも知れない。また、口縁部にタガをもたないタイプの埴輪の中にも基底部が異様に高く、タガの本数が他よりひとつ少ない個体（第20図17）が含まれるが、これも同一の工人集団によって製作された可能性が高い。しかしながら、これが特殊な埴輪としてとらえられるものか、ひとつの変異の範疇で捉えられるものかは判断できない。

朝顔形埴輪は口縁にタガをもたない普通円筒埴輪と筒部以下が同じであるため、判断可能な個体が少ないのが難点である。しかしながら肩部より上位部分の個体数より判断して、本来は相当数が樹立されていたものと考えられる。

形象埴輪には盾、蓋、家、動物が出土しており、特に盾形埴輪に関しては３種類の出土をみているなど今後の埴輪研究に不可欠な資料を供した。

天神山古墳出土埴輪より推定される古墳の築造年代は以下のとおりである。

①口縁部にタガをもつ普通円筒埴輪は通常５世紀代にみられるが、外面に２次調整がみられず、タガの形状が断面三角形に近いこと。

②朝顔形埴輪の肩部に施されるスカシの形状が三角形および四角形を呈すること。

③盾形埴輪にみられる盾面と基部の接合方法が、いずれも盾面の側片部を基部の両側に貼り付け少量のくさび形粘土を挟むもので、盾面の中央部が突出したようになっていること。

④家形埴輪壁体部の断面形状が隅円を呈すること。

これらより総合的に判断して６世紀でも５世紀に非常に近い時期の埴輪であると考えられ、したがって天神山古墳の築造年代は６世紀初頭～前半であると考えられる。

須恵器は東くびれ部より出土した大甕のほかに、蓋坏、高坏、瓿、子持台付壺、百済系？壺形土器、高坏形器台、筒形器台などがある。蓋坏および高坏、瓿の形態より６世紀代を通じた時期（Ⅱ型式１段階～Ⅱ型式４段階、MT15～TK43）の遺物が出土しており、墳丘の築造（初葬）から追葬までの期間がそれに重なるものと考えられる。

３．石室

(1) １号石室

墳丘築造と同時に構築された１号石室（中心主体）は横穴式石室で、床面構造より少なくとも二度の埋葬が推定できる。初葬時は玄室内に人頭大の自然石を敷き詰めていたと考えられ、追葬時にその多くが抜取られ小さな玉砂利を敷き詰めた床面に改修される。また、羨道部を複室的に利用することを確認したが、これが何度目の追葬に伴うものなのか断定できない。

石室は奥壁より若干の孤を描きながら入口部に向けて幅狭になっており、玄門部の床面には梱石の抜き跡がある。また本来、この部分に立石が立てられていたと考えられ、明らかに礎石として用いられた石材を両サイドに検出した。礎石として利用された石材は壁体には組み込まれておらず、したがって石室のプランとしては無袖で壁体から遊離した立柱を立てて両袖様にしていたと考えられる。このような石室の構造は、愛媛県内では県東部の伊予三島市に所在する小規模な（全長30m）６世紀中頃の前方後円墳、経ヶ岡古墳に類例があり、銀製空玉、冠状金具、心葉形杏葉、釣鐘形鏡板を含む数々の金銅製品と共に、本来剣菱形杏葉とセットを成しその後解体したとされるｆ字形鏡板付轡が出土していることはきわめて興味深い。

また、石室の開口方向は特殊で後円部の後ろ側に開口している。しかし、同様に前方後円墳の後円部背後に石室が開口する例として、松山市桑原町にかつて存在した三島神社古墳（MT15～TK10）が知られ、近隣地区に共通性が見出せることは非常に興味深い。

１号石室内出土遺物には須恵器、銀製空玉、刀子および刀子の飾り金具、辻金具、剣菱形杏葉などがある。床面が追葬時に改修されることや大規模な盗掘および石材採取が行われていることより、原位置を保つ遺物は皆無に等しい。そのうち銀製空玉および垂飾付耳飾は追葬時に副葬された可能性が高く、玉砂利面（追葬時床面）上面より集中して出土した。またそれとは対照的に、出土遺物の大部分は追葬時に厚く敷かれた玉砂利の隙間あるいは内部に混在した状態で出土しており、特に刀子飾り金具および剣菱形杏葉などの中には、初葬時に敷かれていた石の抜き跡の底部から出土した個体が含まれることより、それらは初葬時に副葬されてそのまま追葬時の床面に紛れ込んだ可能性が高い。

以上のことより石室内に含まれる遺物には初葬時副葬品と追葬時副葬品の両方が混在する可能性が高く、以下に出土遺物の検討を行いそれにより１号石室が構築された時期を求める。

石室内出土須恵器は非常に少なく、さらに所属時期が明確にわかる遺物も数点に限られる。しかしそのような中で「３方スカシを有し長大化した脚部をもつ無蓋高坏（第53図331、334・332、335）が存在」し、その中には「坏部外面に波状文を施し端部内面に形骸化した段を有する個体（331）が含まれること」が認められ、これらの特徴より１号石室の構築時期はMT15併行期（Ⅱ型式１段階～Ⅱ型式２段階）に属すると考えられる。また他の土器についても、TK10～TK43の範疇に収まるものであると考えられる。さらにそれと剣菱形杏葉の特徴より導き出せる時期（６世紀第１四半世紀～第２

四半世紀）および、刀子飾り金具にみられる文様構成（連珠文と魚々子文）より導き出せる時期（5世紀末～6世紀後半）は大きく矛盾するものではない。

つまり1号石室はMT15併行期に構築され、TK43段階まで使用されたと考えられ、したがって1号石室を構築しながら同時に築造した墳丘の築造年代、墳丘の築造と同時に墳丘に樹立した埴輪の所属時期もMT15併行期（6世紀初頭）であると考えられる。

(2) 2号石室

2号石室は墳丘築造後、墳丘長軸ラインに直交する配置で墳丘盛土を切って構築された小竪穴式石室で、被葬者は年齢が20代後半～30代前半の人物であると想定される。石室内出土遺物は極端に少なく、したがって構築時期を確定する資料に乏しい。しかしながら、1号石室の構築年代および墳丘流土内出土遺物より判断して、少なくともTK10からTK43までの間には構築されたと考えることが可能で、6世紀の中頃には設置されていた可能性が高い。

また石室の北東コーナーに埋納された近世代の陶器小壺は、おそらく石室破壊（盗掘）時に残されたと考えられるもので、古墳盗掘に伴う民俗事例として非常に興味深い資料を供した。

以上、播磨塚天神山古墳の発掘調査によって、6世紀初頭に位置付けられる前方後円墳の実体をある程度解明することができた。当古墳の発見により松山市南東部に広がる旧久米郡域に新たなる首長墓の存在が明らかとなり、当地域の重要性がますます高まったといえる。さらに近年、天神山古墳の北側約1.5km離れた位置に6世紀中頃の前方後円墳である葉佐池古墳が発見・調査されており、松山平野に分布する首長墓の動態をもう一度見直す時期にきているのではなかろうか。

［主要参考文献］

田辺昭三1981 『須恵器大成』角川書店

中村浩1981 『和泉陶邑窯の研究―須恵器生産の基礎的考察―』柏書房

川西宏幸1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 64－2』

坂本美夫1985 『馬具』考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社

坂本美夫1996 「剣菱形杏葉類の階層性とその背景」『研究紀要12』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

田中秀和1994 「畿内における盾形埴輪の検討―革盾模倣盾形埴輪を中心として―」『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会

三輪嘉六・宮本長二郎1995 「No.348 家形埴輪」日本の美術5 至文堂

大庭脩・三宅正浩・一瀬和夫ほか1996 『金の大刀と銀の大刀 古墳・飛鳥の貴人と階層』大阪府立近つ飛鳥博物館図録9

石井隆博1997 「三ッ城古墳の築造企画」『大型古墳の築造と企画』第3回三ッ城古墳シンポジウム記録集 東広島市教育委員会

樋口吉文1997 「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会

江浦洋ほか1998 「蔵塚古墳」財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第24集

前園実知雄1993 「斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書 分析と技術篇」奈良県立橿原考古学研究所

岡田敏彦1984 「経ヶ岡古墳」『四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

冨田尚夫2000 「愛媛県における前方後円墳」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集

栗田茂敏2001 「播磨塚天神山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報12』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

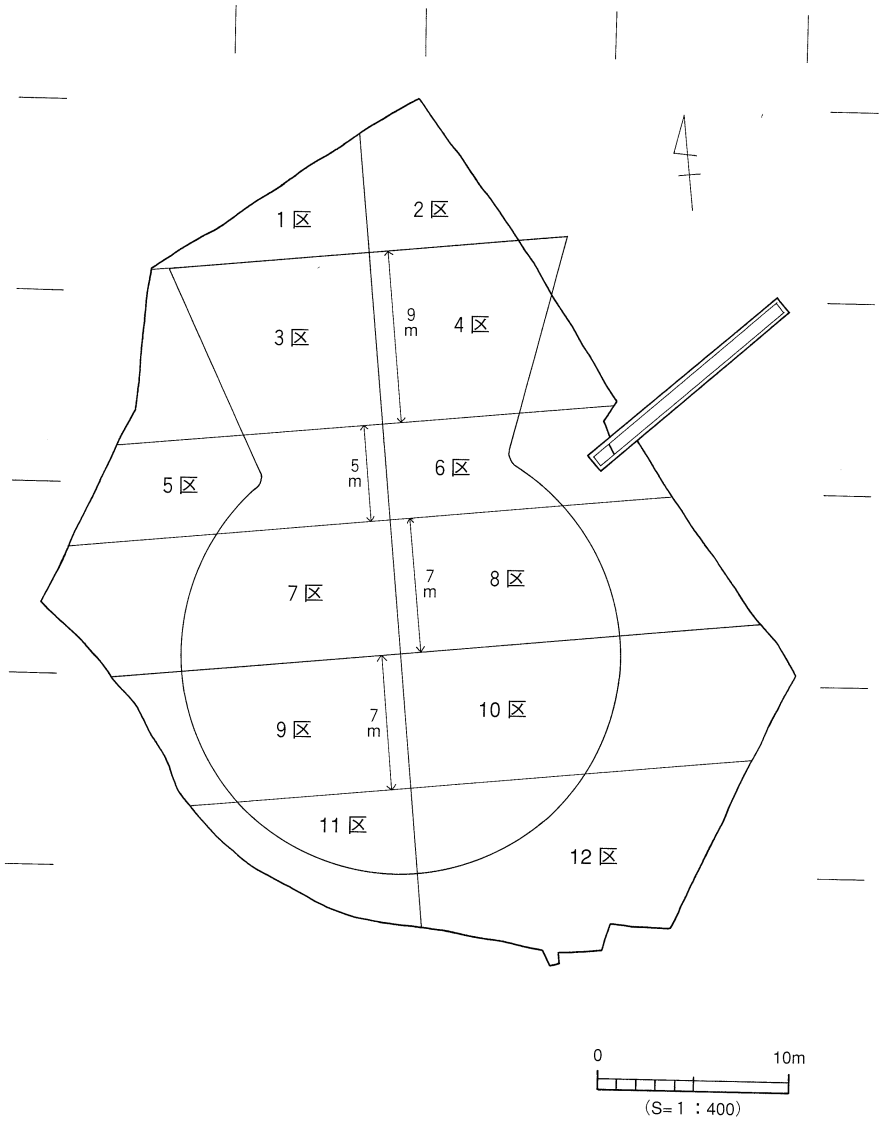
山内英樹2000 「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(1)―谷田2号窯出土資料の再検討―」『紀要愛媛 創刊号』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

《埴輪観察表》

播磨塚天神山古墳の「遺構および出土遺物の測量作業」は第Ⅲ章―第７図に示したようなグリットを基準に実施したが、「遺物の取り上げ作業」はその所属を明確にするために墳丘を12区に区分けし、（前方部前面東・西、前方部東・西、くびれ部東・西、後円部北側東・西、後円部南側東・西、後円部南端東・西）そのグリットにしたがって実施した。（第66図）

焼成は須恵質、半須恵質、土師質（硬）、土師質（軟）に分け、基本的に酸化焔焼成されたもので比較的軟質、且つ外見が鮮やかな褐色であるものを土師質、還元焔焼成され極めて硬質、外見が鈍い褐色あるいは灰色を呈するものを須恵質とした。またそれらの中間のものを半須恵質とし、土師質のなかでも非常に脆く焼成が劣悪なものを土師質（軟）として区別した。

なお、「口縁端部形状」および「タガ形状」は第Ⅴ章―第16図・第17図に示した分類に基づく。



第66図　出土遺物取り上げグリット配置図

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
2	円筒埴輪	半須恵質	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	32.7	①	Ⅱ		5区	2段目タガのやや上位以下基底部まで不明。ほぼ完形品。内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
3	円筒埴輪	半須恵質	外面：淡黄褐色 内面：淡黄色	口縁部	32.3	①	Ⅱ		6区	
4	円筒埴輪	土師質 （硬）	外面：褐色 内面：褐色	口縁部	36.4	①	Ⅱ		6区	
5	円筒埴輪	土師質 （硬）	外面：橙褐色 内面：橙色	口縁部	37.4	①	Ⅱ		6区	基底部無し。ほぼ完形品。
6	円筒埴輪	土師質 （硬）	外面：淡橙色 内面：橙褐色	口縁部	36.4	①	Ⅲ		4区	タガの形状は、Ⅱタイプ似るがタガ上端の突出度が小さく、タガ下端の稜線がシャープなためどちらかといえばⅢタイプに近い。
7	円筒埴輪	土師質 （硬）	外面：褐色 淡黄褐色 内面：褐色 淡黄褐色	口縁部	28.5	①	Ⅰ		5区	
8	円筒埴輪	土師質 （硬）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	27.8	①	Ⅰ		2区	タガの整形は丁寧だが、スカシはやや雑に穿たれる。
9	円筒埴輪	半須恵質	外面：明褐色 内面：褐色	口縁部	39.7	②	Ⅰ		5区	基底部無し。ほぼ完形品。丁寧なナデ調整が口縁部タガおよび、筒部タガに施されている。
10	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	口縁部	28.2	②	Ⅳ？		5区	口縁部が異常に長く、口縁部に円孔を穿つ特異な個体である。タガは細く粗雑なもので、Ⅱタイプの退化したⅣタイプである可能性が高い。また、現存する最下部は外面調整の特徴より判断して基底部の可能性が高い。
11	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：明橙色 内面：明橙色	口縁部	31	③	Ⅲ	6.5＋α	6区	ほぼ完形品。基底部外面には、ヘラ状工具を用いた押圧が施される。
12	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：明橙色 内面：明橙色	口縁部	27.8	③	Ⅱ		5区	口縁部タガ無しタイプの円筒埴輪であるが、タガの形状は完全にⅡタイプ。さらに、器面調整にも特徴が見られ、埴輪作りの最終段階で口縁部を再度整形しなおした痕跡（内器面のハケ目調整痕）を残す。
13	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色	口縁部	34	③	Ⅲ		12区	
14	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	30.9	③	Ⅲ	19	6区	基底部径20cm。完形品。基底部が長く、筒部タガが3本の4段タイプの埴輪。基底部外面にヘラ状工具を用いた押圧あるいはナデを施すと考えられる。
15	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	19.5	③	Ⅲ	21.5	6区	東くびれ部円筒埴輪列樹立埴輪。埴輪土坑出土。基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。
16	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	31.8	③	Ⅲ	22.5	6区	東くびれ部円筒埴輪列樹立埴輪。完形品。基底部径21cm。基底部外面にヘラ状工具を用いた押圧痕を残す。
17	円筒埴輪	土師質 （軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	34.9	③	Ⅲ	29.5	5区	基底部径21cm。基底部が異様に長い完形品。基底部外面調整、ハケ目→へら状工具による押圧およびナデを施す。
18	朝顔形埴輪	土師質 （軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	40.8		不明		5区	内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

表3　円筒埴輪観察表1

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
19	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：明褐色 内面：明褐色	口縁部	50.6		不明		5区	内面はハケ目調整の後、雑なナデ。外面には雑なナデを施す。
20	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	口縁部	43.2		Ⅲ		NE区	
21	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	50.5		Ⅲ		5区	図上復元である。
22	朝顔形埴輪	土師質（硬）	外面：褐色 内面：褐色	口縁部	43.4		Ⅲ		5区	タガは、しっかりしている。口縁部の内面端部にハケ目調整痕を残すこと、受部から受部と口縁部との接合部分周辺にかけて丁寧にナデ調整されていることより判断して、口縁部と受部は別作りで後から接合した可能性が高い。また、口縁部外面にナデ調整を施す。くびれ部（受部と肩部の境）内径約14.2cmを測る。
23	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡褐色	口縁部	42		Ⅲ		6区	くびれ部（受部と肩部の境）内径約15cmを測る。
24	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	45.7		Ⅲ	15.5	4区	完形品。基底部径19cm。
25	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	不明	②	不明		5区	口縁部タガ端部には丁寧な横ナデが施されるが、外面は雑にナデつけたような感を受ける。
26	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色	口縁部	41.7	①	不明		6区	大型品。口縁部端部内面に横方向のハケ目調整痕あり。
27	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	口縁部	27.6	②	不明		3区・5区	口縁部周辺、ほとんど完形品。
28	円筒埴輪	半須恵質	外面：橙褐色 内面：褐色	口縁部	32.4	①	Ⅰ		5区	口縁部端面に擦痕あり。内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
29	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	口縁部	32	①	不明		6区	
30	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡褐色 内面：淡黄色	口縁部	32.4	①	不明		5区	
31	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	口縁部	30	①	不明		5区	
32	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	口縁部	34.6	①	不明		5区	
33	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	口縁部	33.6	①	不明		6区	
34	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄褐色 内面：淡褐色	口縁部	35.2	①	不明		5区	
35	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	口縁部	27	③	不明		3区	
36	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	33.6	③	Ⅲ		6区	

表4　円筒埴輪観察表2

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
37	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	28.6	③	不明		6区	
38	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	口縁部	32.4	③	Ⅲ		6区	
39	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	口縁部	29.8	③	Ⅲ		6区	
40	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	口縁部	34.8	③	Ⅲ		12区	摩滅が著しいため詳細は不明であるが、口縁部内面にハケ目調整痕を残す。
41	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡褐色 内面：淡褐色	口縁部	28.5	③	Ⅲ		6区	
42	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	36	③	Ⅲ		3区	
43	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	39.8		不明		3区	
44	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	口縁部	46.6		不明		12区	
45	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	43.4		不明		2区	
46	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	口縁部	48.8		不明		2区	
47	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部	46		不明		4区	
48	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色	口縁部	45.6		不明		6区	
49	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	口縁部	49.8		Ⅲ		8区	
50	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	受部	30		Ⅲ		5区	
51	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	受部	35.4		Ⅲ		2区	
52	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	受部	28.6		Ⅲ		6区	
53	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：淡橙色	受部	36		Ⅲ		3区	
54	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：褐色	受部	33.6		Ⅲ？		4区	
55	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	受部	36		Ⅲ		NE区	

表5　円筒埴輪観察表3

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
56	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	受部	35		不明		12区	
57	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	受部	37.6		Ⅲ		5区	摩滅が著しい。
58	朝顔形埴輪	土師質（硬）	外面：淡褐色 内面：淡黄色	くびれ部	17.2		Ⅲ		NE区	焼成良好で，堅固。タガはシャープ。
59	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	肩部	25.2		Ⅲ		5区	測定部位は、肩部最大径にほど近い部分。
60	朝顔形埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	肩部	21		Ⅱ		4区	受部と肩部の中間にめぐるタガが一部残存しているが、朝顔形円筒埴輪には珍しくⅡタイプのタガである。加えて、焼成が良好で堅固。
61	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色	肩部	13.5		Ⅲ		3区	
62	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	くびれ部	20.2		Ⅲ		3区	
63	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	肩部	26.6		不明		4区	
64	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	肩部	22		Ⅲ		6区	
65	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：明褐色 内面：明褐色	筒部	25.9		Ⅲ・Ⅳ		6区	タガの間隔が短いのが特徴。タガの幅が細く，そのためか調整は雑なものとなっている。
66	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	肩部	24.6		Ⅲ		8区	
67	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	肩部	24.5		Ⅲ		6区	
68	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	肩部	25.4		Ⅲ		2区	肩部に四角形（長方形）のスカシを有する。
69	朝顔形埴輪	土師質（軟）	外面：明橙色 内面：黄褐色	肩部最大径	29.4		Ⅲ		5区	肩部のスカシ形状は確認できなかった。摩滅、表面の剝離が著しいため外面調整およびタガの形状は明確でない。
70	円筒埴輪	須恵質	外面：灰褐色 淡橙褐色 内面：灰褐色	筒部	28		Ⅱ		5区	タガ上端に調整時に付着したと考えられる“布目痕”を残す。内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
71	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	筒部	48.1		Ⅱ	8.5＋α	5区	図面作業での接合復元資料である。基底部が残存すると考えられるが、端部を欠損するのでその高さは不明である。
72	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	基底部	24.2		Ⅱ	11	5区	基底部外面ハケ目調整。
73	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：淡黄褐色	基底部	27.5		Ⅱ	15.5	4区・6区	摩滅が著しい。基底部外面にハケ目調整痕を残す。
74	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	23		Ⅱ	9.8	5区	基底部外面ハケ目調整痕を残す。

表６　円筒埴輪観察表４

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
75	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	17		Ⅲ	20.5	6区	基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。筒部と基底部は接合しないが、同一個体であると考えられる。
76	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色	基底部	22		Ⅱ	11.5	5区	口縁端部を欠損する。ほとんど完形品。基底部外面にハケ目調整痕を残す。
77	円筒埴輪	須恵質	外面：淡褐色 内面：淡褐色	筒部	26.7		Ⅱ		4区	
78	円筒埴輪	須恵質	外面：灰褐色 内面：灰褐色	筒部	32.6		Ⅱ		8区	
79	円筒埴輪	須恵質	外面：淡褐色 内面：淡褐色	筒部	31		Ⅱ		5区	内面にナデ調整を施した後、工具でナデあげた痕跡を2条残す。
80	円筒埴輪	半須恵質	外面：褐色 内面：灰褐色	筒部	30.6		Ⅱ		6区	焼成は良好であるが、タガの貼り付けがずれるなどやや雑なつくりとなっている。
81	円筒埴輪	半須恵質	外面：淡橙色 内面：(灰)褐色	筒部	32		Ⅱ		5区	内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
82	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	筒部	27.8		Ⅱ		5区	
83	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	筒部	32.4		Ⅱ		6区	内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
84	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	29.2		Ⅱ		5区	
85	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	筒部	31		Ⅱ		5区	
86	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：明褐色 内面：明褐色	筒部	24.8		Ⅱ		6区	
87	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	筒部	25.2		Ⅱ		5区	
88	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	25.4		Ⅱ		5区	
89	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	筒部	30		Ⅱ？		4区	
90	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	筒部	29.2		Ⅱ		5区	
91	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	32.8		Ⅱ		6区	
92	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	筒部	26.9		Ⅱ？		4区	摩滅が著しく、タガの形状は不詳であるが、Ⅱ式でも最も粗雑なタイプ（つまみ出しただけのような感じ）である。
93	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	筒部	36		Ⅱ		5区	タガの形状はタイプⅣ（三角形）に近い。

表7　円筒埴輪観察表5

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
94	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：明褐色 内面：明褐色	筒部	39.6		Ⅲ		5区	上にいくに従って外反しながら広がることより、口縁部の可能性が有る。
95	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	筒部	23.6		Ⅲ		5区	
96	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	筒部	30.4		Ⅲ		2区	
97	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	筒部	23		Ⅲ		2区	
98	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	肩部	30		Ⅲ		6区	
99	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	筒部	24		Ⅲ		6区	
100	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	筒部	27.1		Ⅲ		6区	
101	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	31		Ⅲ？		4区	タガの貼り付けは粗雑で、シャープなⅢ式ではなく、Ⅱ式にも似た特徴を有する。
102	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	27.3		Ⅲ		3区	内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
103	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 淡黄褐色 内面：橙褐色 淡黄褐色	筒部	33.8		Ⅲ		6区	
104	円筒埴輪	須恵質	外面：淡灰褐色 内面：褐色	基底部	20		不明	11.3＋α	11区	基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。
105	朝顔形埴輪？	土師質（硬）	外面：黄褐色 内面：黄褐色	筒部	26		Ⅲ	不明	6区	焼成良好で堅固。タガは最下段タガであるためかシャープさを欠く。基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡をわずかに残す。
106	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄白色 内面：淡黄白色	基底部	19.2		不明	7.8	NW区	
107	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	23.6		不明	11.4＋α	6区	基底部外面にハケ目調整を施した後、底部調整として下半部にナデ調整を加える。
108	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	基底部	21.4		不明	10＋α	6区	外面ハケ目調整。
109	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	筒部	32		Ⅱ	13.6＋α	5区	摩滅のため詳細不明であるが、基底部外面にハケ目調整を施す。
110	円筒埴輪	土師質（硬）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	20		Ⅰ	10.5	5区	基底部、タテハケ調整後底部調整。２段目タガ上位まで残存すると考えられるが、接合資料ではなく合成復元である。内面にナデ調整を施した後、指でナデあげた痕跡を残す。
111	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	24.3		Ⅱ？	8.3	4区	摩滅のため器面調整は不詳である。タガの形状は摩滅のため断定できない。Ⅳの可能性あり。

表８　円筒埴輪観察表６

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
112	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：褐色	基底部	25.8		Ⅱ？	7.2	11区	摩滅のためタガの形状は不詳。Ⅳの可能性もあり。基底部外面にハケ目調整痕を残す。また、基底部の高さが極端に低い。
113	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	基底部	20.8		Ⅱ？	9.5	2区	
114	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：明橙色 内面：明橙色	基底部	22.3		Ⅱ	13	5区	
115	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	19.7		Ⅳ	9	7区	
116	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	基底部	23		Ⅳ？	8.5	5区	タガの形状は、最下段タガの形状。基底部の長さが極端に短いのが特徴である。外面調整は最下段タガの下に一部ハケ目が見られるものの、その他の大部分はナデ調整していたものと考えられる。
117	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	基底部	23.6		Ⅳ	10.5	5区	摩滅、表面の剥離が著しい。
118	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	20.3		不明	8.5＋α	NW区	基底部外面にハケ目を施す。
119	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	基底部	20.1		不明	不明	5区	外面を全面タテハケ調整によって仕上げる。
120	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	基底部	22.6		不明	10.4＋α	5区	摩滅のため詳細は不明だが、基底部外面にハケ目調整痕を残す。
121	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	基底部	23.8		不明	9.4＋α	6区	外面ハケ目調整。
122	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	基底部	24		不明	12＋α	5区	外面を全面タテハケ調整によって仕上げる。
123	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：(淡)橙色 内面：(淡)橙色	基底部	21.8		不明	不明	5区	
124	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	基底部	23.8		不明	不明	5区	外面を全面タテハケ調整によって仕上げる。
125	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡橙色	基底部	27		不明	不明	5区	外面を全面タテハケ調整によって仕上げる。
126	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	筒部	24.1		Ⅲ？	不明	NE区	基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡をわずかに残す。
127	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：褐色 内面：褐色	基底部	19.2		Ⅲ	21.2	6区	東くびれ部円筒埴輪列樹立埴輪。基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。
128	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	基底部	19.2		Ⅲ	21	NE区	埴輪土坑より出土（くびれ部出土）。内外面とも摩滅および表面の剥落が著しいが、基底部外面はヘラ状工具で押圧した可能性が高い。
129	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙色 内面：淡黄褐色	基底部	23		不明	19＋α	6区	東くびれ部円筒埴輪列樹立埴輪。基底部ほぼ完形品。内外面とも摩滅および表面の剥落が著しいが、基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。
130	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	21		Ⅲ	22	6区	東くびれ部円筒埴輪列樹立埴輪。基底部ほぼ完形品。外面下半にヘラ状工具を用いた押圧痕が顕著に認められる。

表９　円筒埴輪観察表７

番号	埴輪の種類	焼成	色　調	測定部位	cm	口縁部形状	タガ形状	基底部高さ	出土区	備　　考
131	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡黄色 内面：淡黄色	基底部	22		不明	14＋α	5区	摩滅が著しいため器面調整は不詳。
132	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	23.5		不明	14.9＋α	NE区	基底部外面にヘラ状工具を用いた押圧あるいはナデを施すと考えられるが、ゴツゴツした器面である。
133	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：明褐色 内面：明褐色	基底部	16.6		不明	25	NE区	埴輪土坑より出土（くびれ部出土）。基底部外面に稜を残し、表面は非常に滑らかで砂粒の動きが認められないことより、板状（ヘラ状）工具を押圧したと考えられる。
134	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：明褐色 内面：明褐色	基底部	18.4		不明	17.1＋α	NE区	埴輪土坑より出土（くびれ部出土）。外面にヘラ状（板状）工具を用いた押圧痕が顕著に認められる。また、板状工具の印影（きめの細かな板目）を残す。(18～20本／cm)
135	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙褐色 内面：橙褐色	基底部	20		不明	18.1＋α	2区	
136	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：橙色 内面：橙色	基底部	16		不明	17＋α	6区	埴輪土坑出土。基底部外面にヘラ状工具で押圧した痕跡を残す。
137	円筒埴輪	土師質（軟）	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	基底部	24.6		不明	15.5＋α	6区	内外面ともに工具？を用いたナデ（押圧）が施されると考えられるが、明確な稜を残さない。

表10　円筒埴輪観察表８

写　真　図　版

写真図版例言

1．遺構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ	トヨ／ビュー45G	レンズ	ジンマーS　240㎜
ストロボ	コメット／CA－32・CB2400（バンク・パラソル使用）		
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン・エクタクロームEPP		

3．白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD	レンズ	エル・ニッコール　135㎜
	ラッキー90MD		エル・ニッコール　50㎜
印画紙	インフォードマルチグレードⅣRC		
フィルム現像剤	コダックD－76・HC110		

4．写真のレイアウトは大西が行った。

【参考】『埋文写真研究』Vol.1～11

〔大西　朋子〕

巻末図版１

播磨塚天神山古墳全景（南より）

1 号石室出土遺物

2 号石室出土遺物